

資料

(昭和四十六年十月)

第十六回「合宿教室」(霧島)感想文集

—日本人としての自覚をもとめて—

社団法人 国民文化研究会

— “合宿教室” 16年の歩み —

回数	年 度	開催地	参加 人員	主 要 講 師
1	昭和31年	霧 島	92	広田洋二・日下藤吾・夜久正雄
2	" 32年	福 岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野晃
3	" 33年	佐 賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	" 34年	阿 蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒樹
5	" 35年	雲 仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	" 36年	雲 仙	208	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	" 37年	阿 蘇	215	福田恒存・木内信胤・黒岩一郎
8	" 38年	雲 仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	" 39年	桜 島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	" 40年	大 分	215	岡潔・花見達二・木内信胤
11	" 41年	雲 仙	240	福田恒存・木内信胤・戸川尚
12	" 42年	阿 蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	" 43年	霧 島	353	竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤
14	" 44年	阿 蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄
15	" 45年	雲 仙	491	小林秀雄・木内信胤
16	" 46年	雲 島	302	村松剛・木内信胤
累計参加人員				3,818名

第十六回「合宿教室(霧島)」全参加者の感想文と短歌詠草



霧島高原より遠く桜島を望む

と き 昭和四十六年八月六日から十日まで
 ところ 鹿児島県始良郡牧園町高千穂「霧島山上ホテル」
 参加者総数 三〇二名(ほかに、交通事情による欠席者四〇名)

目次

「はしがき」に代えて……………	理事長・小田村 寅二郎……………	2
今年の「霧島合宿教室」を振り返って……………	早大・四年・山口秀範……………	4
参加学生の大学名・参加人数……………		7
「合宿教室」の日程……………		8
「合宿教室」のあらまし……………		9
終了間ぎわに記した全参加者の走り書きの感想文……………		23
全参加者の短歌詠草……………	合宿中の創作作品……………	105
あとがき……………		126

“はしがき”に代えて

小田村寅二郎

本年後半のわが国は、政界も経済界も、民心の動向も、中共・ドル・沖繩などの問題を抱えて、大変に波瀾含みとなってきた。

かえりみれば、われわれ日本国民は、戦後二十六年に及ぶあいだ、敗戦の絶望的なショックと廃墟の中から立ちあがったのであるから、経済自立を目指して全国民が一致協力、歩調を合わせてきたのは、一応やむを得ないことであった。しかし、余りにもそれに一本調子となって、上から下まで、ただただ“経済的繁栄一途”の追求をしてきたことは、やはりこれからの日本にとって、容易に修正し難い大きな問題を残すことになったようである。それがいま、中共・ドル・沖繩などの諸問題に、深刻にからみ合ってきたのである。

日本国民は、もともと精神的に自己を鍛え合ってきた民族であった。日本人一人びとりは、自らを生きぬくことのほかに、それ以上の熱意をもって、“世のため、人のため”に生きることの意義と価値とを求めてやまなかつた国民である。その榮ある人生姿勢が、この二十六年間の“経済的繁栄一途”に災いされてしまった。そしてこの精神的劣弱な気風に便乗して、天下をわがもの顔に濶歩した進歩的文化人をはじめ、日教組流の劣悪な教育によって、今や国民一人びとりの心情の中に、日本人本来のものがまことに影薄くなってきてしまった。

この重大かつ当面的な課題——それは、政治家も教育者もその必要性を口では喧伝するが、一向にまともに取り組むのを避けてきた課題——これに真正面から取り組んできたのが、過去十六年間積み重ねてきたこの「合宿教室」であった。今年もまた全国から青年・学生三〇〇名の参集を見、村松剛・木内信胤両先生を外来講師としてお招きしたが、両先生とも、わが国の当面する諸課題をその基底を衝いて解明されたのである。

ここに編した本会第十六年度目の「合宿教室・参加者感想文集」は、一見して在来のそれと同じように見られるかもしれないが、実は、本年後半になって日本が当面するようになった現下の危局に先立ち、その直前に開催されたものであっただけに、この冊子のすみずみには、時局的感覚も、縦横ににじみでていることと思う。詳しくは、この拙文につづいて掲載されているリーダー学生の一人・早大四年生の山口秀範君の一文を是非お読み頂きたく、一学生から見た今回の合宿教室の様相がお判りいただけることと思う。以下全参加者の感想文、ならびに全員が、心血をしばって詠み上げた短歌を通じて、日本が背負う最大の難問——体制変革を重視する劣弱なる心情を、いかに克服するか——の課題に対して、全心身を傾注した努力のあとを、その行間に看取していただければ幸いである。

とにかく、十九号台風の惨害をのりこえて、三〇〇名の参加者が苦心の末に辿りついた合宿会場・霧島山上では、国の正しい在り方と進み方とを、そして全員が心一つにして、自分をも含めた日本国民の生き方とを求め続けたのである。そこに顕現されたものが、人間の「まごころ」というものの、底知れない深さと気品について確認と体得であったとすれば、主催者の一人として、これに越した喜びはない。

今年の霧島合宿を振り返って

——我々はそこで何を得たか——

早稲田大学・政経・四年 山口 秀 範

台風十九号が荒れ狂い、電気は消え、水道もとまった中で、僕達学生三十余名は全国から集い来る友らを待って、蠟燭の灯の下で「合宿教室」開催の準備を進めていた。台風の被害はすさまじく、霧島に通じる数本の道はことごとく遮断されてしまった。そして鉄道も分断され、土砂くずれが続発しているとの知らせを受けた時は、「合宿教室」の開催自体さえ危ぶまれた。それでも僕等は、一本の道路だけでも通さねばと、馴れぬ手にスコップを持ち、くずれ落ちた道路の修復に当たった。だが、ようやく通じた霧島神宮駅からの車道一本では、如何ともしがたく開催予定日の六日午後二時を過ぎても、現地にたどりついた参加者は、数えるほどしかなかったのである。それだけに、その日の晩から真夜中、そして翌日の朝にかけて、続々と到着する参加者の姿を見た時には、涙の出る程嬉しかった。殆んどの人が、平常の二倍、三倍の時間を費やして苦勞の末たどり着いたのである。

やむなく一日遅れとはなったが、「合宿教室」は無事スタ

ートした。四泊五日の全スケジュールを、一日短縮した中で消化すべく、今回の合宿には、はじめから「緊張感」と「求めずばやまむ気魄」とがみなぎっていた。

さて、合宿の総合テーマであった「祖国・学問・人生」についての追求は、早くも第一番目の講義の直後から開始され、平素生活している各自の学園や職場で涸渇していたもの——「真剣な気持ちで語り合う」という態度を、お互いの心の中に取り戻しにかかったのである。そうしなければ、講義のポイントがつかめないし、お互いの話し合いにしても、うわつらの撫で合いに終わってしまうからだ。そんなことでは、心を揺り動かされるような感激も生まれないし、人生そのものの尊い価値に気づく機縁も生まれては来ない。

第三番目の講義の戸田義雄先生が、御講義の中で述べられた「いのちあるものが、いのちあるものの為にいのちを捧げ

るところに、本当のいのちの喜びがある」という御言葉は、僕等のかたくなな心に強い衝撃を与えた。いのちの喜びが味わえるような付き合い、真剣なまなざしに全神経を集中し、そして友のまなこを見入るような付き合いをはじめ、自己の殻を破り、身近な友とまず心を通い合わせる努力を、開始したのである。

班別討論もまた、このような心構えで行なわれた。それは、平素の学園内で友達とやってきた議論とは、およそ勝手の違うものであったろう。日頃、大学内では、自分が知っている単語の多い少ないによってお互いの議論がやりとりされているが、ここでは、単なる知識的な言葉のやりとりは、大変つまらないことだと理解されはじめた。雄弁か否かは、お互いにとって全く問題でなく、それよりも、言葉を口にするその人の、言葉そのものの中に、どれだけ真情がこもっているかどうか、そこに関心が集中されていった。お互いが、精一ぱい胸襟を開いて語り合おうとし始めると、今まで何気なく受け流していたある一人の友の言葉に、はっと胸を打たれるようになっていった。こうした経験は、人間に取って大切なものだと判つていながら、平素の学園生活では、全く失われ果てていたものであった。それを肌にしかに体験し得たことは、ほんとうに有難いことであった。

村松剛先生による第四番目の御講義「世界各国の思想動向から見た日本思想界の反省」、木内信胤先生による第六番目の御講義「世界の転機と東洋思想」は、ともに全参加者が渴望していた御講義だけに、皆の心を奪った。事実、今夏から秋にかけて次々に生起した、日本を中心とする国際問題は、殆んど両先生の御講義の要点の的を見ているのである。

また、第九番目の御講義に再登場された小田村寅二郎先生が、歴代天皇の御歌を通して解明されていかれた「日本人の心」も、全員が耳を傾けて聴き入ったものであった。そして「誰でも安心して歩ける道を率先して歩んで行かれた方が天皇です」と説明された時、天皇の御歌の中に、そして「しきしまの道」と呼ばれる短歌を創るということの中に、僕等が生きてゆく上で学ばねばならない非常に大切なものがあることがはっきりしてきた。この「合宿教室」で、毎年欠かすことなく全参加者に短歌の創作をさせてきた、主催者の意図の重大さに、改めて気づいた思いであった。班別輪読の時に、いくつかの班では、友らが声を合わせて御製を拝誦しながら、天皇の大御心をじかに受けとめようと努力していたことなど、いまも忘れることはできない。こうした勉強の仕方、心の持ち方こそ、真の学問への道を切り開いてだてだと思つた。

「合宿教室」でいただいた各種のレジユメ、その他の資料を、僕はこれからも再三取り出して、その一つ一つを改めて勉強し直してゆきたいと思う。明春大学を出て実社会に入ってから、もおおいに役に立つ資料であらう。

とにかく、台風十九号との対決といい、その後の日程内容といい、その中で、皆と共に学んだ事柄といい、僕にとっては忘れることのできない合宿教室になった。



“第16回合宿教室”記念撮影(参加者302名) 於「霧島山上ホテル」

参加者(学生—四十二大学) (洋数字は参加学生数)

(東日本) 亜細亜大16 早稲田大9 慶応大8 中央大7 法政大

6 東京大6 玉川大5 日本大4 東京外語大3 専

修大2 拓殖大2 国際基督教大2 上智大2 青山学

院大2 秋田大1 成蹊大1 学習院大1 明治大1

神奈川大1 成城大1 東北大1 東京工大1 明星大

1

(西日本) 鹿児島大20 九州大18 熊本大11 福岡教育大4 長崎

大4 国際経済大2 鹿児島経済大2 岡山大2 大分

大2 皇学館大2 熊本商科大1 神戸大1 佐賀大1

西南大1 京都大1 京都産業大1 関西学院大1

福岡大1

計 百五十八名(内女子九名)

(社会人・教員班) 会社員・熊本県小・中教諭、信用組

合、大学助手、団体職員 計 六十六名

(招聘講師) 二名(大学教官) 三名(参観者) 一名

(国民文化研究会) 五十九名(事務局) 九名

(見学参加者) 四名 参加者総合計 三〇二名

——第 16 回 “合宿教室” 改訂日程表——

S 46. 8. 7 ~ 8. 10

	8月7日(土)	8月8日(日)	8月9日(月)	8月10日(火)	
6:30		(起床) (洗面 清掃)			
7:00	(起床) (洗面 清掃)	朝の集い 朝 食	(起床) (洗面 清掃)	(起床) (洗面 清掃)	7:00
7:30	朝の集い (国家提揚 体操)	朝 食	朝の集い 朝 食	朝の集い 朝 食	
	朝 食	(8:00) (講義)	(8:30) (講義)	(8:30)	
		評論家 村松 剛 先生	福岡修成館高校教諭 小柳 陽太郎 先生	合宿をかえりみて (9:00)	9:00
9:30	受付開始	(10:00) (質疑応答)	(9:50) (講義)	鹿児島大学教授 川井 修治 先生	
			亜細亜大学教養部長 夜久 正雄 先生	全体意見発表	
11:00	開会式	(11:00) (和歌創作導入講義 熊本県霧島中教諭 北島 照明 先生)	(11:20) (班別輪読)	(10:50) 感想文執筆と和歌創作 (11:20)	
12:00	中 食	(11:45) 記念写真撮影	(12:30) 歴 食	(12:00) 閉会式 (12:15)	12:00
1:00	(講義) 国文研理事長 小田村寅二郎 先生	登 山 (歴食携帯)	(1:30) (講義)	この後歴食	
	(2:10) (講義)		国文研理事長 小田村寅二郎 先生	解 散	
	神奈川県立翠嵐高校教諭 園 武 忠 彦 先生	(3:30)	(3:30)		
	班別自己紹介	入 浴	(班別討論)		
		(4:30) (講義)			
5:00	夕 食 入 浴 散 歩	世界経済調査会 理事長 木内 信 胤 先生	(5:00) 夕 食 入 浴		
6:30	(講義) 国学院大学講師 戸田 義 雄 先生	(6:55) 夕 食	(6:30) 和歌全体批評 福岡教育大講師 山田 輝 彦 先生		
		(7:50)	(7:30)		
8:00	(質疑応答)	(質疑応答)	歴 聖 祭		
	(8:30)				
	(班別討論)	(9:50) (9:00)	和歌相互批判 (班別) (9:30)		
10:00	(10:00) (消 灯)	懇 談 会 (小田村先生を囲んで)	最後の夜の集い		
		(10:30) (消 灯)	(10:30) (消 灯)		

備 考
 研修日程は当初5日間であったが台風19号のため4日間の日程に改訂されたものである。

第16回 “合宿教室”のあらまし

第一日

(八月六日・金曜日)

八月二日より始つた事前合宿は四日で終り、あとは本合宿まで会場準備のための八月五日を残すのみであった。外は台風接近のため強い雨が降り続き時おり風が窓を激しく鳴らす。台風十九号は九州全土を覆っており、八月三日以来の雨はすでに相当の量に達している。しかし午後三時頃には遅れていた聴講用の椅子も風雨をついて運び込まれ、夕刻までには準備もだいたいの目途がついた。合宿は何の支障もなく開催されるかを見えた。しかし、夜になって風雨はますます強まり、携帯ラジオのニュースはあちこちの被害を続々と知らせる。ホテルへ至る道の全てが土砂に埋まり、鹿児島本線は不通とのことである。ホテルは停電し電話、テレタイプによる連絡もとれない。交通と連絡の道を開くために、刻々変わる情報に従つて考えられる限りの対策をたてる。眠れない夜であった。

翌六日、丸尾への連絡班は未明に出発した。一方、神宮駅への道が土砂に埋まっているとの連絡を受け全員スコップを片手に現場へ駆けつける。皆で力を合せての作業なのでみるみる道路を埋めていた土砂は取り除かれ、一時間ばかりで車が通れるようになった。あらし去りくずれたる土砂を友どちと力あはせてとりのぞきたり

あらしつき友らの来るを思ひてはスコップ持つ手に力こもれり(九班・東大・小田村初男)

すぐに神宮駅へ向い収容態勢を整える。列車が着くごとにマイクを片手に飛び出していく。やって来る友は徐々に増え、皆の顔もしだいに明るくなっていく。夜に入っても各地より続々と集つて夜半の十二時すぎにはついに二百名を越えた。こんな悪条件にも拘らずたくさん集つたものだという言葉を会う人が口々に言う。自づと力いっぱいやるうという気持がわいてきた。開会を一日延ばすことになり、いよいよ明ければ合宿である。不安と焦燥と祈りの気持で過した本日に長い一日であった。

第二日

(八月七日・土曜日)

朝から開会式の準備が進んだ。参加者は続々と集まり、次第に緊張感がたかまっていた。

開 会 式

国歌斉唱に続いて、われらの祖国を守るために命を捧げられたすべての祖先のみたま^々に対して一分間の黙禱が捧げられた。

大学教官有志協議会を代表して、亜細亜大学教授の夜久正雄先生は「今歌った君が代が、とても強く響いたように感じられた。祖先のみたままでが一緒に歌ってくれたようで心強く思います。皆疲れているでしょうが、こうして集まった以上は一生懸命頑張ってください。」と挨拶された。

次に国民文化研究会を代表して、鹿児島大学教授の川井修治先生は、一足先に来ていた学生と、嵐の中を力を合わせて準備をされたようすを話されて、「やっと合宿を聞くことができました。」と結ばれ挨拶を終えられた。よくここまでもってこれたという安堵と喜びが聞く者ひとりひとりの心に伝わってきた。

午後より講義に入った。国民文化研究会理事長小田村寅二郎先生は『日本になぜ天皇が永続したか』という演題で、この合宿期間中二度にわたって講義された。その第一回目の講義で先生は天皇が権力を握って国民の上に君臨してきたという論がいかにも歴史事実と違っているかを資料を使って示されるとともに、なぜ天皇が今日まで永続してきたのかということ、合宿中によく考えてほしいと強く訴えられた。(詳しい講義の内容は第三日目に行なわれた二回目の講義で紹介)

講義 「明治維新に学ぶ」

神奈川県立横浜翠嵐高校教諭 国 武 忠 彦 先生

先生はまず、「今の日本史の教科書では、明治維新を一つの史観で見ようとして、そこに生きていた人間を見ようとしな」と述べられ、資料にそって当時の歴史をたどってゆかれた。「列強が日本の半植民地化を狙うという危機にあって、新しい日本を生み出す鍵を握る薩長が手を結ぶ気運はたかまっていました。両藩ともその危機を十分感じてはいましたが、藩



の体面上身動きがとれなかったのです。そこに坂本竜馬という非常に個性的な人物が現われたからこそ、歴史的な薩長連合が成立したのです。」と、その劇的な坂本龍馬と西郷、桂との会談のようすを語られた。今の日本がこういう先人達の努力によって在るということが、当時のようすを彷彿させる先生のお話の中から感じられて、強い感銘を受けた。

開会式に引続いて講義日程に入ったため、この後、各教室に帰りそれぞれ自己紹介を行った。

講義 「物を思い感ずることと生き甲斐と」

国学院大学講師 戸田義雄先生



先生は「私たちは物を見る時にはある一方の局面からだけ見がちですが、形のない、例えば『いのち』というものならどういふ局面から把握なのでしょうか」と話し始められた。

『いのち』が苦しみ、悩むというような場面を、フロイトは性衝動から、マルクスは下部構造の投影として把える。そして、「現代のいろいろな思想、考え方は、人間であるがままに見ようとせず、人間の本質に関りなく意志が決定されるとする『機械的決定論』であり、これがはびこってしまっています。ところが、『いのち』には不思議な法則があり、自分のいのちにかかずらわって

てはだめで、いのちもあるもののがいのちあるもののためにいのちを捧げるところに本当のいのちのよるこびがあるのです。戦後は、いのちが燃え感動することが少なくなつた。戦後の青年も、素直に人から受けた恩を大事にしたり国を守ろうという気持は残っているのに、いざそのために我身をなげだすとか国防の話になると気持がしぼんでしまう。これは戦後の教育が『考え方の枠組』を作ってしまったからです。つまり人情としては国のために命を捨てることを馬鹿げているとは思われないが、具体的につきつめると『憲法第九条』という枠組が浮び上がってきて、いざ自分自身で国を守ろうということにはつな

がらないのです。そのような枠組をつけた物の見方をせずありのままに見る。このありのままにみるということが日本人の魂の奥底にある『素直な心』なのです」と言われた。さらに先生は、「本当のいのちのよるこびは素直な心、『幼心』で、ものごとをあるがままに見ることができたときにこそ生まれてくるのです」と力強く結ばれた。この『あるがままに見る』ことは、その後の班別討論において友の話を聞くときの私達自身の姿勢の問題として強く胸に刻みこまれた。

第三日

(八月八日・日曜日)

朝六時三十分起床。宿舎前の広場にて、国旗換揚とラジオ体操を行う。朝食終了後、心まちにしていた評論家、村松剛先生の御講義が始まった。

講義 「世界各国の思想動向から見た日本思想界の反省」

評論家 村松 剛先生

先生はまず、外から見た日本について太平洋の別荘の如き平和な島国故の甘さ、安全保障に対する無関心さを各国の例をとりあげられながら説明された。



次に日本文化の特殊性を外国人に理解してもらうことの難しさ、その典型として花をあげられた。「西洋では、花はベジタブルの一種にすぎない。しかし日本においては『美しさ』の象徴ともなる。しかも、それは単なる美しさではなく、いずれは散ってしまうというはかなさをふまえた上での『美しさ』なのである。そこに流れているのは無常感である」。更に死について「いい死に場所を見つけるために生きているようなものだ。しかも、人生は一瞬のものである。その瞬間が判るために心して常々から修練していなければならない」としばし目をとじられながら語られた。

次に「日本は初めての敗戦で荒廃し、日本人は自分達の過去の一切に自信を失った。そこに連合国側の日本の無力化を目的とする占領政策、国内の事情等が作用して、マルクス主義と近代化論が非常な勢いで広がっていったのです」と戦後の日本思想の混乱の原因を究明され、最後に「国力が充実し世界の舞台にでることにより、日本は様々な挑戦をうけている。それらに応ずる簡単な答えというものはないが、日本人の先祖が積み上げてきた『自然と人間に対する謙虚さ』を忘れずに生きていくことが大切です」と語られた。

先生の豊富な海外旅行体験と西洋文明とりわけキリスト教文明のするどい洞察に裏打ちされたお話しは私達の心を捕えてはなさなかった。

質問の一つ一つに丁寧にお答え下さる姿が印象的であった。

この後、午後に予定されている「和歌創作」のための導入講義が行なわれた。

講義 「和歌創作導入」

熊本県・嘉島町立嘉島中学教諭 北 島 照 明 先生

先生はまず「和歌には自分というものがあるのままで出るのでごまかしがきかない」と和歌を作る時の注意として素直になれと言われて、防人の歌・幕末志士の歌、戦争未亡人の歌等にふられ、私達も先生と共に全員で朗詠していった。初めて作る人も、皆と声を合わせて先達の和歌を詠んだことにより、和歌の「調べ」をつかめたようであった。

講義終了後、ホテル玄関前で記念写真撮影。台風のため当初予定されていた高千穂登山が中止され、約四キロ離れた高原まで遠足にかけた。台風一過で晴れあがった霧島の山々をながめながら和歌を作る姿がみられた。



世界経済調査会理事長 木内信胤先生



先生は、現代の世界と日本の動勢を分析され、日本にとって重大な関係をもつ日華、日韓協力委員会、そして中国問題について、「中国はピンポン外交で外交政策を大いに平和路線へと変えてきた。しかし、中国が本当に世界共産革命の望みを捨てたのかどうかは定かではない。もはや現在の世界情勢からみて中国の国連加盟を阻止することはできないし、中国の真意を知るためにもすすんで加盟させ、国際社会の前にひっぱりだしてみてもいいのではないか。中国が世界の趨勢を知れば自づと変質せざるを得ないのだから」と確信に満ちた面持で語られた。夕食後、あらかじめ提出された質問に目を通して次々と答えられた。先生の御講義の中に新文化ということばがでてきたのに対して、ある学生が提出した「新文化ということばを言われましたが、どういふものですか」という質問に、「解答を他に求めてはならない。他から融合された新文化というものを教えてもらい、それをやっているというのではだめだ。まず自分の心の中で充分に考えた上で、それを日々の行為の中に実現させるように努力しなくてはならない。そのために自分自身がしっかりせよ、そうなるまでは将来のことに関しては何も見えて来ない」と言われて、自分で深く考えず、すぐ他に解答を求めがちな私達を強く戒められた。

なおこの日、衆議院議員、千葉三郎先生の御来会をえた。先生は、現代日本の窮状を救うものは「寺子屋教育」以外にはないといふ御気持から、御高合にも拘らず、わざわざ合宿地までおいでになり参加者一同に激励のことばを述べられた。

夜の班別輪読の時間には『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』（黒上正一郎先生著）の御本を中心に班員全員が一字一句を心をこめて読み、著者の思いを正確にたどる努力がなされた。

第四日

(八月九日・月曜日)

講義 「事を論ずるに己れの地、己れの身より見を起すべし」

福岡県立修猷館高校教諭 小柳陽太郎先生



吉田松陰と久坂玄瑞が交した手紙の文章を解釈されながら、二人の魂と魂との激しいぶつかり合いを述べていかれた。「明治維新の志士達の行動は目の前につきつけられた醜いことに對する生命的な反発から出てきたものではないでしょうか」とのお言葉をきいてこうした維新の志士達の澄みきった生命の躍動を、私達は松陰と玄瑞の火花の散るような凄まじい文章の一言一句に感じ取るこ
とができた。

講義 「国を支えるちから」

亜細亜大学教授 夜久正雄先生



「御述懐一帖」にそって孝明天皇の御氣持に触れていかれた。私達は孝明天皇の御歌
ぬばたまのよすがら冬のさむきにもつれて思ふは国たみのこと
に接して、幕末にあって常に国民のことを思われ、国の独立を導かれた天皇の御心をはっきりとう
かがうことができた。最後に先生は「国家の重大時期にあって本当に国を支える力というものは天
皇の御心と国民の心との触れ合いの中から出てくるものです」と結ばれた。

講義 「日本にはなぜ天皇が永続したか」

国民文化研究会理事 小田村 寅二郎 先生

第二日目の御講義に続いて、先生は更にお話を本論へと進められた。江戸幕府の朝廷に対する圧迫（「禁中並びに公家衆諸法度」等）に対して当時の天皇がどのような御気持でおられたのか、あるいはまたどのように対処されたのかを詳しく述べられた。特に第百十六代桃園天皇の御歌

もろおみの朕われをあふぐも天てらす皇御神すめみかみのひかりとぞ思ふ

に触れられ「多くの臣民が自分を天皇として仰ぐのは、自分の徳や人格が高いからではなく、自分が天照大神の教えをしっかりと守っているからなのだという天皇の御自覚は、自分を仰ぐのは自分で、私達にうちつけるよう話された。

「天皇の御歌の中に権力を求める歌はありませんが、道を求める歌は多くあります。人の歩むべき道を率先して歩いていかれたのが天皇なのです。そして、私達がよく使う『国のため』というのには、言いかえれば『国の独立のため』ということ。日本は二千年にわたって独立を保ってきたわけですが、そのためにはたくさん私達の祖先が生命をかけてきたのです。また一方、独立が保たれるためには、統一が保たれていなければならない。そのことを日本人はごく自然に知っていたのです。だから日本人は最初に日本の国を統一し、統一を保って下さった天皇に対して感謝をしてきたのです」と熱情をこめて話されるお言葉は私達の心に強く迫ってきた。

和歌全体批評

福岡教育大学講師 山田 輝彦 先生

前日全員の創った歌は諸先生方の選択作業と事務局の方々の夜を徹しての整本作業により、一夜のうちに三十頁もの歌稿にまとめ



あげられていた。

山田先生によって全体的な批評が行なわれた。一生懸命創った歌でも、言葉が不正確だったり、素直に歌えよよいことを理屈っぽく、あるいは抽象的に表現したりしている箇所を指摘しそれを、正確に正していただいた。つづいて慰霊祭を行う。

慰霊祭

ホテルの大広間に特設された祭壇の前に、まず、お祓いにかえて故三井甲之先生の「ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを」の和歌が国文研の福田先生より朗詠された。ついで平時・戦時を問わず日本の国を守るために尊い生命を捧げられたすべての祖先のみ霊をお呼びするための黙禱を行う。私達を包む闇の中をみ霊は霧島の山々を越え、私達三百名の頭上に集いこられる。誰もが何か胸に迫まるものを感じる時である。

ろろろりと詠まるる御製を聞きをれば涙ながれてとどめかねつも

国のためうせにし人を偲びつつ祭壇に向ひをろがみまつる（十九班・九大・天本和馬）

和歌相互批評

慰霊祭の後、それぞれの班に戻り和歌相互批評。御義に感動した歌、霧島のさわやかな景色を詠んだ歌等、さまざまな思いが詠われている。お互いに相手の和歌を批評し合ううちに、今まで頑に心を閉ざして話さなかった友も自然と打ち解け、ぼつりぼつりと口を開いてくれる。そこからお互いの心が触れあい、通い合うようになってきた。

そして、最後の夜の集いに入った。肩を組んで力強く歌う友や、各々の校歌を歌う友など、老いも若きもうちとけて会場には熱気が溢れていた。

第五日

（八月十日・火曜日）

最終日の朝、川井先生の「合宿生活をかえりみて」と題するお話があった。



先生は「三日間講義を聴き、班別で輪読をし、共に語り合ってきた皆の心の底には、みずみずしい瑞々しい情
意から出発しようとする気持ちがいつも備わっていたように思う」と述べられた。そして、鹿児
島大学がバリエード封鎖された時、不和雷同的な学問の風潮の中で自分からの手で解除された
という御体験を話され、「これではだめだ」と実感したなら速やかに「どうする」のか決意し、
「どんな方法を探るのか」を追求し、実行に移すという生き方を示された。

全体意見発表

愈々合宿の最終日程に入ってこの合宿での体験や、そこで得た感動を思いのままに登壇して友の前で語ってもらった。ある友は、
民の上をいつもお思い下さる天皇の御歌を拝誦し、その御心に對し、とめどもなく湧いて来る感動を語ってくれた。またある友は、
「天皇の御歌に触れることによって国を思う本當の力というものがわかったような気がする」と述べた。又、かつて九州大学におい
て、ヘルメットをかぶって全共闘系の学生に對抗したことを述べた友もあった。自分達がそういう行動に出たのは、九州大学をよく
しようという気持が、ひいては国を思う気持に通じてゆくからだという言葉に對して、九州大学の前田君が「僕等が大学の中で力の
限りを尽してやった事は武装して闘うということではなく、自分の切実な思いを一人一人に納得してもらおうと語りかけてゆくこと
であった。『国を思う』ということを出して言う人だけが日本の国を守っているのではなく、目立たない所で地道に国を思っ
力を尽くしている人がたくさんいるのです。本當に国を思うのなら、自分はやっているという傲慢さをまず捨てることではないでし
ょうか」と一言一言かみしめるように語った言葉は皆の心に深く留められた。

その後、最後に小田村先生がお話しをされた。先生は、現在の日本の危機は政治によって解決出来るものではないと前置
きされ、次のように続けられた。「合宿の始まった四日前を思い出そうとすると、何か遠い昔のこのように思われるので
はないでしょうか。それは参加者の一人一人が緊張して合宿生活を送り多くの感動を経験し、凝縮した毎日であったために
記憶が定かでないのです」と。続いて「このような充実した合宿を営むことが出来たのは、台風にもかかわらず

綿密に準備された運営の人々のお蔭もあります。しかし、与えられた所謂『体制』がいくら立派でも、その中で各人がどのような心を働かせてゆくかに合宿自体の成否はかかっているのです。私達のまわりには様々な『体制』があります。その『体制』自身をより良きものとすることも大切ですが、『体制』の中で一人ひとりがどのような心を働かせてゆくかを抜きにしてはどうにもなりません。どうか、問題をすべて『体制』のせいにすることは今後はやめにして下さい」と語気強く語られた。

感想文執筆

残り少なくなったあわただしい時間の中で感想文を執筆してもらった。心を整理し言葉をまとめる間もない、うちつけの文章は又それで心を打つ真実のものを語ってくれる。

閉会式

感想文執筆、最後の班別懇談の後、閉会式が始まった。国歌斉唱に続いて、参加学生を代表して鹿児島大学徳丸雅信君は「悲しみに流されず、それを乗り越えていった防人の雄々しい心に学んで行きたい」と決意を語った。いよいよ別れの時が来た。

さよならと手をふる我らを見送れる君の眼に涙ひかれり（二班・九大・前田秀一郎）
来年もきつと会おうと誓って、それぞれの思いを胸にきざみつつ友らは霧島を降りていった。

——分担執筆者 伊藤祐（法大） 徳丸雅信（鹿大） 福永好紀（熊大） 堀田真澄（九大） 木村秀晴（九大）

助言者の紹介

熊本県砥用町立砥用東中学校教頭

岸和田市立大芝小学校教諭

熊本県林業専門技術員

八代市助役

共同通信社論説委員

富士学院学務部長

亜細亜大学講師

島根県玉造温泉こんや旅館主

舞岡八幡宮宮司

下関市宝辺商店社長

大分県国見町教育委員会社会教育課長

福岡県立宇美商業高校教諭

熊本市役所経済部長

安田信託銀行新宿支店長

県立佐賀工業高校教諭

小泉明会計事務所所長

山陽電気軌道㈱不動産課長

熊本市立京陵中学校教諭

㈱千代田コンサルタント営業部次長

学習塾経営

佐世保市役所交通局

鹿児島市立清水中学校教諭

神奈川県立横浜翠嵐高校教諭

北島道治

岡村義一

瀬上安正

加藤敏治

島田好衛

加部隆三

倉前義男

青砥宏一

関正臣

宝辺正久

三重野悌次郎

小林国男

徳永正巳

松吉基順

末次祐司

小泉明

加藤善之

松浦良雄

上村和男

湯通堂義弘

朝永清之

江口正弘

国武忠彦

神奈川県立横浜平沼高校教諭

阿久根市中学校教諭

鹿児島銀行

県立岡山操山高校教諭

メディックス貿易㈱

新技術開発事業団管理部

亜細亜大学学生課

川崎重工設計課

九州大学医学部神経内科・医師

皇宮警察学校助教

農林省林業試験場

第一生命保険相互会社

神奈川県箱根町立仙石原小学校教諭

㈱講談社広告局

日本自動変速機販売課

新日鉄八幡製鉄所労働部厚生課

兵庫県立姫路北高校教諭

熊本県嘉島町立嘉島中学校教諭

熊本県立御船高校教諭

富山県立高岡ろう学校教諭

神奈川県立新城高校教諭

九州大学医学部内科

宝辺商店勤務

日本青年協議会

福田忠之

宮内盛孝

南正人

三宅将之

古賀保臣

野間口行正

三谷文雄

山本博資

田村博

亀井孝之

行武潔

藤崎義之

岩越豊雄

磯貝保博

古川修

今林賢郁

伊藤三樹夫

北島照明

片岡健

岸本弘

山内健生

友池仁暢

宝辺幸盛

梶島有三

宇部興産株式会社

内田 敏彦

東急建設株式会社

奥富 修一

久留米大学付設高校講師

小野 吉宣

東京工科大学院理工学研究科

大岡 弘

大阪大学研究生

東中野 修

鹿児島西高校教諭

相徳 和義

山口県宇部県税事務所

金津 洋雄

合宿運営委員

(助言者と兼務)

田村潔 国武忠彦 磯貝保博 山内健生

北島照明

岸本弘 古川修 奥富修一

指揮班

片岡健 伊藤三樹夫 小野吉宣 東中野修

写真班

秋重実夫 (県立修猷館高校二年)

記録班

西川伍朔 (最高裁判所秘書課)

合宿事務局

永沢弘子 (本会職員) 吉田和隆 (福岡大学工学部三年) 松尾

新子 (共立女子大学文芸学部二年) 山田典子 (県立若松高校二

年) 北島あや子 (九州女学院高等科二年) 小柳志乃夫 (県立修

猷館高校一年) 加藤多夏詩 (下関市立東部中学校二年) 岡村多

加志 (岸和田市立光陽中学校二年) 加藤詩麻音 (下関市立東部

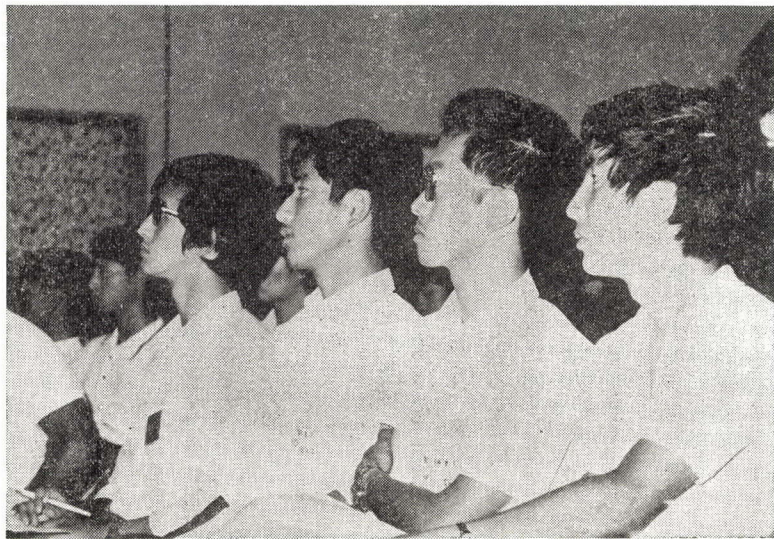
中学校二年)

走り書きの感想文集

(各班別に集録)

閉会間ぎわの三十分間で参加者全員に、三泊四日間の感想を走り書きで書いてもらいました。

(なお、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられている短歌は、この感想文とともに提出された第二回目のもです。この文集の末尾にまとめて掲載したものは第一回の創作です。)



理屈ではない、心情だ

(福岡教育大学 一年 大槻躬信)

まずこの合宿に参加して本当に良かったと思う。開会式の君が代の力強い声を聞いて、苦勞して汽車に乗って来た疲れなどいっぺんに飛んでしまった。今、合宿が終るが、終るのが残念でならない。まだ皆と話し合い寝起きを共にしたい。こんなにはりつめた日々を送ったのは、未だかつてなかったように思われる。最後の講義で小田村先生が、「三ヶ月程の精神の集中を四日間で行った」と言われたことが本当にそう思える。

自分に得た事は大変多かった。天皇の問題は僕が一番考えなかったものだけに大変勉強になった。思うに理屈ではない心情だ。今まで友達と話し合う時は、理屈、理論ばかりならべていて、本当に根本のところから考えていなかったように思われる。天皇の御歌を読むことが、天皇のお人柄を知るうえに、何よりも大切だということがわかった。

合宿のこみ上げてくる感激をはやく帰りに父に語らむ

ただ一生懸命勉強したい

(長崎大学 教 一年 鈴木志郎)

先生方の熱弁にふるい立たされ、また班の人達が正直な態度で話すのを聞いて、強く心を打たれました。自分は今まで何とうすべらな態度でやってきたのだろうか、と恥ずかしくなりませんでした。今はただ一生懸命勉強しようという気持ちでいっぱいです。この合宿でどれだけのものを得たかは、今後の僕の生活態度で決まると思っています。一つの感動を持続させるには並々ならぬ決意がいると思います。常に自身を見つめて歩いていこうと思っっているのです。

胸内に高まり覚え壇上におもはずは駆けのほりけり

自分の心が洗われた

(熊本大学 工 二年 高岡正人)

全体意見発表のとき涙が流れて仕方がなかった。三泊四日の短い間であったが、皆が素直に涙を流したり、胸のつまるような感激を覚えて友の話を聞くことができることは、非常に大事なことであると思う。人の話を素直に聞くことができなくて、国を論じても何もならないのではないかと改めて痛感している。この合宿で今までの自分の心が洗われたような気がします。

友どちの語る言葉はつたなけれどその思ひたけく胸に迫りく

四日間共に学びし友どちと別れると思へばつらさ覚ゆる

涙ためすみませんてふ友達に拍手す腕に力こもりく

陛下のお心を偲んでいきたい

(九州大学 理 二年 堀田真澄)

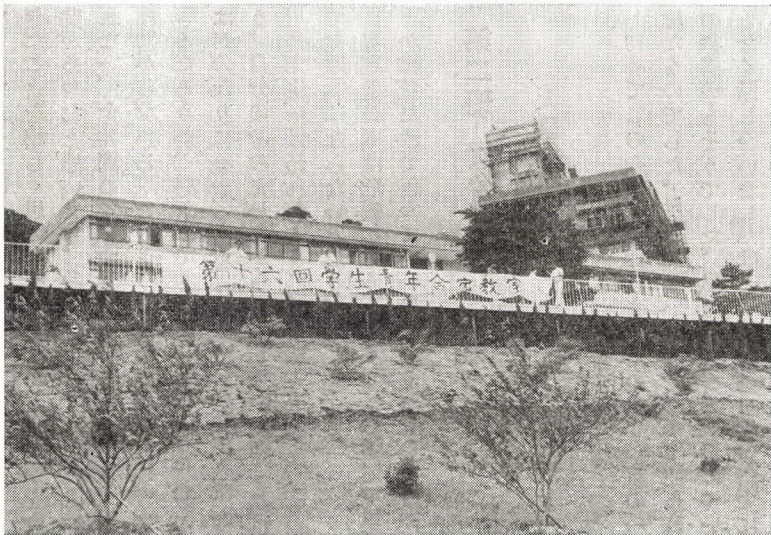
福岡信和会の輪読会で時々天皇陛下のことが話題にのぼります。僕は先輩方の話を聞いて、成程、天皇陛下のお心を知るには御製等を拝誦しなければならぬと思っていました。寮で御製拝誦をやっていました。僕は陛下のお心は尊いと思いつつも、何か不安なものも残ります。素直にお心を偲ぶことができずにいました。しかしこの合宿で、小田村先生のご講義されるときの激しいきごみを見て、今までの気持から何か一歩進めたような気がします。出来る限り、天皇陛下のお心を素直に偲んでゆく努力をしていきたいと思いません。

友どちの激しき言葉のはしばしにやさしき思ひのこめられてあり

荒海に投げ出された心境がする

(国際経済大学 二年 根岸正幸)

この合宿に参加して、改めて自分の心の卑屈さを知らされた思いがします。今は何も云えません。今の気持は荒海に投げ出され、しゃにむに一本のわらにすがりつきたい心境です。今までの僕には常に親鸞がやさしくみつめて下さっていました。そしてその為に僕自身が支えられていた。しかし、しらずしらずのうちに、僕は心の中に傲慢さを抱いていたのでは



カメラ・レポート1

「雲仙山上ホテル」全景

あるまいか。いろんな考えが頭の中を駆けめぐり、整理收拾がつきません。

学問とは鍛えられた常識

(慶応義塾大学 法 二年 伊佐 裕)

どの様な友情論を吐くよりも、今、目の前にいる友達とどれだけ徹底して付き合えるかが問題であると思う。僕達が勉強する時、たとえば東洋思想についても、それが所謂「東洋思想」になっては駄目だと木内先生はおっしゃいました。木内先生のお言葉には響きがありました。それは先生が常に実際の立場に立って、物事に処して考えておられるからだと思います。また先生は、「学問とは鍛えられた常識」とも云われました。僕は大学で勉強していて、自分が偉くなったように思っていました。木内先生のお話を聞いて、そんなうぬぼれた気持は吹き飛んでしまいました。僕は今から先生がお話になったことをもう一度かみしめて、自分に考えることのできる問題、考えずにはおれない問題を考えていこうと思います。

わが友と思ひのたけを語りむと思へどあせり別れ近づく

身のまわりから実行しなければならぬ

(日本大学 文理 二年 浜口 清)

この合宿に参加して諸先生方の熱のこもるお話しを聞かせ

ていただき、人間の心のふれあいというものを、真に体験できたことを嬉しく思い、それだけで台風の中を合宿へ来た甲斐があったと思います。我々の大学では先生と語ろうにも語れない、全共闘のイデオロギーがはらんし、封鎖が行なわれたからである。このような学園で、はたして真の学問ができるだろうか、絶対にできない。こういう状態の中で、自分自身なりに学園を正常化していかなければならないと思う。自分の身のまわりから実行していかなければならない。川井先生が云われたように、実感↓決意↓方法の追究↓実行でなければならぬと思う。

現在の日本は危機にあると思う。この中で、果して和歌だとか輪読だけで終わっていいのだろうかという疑問は残った。

第二班—男子学生—

天皇の御歌に心の素直さを感じた

(中央大学 法 一年 佐野和利)

初めてこの合宿に参加しましたので、一日の一つ一つが新鮮なものでした。天皇について心をこめて語られる諸先生方の御講義もそうでした。私はこれまで天皇については、幾度となく話し合いましたけど、天皇御自身の内面については全く無知であったことを知り、今までの討論が空論に過ぎなかったことに気付きました。

桃園天皇の「身も恥も忘れて人になにくれと問ひ聞くことぞさらにうれしき」の御歌を朗詠しながら、人の心の純粹さ、素直さというものに触れた心地がします。

合宿で学びし心の素直さを吾れはもちたしとこしへまでも

語らねばならぬことを語る

(九州大学 医 五年 前田秀一郎)

合宿を終え、ともかくほつとしましたが、同時に班の友達と語り足らなかったこと、本当にわかりあうまで精魂を傾けて語れなかったことが残念です。これは僕の友達を思う気持ちが足りなかった為で、班の友達に申し訳なく思っています。

最後の全体意見発表の際、長崎大学の友の言葉に対して僕がそれはおかしいと意見を述べた時、自分ではどう語ろうかと考える余裕もなく言葉が出たのですが、後でその友が、「先程はすみませんでした」と言いに来てくれました。この時、自分の思いをわかってもらうには、どうしても語らなければならぬことだけを語ることが大切なのだと痛感しました。

さよならと手をふる我らになごりおしむ友の眼に涙ひかれり
ともどもに心かよわせ過し來たる十日のことども胸にせまりく

自分がたたきこわされた

(神戸大学 工 二年 高橋敏人)

初めてこの合宿に参加して、自分のもっている考えの浅さ、信念のなさを痛感しました。自分の意見が次々と打ち破られ、たたきこわされていきました。もっと本を読み、勉強したいと思います。そして、自分の気持を言葉であらわすことの難しさ、それを他人にわかってもらふことのさらに難しいことを、改めて思い知らされました。深く内容を考え、言葉の吟味を正確にした上で話すことを心がけたいと思います。

あな激し友の言葉はするどくも我があいまいな心を正す

友と生活するなかで鍛えてゆきたい

(鹿児島大学 法文 二年 四ヶ所敏夫)

合宿が終りほつとした様な、又終るのが惜しいような気がする。友人、先生方の真剣な姿に接し、内から湧きあがる熱意に触れ、日頃の自分をみじめに感じた。山を降りてからは、鹿児島島の友と一緒に生活するなかで自分を鍛えてゆきたい。又先生方の御講義を聞き、国のため自分の出来る事を精一杯やらねばならないことを再認識した。

ますらをが命なげうち守りたる大和島根を我も守りゆかむ

素直な気持で接しなければならぬ

(専修大学 経 三年 福田篤志)

いろいろな不安をもって合宿に参加しましたが、見知らぬ

友と話しているうちに、その不安もなくなりました。この合宿で感じたことは、人間は自分に對しても他人に對しても素直な氣持になつて接しなければならぬということでした。この合宿を機会にもっと勉強したいと思ひます。

大君の國民思ふ心知りあつき血潮の湧きくるをおぼゆ

初参加の不安を忘れた

(亜細亜大学 法 二年 渋谷啓一)

はじめての参加だったので、最初は不安だったが、諸先生方の御講義を拝聴してゆくうちに、最初の不安を忘れさり、「祖国」「天皇」などについて、今まで持っていた自分の考えに自信をもち、氣持をあらたにしました。非常に有意義な合宿でした。

先輩の言葉の中に國思ふ心のありて力強しも

正確に表現することの難しさを感じた

(長崎大学 教 二年 小島 明)

二度目の参加ですが、去年わからなかつた講義も、今度は自分の体験と比較しながら聞いていました。特に村松先生や木内先生のお話は、自分の考えに自信を与えて下さいました。また和歌については、先輩から言葉の不正確さを指摘され、自分ではそういうつもりではなかつたのに誤解されていることを知つて、本當に自分の考えをありのままに表現する

ことは、簡単なようで難しいことだなと感じました。これからは少しでも和歌をつくつて、自分を修練しようと思ひました。また天皇のお歌を知つて、實際に自分が和歌をつくるのとくらべて、天皇のお考えの深さを痛感しました。

霧島の涼しき風に洗はれてわが心根は清められたり

第三班—男子學生—

帰途の直前に目が醒めた

(日本大学 文理 二年 久保田義一)

不断、僕は自己という殻に閉じこもり、自己を危くするよちなものに対して、一切避けて来た。そうすることのみが現代に生まれて来た者の運命であると浅薄な知識をもって卑屈に生きて来た。そのような僕にとって、自分の生き方を真向うから否定するような先生方のお言葉は辛かつた。と同時に素直な氣持でさわやかに実人生を送っている人々が羨しくもあり、憎くもあつた。僕はこのような歪曲した精神(むしろ意地という方が正確でしょう)をもつて、最後の日まで押し通して来た。しかし僕のこれまでの人生を根底から覆えず光景を目の前に見て、目が醒めた思ひだつた。全体意見発表のとき、前田さんの生命から溢き出る激しい言葉は、僕を自己の殻から解き放さずにはおかなかつた。僕は地道に立派に生きてゆかなければならぬのだ。

忘れ得ぬ言葉の数々

(九州大学 文 一年 佐藤則夫)

今合宿で心にのこることは、先生方の講義において多く言われた「生命というものは生き生きとしている」ということです。私は今までこの生き生きとしている心を、「理論」などでがんじがらめに縛っていたのではないかと思います。今でもこの理論が、すぐ取り払われたとは思いませんが、この点に気付いたことは貴重なことでした。「生命あるものが生命あるものに生命を捧げるところに生き甲斐がある」。この戸田先生のお言葉は抵抗を感じながらも忘れ得ないものとなりました。「このような生命が作った歴史も今日のゆがんだイデオロギーで見るとは、歴史への傲慢である」という村松先生のお言葉も忘れられません。

永遠のいのちを実感したい

(早稲田大学 文 三年 藤井 貢)

小柳先生の御講義で、「聖賢の貴ぶところは議論に非ずして事業にあり」という箇所「事業」を、先生は「人生そのものに触れること」と解釈されたとき、僕は日頃、人に「いい子だ」と思われるように、いかに功利的な考え方に基づいて行動していたかを知らされ、心をゆすぶられました。功利的な考え方で、本当の人の「まごころ」を感じえないので



カメラ・レポート2

あわただしい合宿参加受付風景——各班員の一覧表がみえる

はないかと一瞬不安になりました。人生そのものに触れ、「永遠のいのち」を本当に実感せねばならぬと思いました。

実際に体験するのみ

(中央大学 法 二年 石井育英)
先生方の真剣な態度と、「本当はこうなんだぞ！」と僕達学生に何とか分ってもらいたいという心のこもった講義に心を打たれました。そんなお姿を見ておりますと、僕は今後どんな学問をすべきか考えさせられました。僕は物事を理屈で考えてきました。それをかなぐり捨てると後に何も残らないような気がしました。今後僕に残されたのは、「頭の中ばかりで考えるな！実際に体験してみろ！」と言われた言葉を実行するのみです。

力こめて語る講師のみことばに友ら心を統べていききり

講義に生命感を感じた

(熊本大学 薬 一年 佐小田 学)

この合宿に来て、本当に充実した生活をおくれたように思う。諸先生方の御講義には生命感といったものが感じられ、和心といった日本独自の伝統に過ぎない強い信念が感じられた。それに日本国民には「真心」といったものが常に流れているということ強く感じた。このような真に日本ということとを考える合宿の意義を全国的にもっとひろめるべきだと思

う。

多くの友を得た

(亜細亜大学 経 三年 土田広生)
今までの自分と現在の自分がどう変化したのか、今考えても皆無に等しい。しかし、志を同じくする多くの友を得たことだけは自信をもって云える。

機械的決定論と戦っていききたい

(慶応義塾大学 工 一年 和田正一)
今まで知らず知らずのうちにこびりついてしまった機械的決定論（理論だけで物事を解釈すること）だけで物事を理解することは片寄ったものだということを知りました。併し、この機械的決定論は頭にこびりついてしまっただけで、一向に離れません。今からは、これと戦っていききたいと思ひます。

壇上で泣き／＼語る友どちの心つたはり胸に迫りく

第四班—男子学生—

人と接する態度を学んだ

(九州大学 工 一年 佐久間弘二)
この合宿で一番感じたのは、人の心の大切さということと、いかにすばらしい理論を展開し、いかに高い理想を語る

うと、つねに人間の心に照してそれを考え直さねば単なる空論になるのです。僕が今まで積みあげて来た人生観をもっと人間としていかに感じるかということから考え直して行かねばならないと思います。

僕は同じ班の人の前でかたくなに自分の意見を主張しました。自分が自分の意見をもつということは絶対必要なこと、いや持たねば話し合いはできないものと考えていたのです。しかし話し合いに一番必要なことは相手の気持になって一緒に考えるという態度、相手に対する思いやりということだったので。話し合うことの難かしさ、話し合うことの豊かさをこの合宿で得たことを非常に嬉しく思います。

いつの日か人の心はうちとけむひとりひとりがその気になれば

日本の歴史を見つめ直したい

(上智大学 法 三年 山口良男)

僕の話を熱心に聞いてくれたことが大変うれしかった。現在の大学で見失われがちな「共に学ぼう」とする姿勢がこの合宿にはあった。それがまた僕の励みにもなりました。実を言うともっと寝食を共にして「国の問題」特に「天皇の問題」について語りたかった。小田村先生の御講義「日本に何故天皇が永続してきたか」をお聞きして胸の熱くなる思いがした。天皇が遠い昔から現在に至る二千年もの間存続してきた事実をもう一度確かめる必要があるだろう。その存続

してきた裏には多くの人々の涙があり血があった。それは幕末の志士の吉田松陰であり、久坂玄端、坂本龍馬であったと思う。わずか二十代の青年が国のため天皇のために生命をかけて立ちあがった事実を思い浮かべる時私達の心にその先達のお声が響いてくる。日本に生まれ日本の米を食う。それだけが日本人ではないはずだ。私はもう一度日本の歴史を心を据えて見つめ直したい。

声そるへ御歌を詠みし友どちの目はいきいきと輝きてをり
すがすがし友の顔をば見つめれば熱き思ひのあふれるなり

心と心が触れ合う素晴らしさを感じた

(熊本大学 工 一年 折田豊生)

私達の班はわずか七人であったけれども心を裸にして語り合った。この人達をもう忘れることはないでしょう。言葉使いは激しくとも人の心と心が触れ合うことの素晴らしさを実感して、今は唯それを体験し得たことに強い喜びを感じるばかりです。

語り合ふ声一段と熱こもるあたり静けき真夜中なれど

祖国に対する自覚が必要

(法政大学 文 二年 高山直幸)

この合宿で得られたものが何であったか整理がつかない状態である。慰霊祭で祖国の為に命を捧げた御霊を初めて感

じ、我々が如何に祖先の犠牲のおかげで自分達の生活が成り立っているか、自分の生活は自分一人で築いたものでなく長い伝統に支えられているかを知り、少なくとも不遜な態度は謹しまなくてはならないと思つた。さらに国に対して無関心であつてはならない、我々は祖国に対する自覚が必要であり、祖国に献身した御霊を思い偲ぶことが我々の使命であると思つた。

日常生活にない喜びを味えた

(佐賀大学 理工 三年 松田敏夫)

今回の合宿は台風のため、大変苦勞の多かつたものと思ひます。逆に言えば、それだけ皆が懸命に取り組んだのではないでしょう。私自身、族の疲れも忘れ、諸先生方の講義や班での話し合いに熱中できました。そして、そこには日常生活では決して味うことのできない喜びがありました。その喜びを、郷里の家族や学校の友達にも分けて上げたい氣持です。もう一つ嬉しかったことは、去年の合宿で、「来年また会おう」と言つて別れた友が、参加していただくことでした。こういう友と本心に心を通わせていきたいと思つています。友どちと別れし後のさびしさはかくばかりとは思はざりけり

この合宿で得たことを友に伝えよう

(亜細亜大学 法 二年 北原康国)

東京からの六十時間以上の旅は、本当に苦しかった。でも午前一時半、霧島神宮駅前に着いた時、真夜中というのに、友が迎えに来てくれていて本当に嬉しかった。先生方の講義も身にしみいる思いで聞かせていただきました。「本当の幸福は求めているうちは来ない。苦しみの中に自分を投げこんでこそ本当の幸福がある」と言われた先生のお言葉には力強いものを感じました。私達学生は、現在の乱れた学園を正常化するためにも、是非この合宿で体得したことを、友に伝えねばならないと思う。

夜おそく迎へてくれし友見れば長き旅路の疲れ忘れり

もやもやした氣持から抜けさせた

(東京外国語大学 四年 井上春雄)

僕がこの合宿に参加した動機は、日頃のやるせない氣持からどうかして抜け出したい、そしてこの合宿がその踏石になることが出来ればと思つたからです。僕は先生方の胸を打つ講義をお聞きし、あるいは友達と討論して、今までの何かもやもやした氣持から抜け出すことができ、自分として行くべき方向がわかりかけたような氣がしました。合宿に参加して心のふれ合いができ、自分の心を少しでも知ってもらえたのはうれしく感じました。

合宿にさそひし友のまごころが今しみじみと胸につたはる

まじところが共同生活の基礎である

(鹿児島大学 教 三年 畠中宗一)

今度の合宿参加の動機は『共同生活の意味』を再度考え直すことであった。共同生活とひと口に言っても非常に漠然としているが、単なる集団を意味するのではなくほんとうに人と人が共通の基盤をもって語り合う生活のことを意味する。

歴代天皇の御製を拝聴しながら『すなおなる心』というか『真心』が共同生活の基礎となるのではないかということを見発見できたことはほんとうにうれしかった。

黒土先生の御本輪読の折

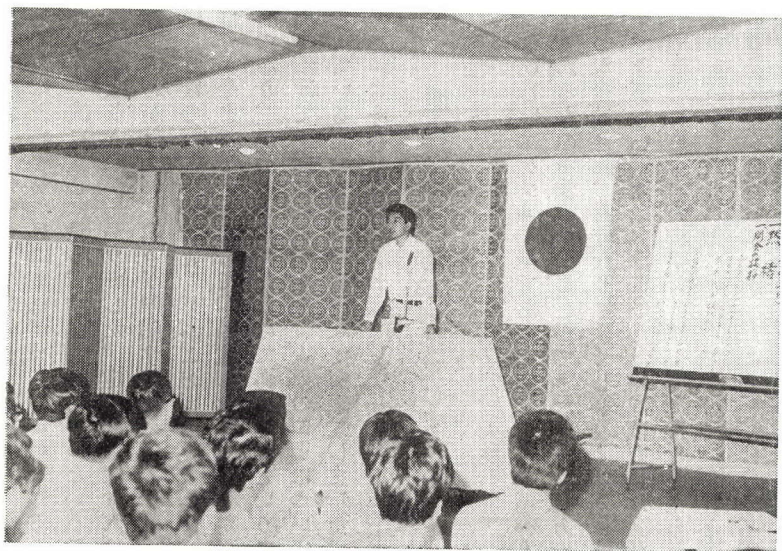
つたなくも我が意をのぶる友どちのあつき心にしばしうたるる

第五班—男子学生—

これだ、この感じだ

(秋田大学 鉾山 二年 栗山 隆)

大学二年目にして私はいろいろとまどっていた。自分の生き方をはっきりさせたかった。はっきりさせるといふより道を失っていた。何かにすがりつきたい気持ちだった。宗教でも良かった。でも何かを信じてしまるのが恐しかった。それでいて本当に信じるものがほしかった。もっと身近な実体、



カメラ・レポート3

開会式 学生代表の力強い挨拶で合宿はスタートした。

一人の生き生きとした実体が欲しかった。夏休みになって、クラブも学校も寮からも人から逃げ出すようにして家に帰っていった。そういう気持のままで、この合宿に参加したが二日目、三日目と講義を聴いていて、本当に久しぶりに、「これだ、この感じだこの生き方でいいんだ」と思うようになった。特に小田村先生の御講義はすばらしい。理屈っぽくなっている自分の頭は説明されてもダメなのです。あの「怒り」が胸を突きさすのです。硬直していた心をぶち破るのです。今までも感銘を受けたものはあったが、すぐ忘れてしまいました。しかし、今度は北の地方の大学に帰っても、また一人で山に入っている、私の「聖書」ともいへば本を携えたかと思えます。それは天皇の御歌であり、小田村先生の書かれた本を始めとする、諸先生の真心ある御著書、特に、和歌であります。

感動にむせびし涙忘れず心満ちつつ我は帰らむ

私の考えていた天皇観が間違っていた

(法政大学 経営 一年 鈴木良知)

今度の合宿で私が今まで考え、かつ行動し、かつ勉強したことについて深く反省することが三つあります。先ず、天皇は有史以来専制政治の張本人であり、今まで人民を苦しめ、今度の大战では、天皇こそが戦争犯罪人であると思っていました。が、歴代天皇の和歌にじかに接し、天皇がいかに我々國

民を深く考え、かつ愛しておられるかを知り、私が今まで考えていた天皇観がいかにまちがっていたかを知ることができました。次に虚心に見る、すなおに感じるということがいかに大切なことがわかりました。虚心に見なければ、本当のことはわからない、我々が学問するうえで、一番大切なものはこれなのだということをやりました。最後は、自分が今まで考え、そして、勉強したことがいかに浅く末梢的であり、かついい加減なものであったかということが、情熱を傾けて講義される先生や、人生のことについて一生懸命考えている友や先輩の態度をみて痛感致しました。

心かよふ友との語りつきねどもはや合宿の終り近づきぬ

歴史の正しい見方を自覚してなかった

(九州大学 一年 戸早哲郎)

きびしいスケジュールであったが、それ故精神も集中し、価値あるものを修得することができた。物の見方の浅さが、いつも自覚され、自分なりに深くしようとするにもかかわらず、きびしい態度に欠けていたため、充実した生活が送れなかった。この合宿の御講義で歴史の見方を教えられ、自分が歴史というものに真剣に取組んでなかったことと歴史の正しい見方について自覚がなかったことが、自分に不安定な生活を送らせていた原因であることに気がついた。又、歴史に關連して「道」という問題が私に生じ、今後、考えて行こうと

思う。私は少なくとも人間同士の信頼感や、連帯感が「道」というものに関係してくると思われる。自分を見守ってくれらる大きな目のような存在を自覚することなくして「道」というものを見出し出すことはできないように思われてならない。真心をこめて語らる御言葉に悪しき心の洗はるる思ひす

「道」を率先して歩まれた天皇

(鹿児島大学 農 四年 定栄安治)

私は国という言葉に対し、それほど、反発を感じたことはありません。しかし今回講義される先生方が日本のおかれた状況を話される切々たる思いは、まるで自分のことを考えておられるようでした。ご自分が国の運命の中に入りきっておられる。同じく「天皇」についても、それほど反発を感じたことのない私は、時にはあまりにも完全無欠な遠い存在の方のように思える時も多々ありました。しかし、小田村先生のご講義を聞いて、歴代天皇の御歌にふれることができませんでした。徳川時代の天皇方については初めて知ることができましたが、御歌の中に「道」という言葉を多く使っている点の小田村先生から指摘され、その道についてお話しされたことが、忘れられませんが、だれでもが安心して歩ける「道」を率先して歩まれている天皇、このご精神は我々の生活の基本であると思います。それを遠ざけてしまってきたことを反省します。さらにまた、班での討論において、素直になることの

大切さを感じ痛感致しました。皆おとなしい班員の方ばかりでしたが、討論で一人後ろに居ておし黙っていた友が話しだしてくれた時は、うれしくてたまりませんでした。一語一語心をこめて語り行く君の言葉の力強しも

天皇の心情に触れることができた

(慶応大学 法 二年 重松賢一)

班別討論や論読の時に自分の心を素直に開けなかったことが残念です。

諸先生の御講義を聞く時、その話し方態度など、一つ一つが自分自身に強く向けられているような思いがしました。

小田村先生の御講義により歴代の天皇の御歌に接することができ、今まで名前も知らなかった天皇の心情に少しでも触れることができて貴重な経験をしました。

合宿の体験を毎日の生活に生かしたい

(成蹊大学 経 二年 富田泰史)

大学の議義では聞かれないような、諸先生方の御体験に基づく、貴重なお話しは、これから私が毎日生きてゆく上に於いて非常な助けとなりました。心から感謝しております。班別討論では、心を開いて語り合うことのむずかしさ、また、自分の心をありのままに語ることのむずかしさを感じました。

小田村先生のご講義は、国民同士の結びつき、そして、天皇という存在について、明確な信念を植えつけて下さいました。国を思い、又国を憂うる一日本人として、これから何をしたいかなければならないか。これは一人一人が自分の生活の上に立って毎日毎日着実に押し進めて行くべきものだと思います。一部の学生は暴力にうって革命を叫んでいます。これは間違いだと思いません。学生には、学生らしいやり方があると思います。それは一人が一人に対して心を開いて話し合い、その一人が他の一人という様に一人が二人に、二人が四人にといった地道な、辛抱強い活動が必要だと思います。この合宿での体験を毎日の生活にかしつ、人の為、そして広くは国の為になるように、一生懸命努力していきたいと思いません。先ずは、自分自身がりっばな日本人として、胸をたたくて生きていけるような人間になりたいと思いません。友どちの語る言葉は違へども同じ思ひに心うたるる

心の中をさらけだすことの難かしさ

(亜細亜大学 法 二年 林 正紀)

台風の為四十時間もかかり、途中で何度か引き返えそうと思ったが、なんとかたどりついてみると、そこに思ってもみなかった出迎えの方々の暖い言葉に感激し、それから五日間は熱いものが胸にもえ続けていた。こんなにも国を思い心を大切にする人々がいるとは。

理論対理論の生活が多かった私にとって、心の中をさらけ出すというむずかしさに驚きもし、又、今後そういった努力をしなければならぬのだという思いを抱いた。前から一応知っていたこの合宿だが今回初めて参加し、今まで参加しなかった事が、悔やまれてならない。来年は是非数人の友も、この合宿に参加させたいと思う。

集ひ来て心の底より話し合ひ寝食共にせし友ぞうれしき

歴代の天皇の御歌に初めてふれた

(西南大学 経 四年 脇岡俊一)

私は、今度の合宿では友達のことを、先生方の話される事を、理解できるように一生懸命聞く努力をしようと思ってきましたが、完全とは言えぬまでも、自分では精一杯やりました。思いで満足しています。歴代の天皇の御歌に初めてふれ、僕が今まで持っていた天皇に対するイメージがはつきり変わってきたのを感じます。今度の合宿でも一番強く感じたのは日常の生活の中での一つ一つの積み重ねが結局は、親を友を、国を、天皇を思うことに通ずるんだと思いました。厳しかったにもかかわらず、合宿を終えた今、なんとも云えない心のさわやかさを感じています。

わが思ひ言葉少なに話す友とぎれとぎれに気持しのはゆ

第六班—男子学生—

生きるはりあいが出てきた

(熊本大学 工 二年 坂本精児)

初めての参加でまず感じたことは、自分の思っていることを、他の人にわかるように言えなかったということです。大学でクラスの仲間と話しているときは、話しが行き詰った時はごまかしてでもその場はすんでいました。この合宿で真剣に話される先生や各大学の友の姿を見て、本当に今までの自分の生活が悔まれてなりませんでした。ここで学んだことを、自分の生活に生かしたい。その気持で今はいっぱいです。今までも生き甲斐、人生ということを勉強してきましたが、何か今までより生きるはりあいが出てきたように感じます。あと一日でも二日でも多くこの合宿生活を送りたい気持ちです。

力強き師の御言葉を聞きをればおのづと身体の前にのりだす

自分の傲慢さに気付き恥しかった

(法政大学 法 一年 井上常憲)

一番僕自身に収穫になったのは、班別輪読の時、班長から、自分の傲慢さを指摘されたことだった。自分はある程度、世の中のことを理解し、反共主義者だということを誇っていま



カメラ・レポート4

山のすがすがしい空気を胸一杯に朝の体操

したが、それは大変思い上っていたことに気が付き、恥しい気持ちで一杯です。そして、友だちと話してきて、一致点を見い出せず、そのままに相手を侮辱した格好で終わっていたことに、深く反省をした。

心を開いて話す重要さ、素直な心の必要さを和歌の創作やお互いの話し合いの中で痛切に感じました。

僕はどれほど心を開いていたのか

(九州大学 法 二年 木村秀晴)

僕は初めて班長を任せられましたが、合宿を通じてどの様に班の運営をやっていたかということのみに終始していたと思われまふ。全体意見発表の折に、ある班長さんが、班員のみんなに対して自分が傲慢だった、本当にすまない気持ちですと、涙ながらに言われ、その次に班員の一人が、いやそんなことはなかった。班長の一生懸命な気持は伝わって来ましたと、やはり涙して答えているのに胸を打たれました。僕自身が皆の一人一人にどれほど心を開いていたのかと考えると本当に恥づかしい気持ちでした。自分は何も知ってはいないという謙虚な最も基本的な姿勢を忘れていたと思います。

心と心のつながりを大切にしたい

(鹿児島経済大学 経 一年 森 茂木)

初めての参加で不安なこともありましたが、参加してとて

もううれしく思いました。講師・先生方の感銘深い話を聞いて心がひきしまるような気持ちです。

班の友ともいろいろ自分の意見をぶつけてみたかったけれども、何か自分でうまくいうことができなかったのは残念でした。また初めて和歌を作ってみて難しいというのが実感としてわかりましたが、友から少しほめられたのはうれしく思います。この合宿で体験できた真心を持って人に接するという心と心のつながりを、これから大切にしたいと思います。

一心に聞きをる我に師の声は腹の中にてずしりとひびく

事に対する心の姿勢を反省させられた

(亜細亜大学 法 二年 成田義人)

講義で一番心に残ったのは戸田先生の「本当の喜びとは、己れにつながる命のために己れの命を捨てるところにある」と言われた事です。又、これが人としての生き方の普遍的原則であると力強く言われたことであります。僕の今までの生き方もかくありたいと念じながらも安易さに慣れていた事を反省させられました。事に対しての心の姿勢はあくまでも真剣に真摯な気持ちであらねばならないということを痛感いたしました。

我も又命捨てなむ人のため限りある身の限り尽くして

身近な人に語りかけねばならない

(鹿児島大学 法文 二年 太田 勳)

かつて「社会」を良くしようと考えていましたが、今は「社会」を良くしようとする考えの中に、良くなった「社会」から恩恵を受けようという考えがあることに気づきました。そういう人生態度では、良くなった「社会」にあっても結局は何も感じないのではないだろうか。第一「社会」といってもその実体は抽象的なものでなく自分の身近かなもの——家族、所属団体——などによって構成されている。だから「社会」を良くしようとするためには遠い存在のものではなく、自分の隣りに居るものに語りかけていくという姿勢がなくてはならぬと感じました。

小田村先生の感想を聞きて

師の君の御言葉聞けばこの我にのたまふ如く思はれてくる

心ゆくまで話し合えた

(中央大学 法 二年 岩上隆一)

現在の大学ではどうして学び得ない人の和を知ることができ、人生観や現在の日本のかかえている問題を、腹をうち割って心ゆくまで語り合えたことに非常な喜びを感じています。この合宿に参加された多くの人々と同じく日本人なんだみんな同胞なんだという感じを強く持ちました。そればかり

ではなく、講義を聞いて学生として学ぶべき態度はどのようにしたらよいのか気がつき、また、心を虚しくして、一心に他人の話聞くことが大切であることを、つくづく感じさせられました。来年の合宿には是非また出席させてください。また、共に学ぶことのできることを楽しみにしています。

合宿で共に学びし諸友よ再び集はむさらに学びて

「天皇」、「国家」についての考え方は理解できない

(慶応大学 医 二年 仁熊 浩)

個人個人があらのままの心で話す班別の討論はたいへん価値あるものであった。講義では村松先生、木内先生などの客観的立場に立ったお話はすなおに受け入れられたし有益であったと思う。しかし、戸田先生、小田村先生の講義は客観的立場から物事を見る立場ではなく、いくつもある物の見方の一つであると思う。そのいろいろある見方の内の一つをとって我々におしつけるような講義は理解できないものであった。先生方の言われる天皇、国家については全く理解できなかった。

もう一つ、この合宿に参加する人々がほとんど皆同一の考え方(特に天皇、国家について)を持っていることが不思議に思った。やはり本当の話し合いというものは、いろいろの考え方をする人々が集まって、いろいろの考え方を出し合っ

て皆で考えていく方がおもしろいのではないかと。

最後に、この合宿の紹介のパンフレットには「学問と人生を語ろう」と書いてあったので、そのつもりで来たが、実際は思いもなかった天皇、国家の話が多く期待はずれで残念に思う。

第七班—男子学生—

頭の中の霧が消えた

(早稲田大学 政経 四年 開 克史)

「真の意味での幸福とは、『いのち』をすてて始めて体得できるものである」との戸田先生のお話、「はかなさの上に一輪の花を育てる」との村松先生のお話を聞いて長年、自分の頭の中にひっかかっていた霧がすつと消えるような清々しきを感じました。今まで、その霧が何か、はつきりと判りませんでした。ただ、現代ではどうすることもできない無力感からそれが来ているものと思っていました。それは決して克服する事はできず、一生耐えながら生きていかなければならぬものと思っていました。しかしその無力感が村松先生の一言ではつきりと判ったような気がしたんです。西洋的なニヒリズムと日本での無常感とが、ニヒリズムを知りつくした上での日本人ということが……。

小田村先生、夜久先生のお話を聞き、今迄、漠然とした気持で天皇をお慕っていました。が何かはつきりしたものを少しつかんだような気がします。どうしても自分から天皇のことを話していくことができなかつたのですが、これからはそれができるような気がします。

いつの世も国民の上思はれし大御心の深きを知りぬ
御身より国民のこと思はれし大御心はありがたきかな

国を思う心をやしないたい

(福岡教育大学 教 二年 金沢明夫)

僕はこの合宿で、国を思う人の心、この純粹かつ無私の心が国を支える大きな力になるという事がわかったように思います。そしてこの力をやしなうていくうちに自分のまじめな人生態度が生まれてくるのだと思います。自分が心から思っている事を相手に伝え、お互いの心が結びつくことよって国を支える力というものが培われていくように思われます。僕ができる事、先づやらねばならぬ事は古典を学び、その中から自己の生き方をみつけ、心ある友を求めること、又、国際情勢に強くなり、現状を把握しうる目を養うことです。この気持を大切にしながら学園において頑張っていきたい。

天皇の大御心に我ふれて思はず胸のつまる思ひす

友が真剣に耳を傾けてくれた

(鹿児島経済大学 経 一年 成尾 勇一)

思えば五日前、不安な気持でマイクロバスに乗り、登ってきた自分であるが、今では合宿が一日少なくなったことが残念でならない。あまりにもおろかな自分に対し、真剣に耳を傾け、自分(私)の質問を一生懸命考えて語ってくれる友の一言一言がうれしかった。

この合宿で最も痛切に感じた事は日本の古典、文化、民族性、歴史のすばらしさであった。これからは友に對此のこゝとを自信をもって話すことができるような気がします。

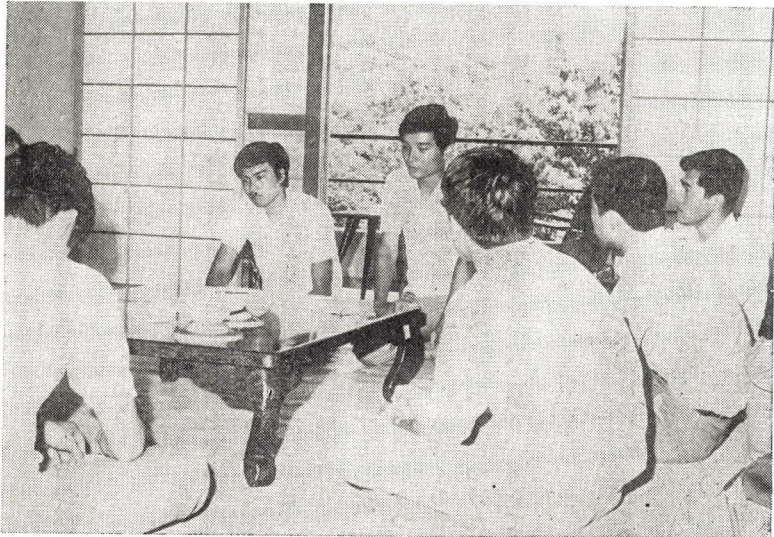
語りても語りつくせぬ君と僕時の少なさを惜まるるかな

志をたてねばだめだ

(玉川大学 文 二年 青木常泰)

合宿に参加する前は多少不安な気持でしたが諸先生方の御講義をお聞きし又、班員となごやかに話すうちに不安はふっ飛んでしまいました。今は、すがすがしい気持です。本当に自分が志を立てねばだめだという自覚にいたりました。先生方が言われたように皆がこのような気にならなければならぬと思います。

班長さんがいつもはりきっていたので私達班員もみんな明るい気持で合宿ができました。ありがとうございました。



カメラ・レポート5

班別自己紹介 大学名・氏名・参加動機を一人づつ語る。

遠慮なき笑ひの中で班友と心かよはずときぞうれしき

正直な自分でありたい

(京都大学 大学院 教 鈴木睦夫)

私のこの合宿参加は二度目ですので今年こそ清い気持で望むべきでした。しかし、多くの人から聞いた「感激した」という言葉に一抹の疑いを感じました。この合宿で感激しても、日常生活に帰れば、以前と同じような状態になる人が自分も含めて多いのではないか。だから、そんなに大袈裟な感激の言葉はよせといたくなるような卑屈な気持が起ったからです。しかし、人を皮肉な目で見るより、自分に正直に目を向けることこそ大切な事だと反省しました。

素直に理解できる天皇と日本

(法政大学 法 一年 渡辺利巳)

合宿に参加して最も感謝することは天皇と国家とのつながりは日本文化の特質をもって考えるならば極めて素直に理解できるということを知り得たことです。

重要な事は東洋思想の真髄を最もよく包摂した日本文化が、すでに行きづまりつつある西欧文化を哲学的に完全にのりこえたものであるという事である。かかる思想が日本において、古来、その文化の根幹をなしていたという事は実に驚ろくべき事と思う。この東洋思想を現代の日本人がいかに学

び、いかにその心を体得するかは一に努力にかかっていると
思っています。

非常にスッキリしました。あとは勉強あるのみです。

日本、天皇をもっと考えよう

(亜細亜大学 商 三年 林 光夫)

台風に苦しめられ、何度か合宿参加をやめて帰ろうかと思つた。しかし、この合宿に参加し、帰らなくて本当に良かったと思つています。我々若い者がこれからの日本をささえていかねばならぬ。それなのに今迄何と無気力であったことかと反省させられた。天皇様の国民に対する心を、特に学ばなくてはならないと思う。日本文化の危機が迫りつつあるのに、西洋思想のみに目を向けすぎて多くの若者は不幸であると思う。これからは、この合宿で身につけた日本という国、天皇様というものを多くの友と語り、考えてもらえよう努力したいと思う。

進藤先生の尺八を御聞きして

尺八の音色を聞けば我が胸に古への世のしのばれてきぬ

合宿の方針に感激した

(日本大学 文理 三年 藤井伸一)

合宿教室に初めて参加して人生にプラスになるような事を
みつけました。和歌創作は正直に自分の思うがままを表現す

ればいいという最も簡単な事に気が付き、又歴史の見方についてはいわばただで判断せず、歴史の本当の心をくみとらねばならない事を悟りました。

私は学内、学外サークルにおいて、暴力を否定し、ペンとガリ版で反体制を叫ぶ人達と戦って来ました。しかし、そんな戦いよりも、真の変革を志している合宿の方針に感激致しました。

真心の通ずる友と語り、生活を共にして得たものを今後、自分の生き方の中に生かしてゆきたいと思えます。

実感がわかない

(熊本大学 工 二年 栗原 茂)

私はこの合宿にはじめて参加したわけですが、講義や班別討論等で先生や友の話を聞いて、自分では頭の中ではわかっていても、まだ実感としてわいてこない点もあります。これからは日常の生活において、自分の問題として考えていきたい。

合宿の最後の夜となりぬれば夜遅くまで友と語りぬ

第八班

男子学生

素直にもものを見ることを心がけたい

(鹿児島大学 法文 二年 出田哲朗)

合宿教室の御講義をお聞きして、僕達が、よく考えもしないで科学的、実質的な物の見方ばかりを重視することの誤りを、改めて感じました。木内先生の「社会科学方法論」を読んで、改めて手がかりに考えて行こうと思います。また、各先生が共通して言われた事、つまり、虚心に見る、すなおに見る、自然に対して謙虚であるといった言葉をできるだけ心にとめてゆき、いつかわかるようになる事を期待したいと思います。それから、小田村先生が最後に、国を思うことと天皇を思うことは結びつくと言われたことがわかるような気がして、うれしく思っています。

師の君のすなほに見ろてふ言の葉をいつも心にとめおきゆかむ

国に対する考えが変った

(慶応義塾大学 商 一年 鈴木利明)

台風のため十数時間も遅れて霧島駅に着いた時に、国民文化研究会の方々が迎えに来て下さったのは、深夜であったことも手伝って、非常に嬉しかった。

合宿中の諸先生の御講義は、それぞれに特色があるものであり、自分が今まで持っていた国に対する観念を、よりよく改めさせてくださったことに感謝いたします。それにもまして、合宿を包んでいるある一本の共通な理念、大きな支柱が、このような合宿の大成功をもたらしたと思われるのです。同じ心根をもつものが協力すると、不可能と思われる事

でさえ可能ならしめるということを、何より顕著にこの合宿は示していると思います。

語れども語り尽せぬ胸のうち霧島の夜は更けまさりゆく

生き甲斐とは何かを考えさせられた

(亜細亜大学 経営 二年 光山和秀)

日本に生まれ、日本に育った自分は、日本人としてどのように生きるべきなのか、本当の幸福、生き甲斐とはいったいどんなものなのだろうかを深く考えさせられた。「憂国の熱情がどんな苦しみも我をたえさせた」という言葉があります。天皇の御歌を詠んだり、諸先生の精魂をこめられた講義をお聞きした今の自分には、何かこの言葉は、自分の心になづまのごとくうずまいてるのを感じます。

ホテル着き前にかかげる歌詠めば旅の疲れも消ゆるを覚ゆ

すなおなる心が大切である

(早稲田大学 文 二年 富田欣三郎)

合宿中、語り、考え、論じあつてきたものは、「天皇」についてであった。それは、我々が日本人として、「国家」「文化」「伝統」「民族」といった問題を考える時、当然帰着するところのものであるからである。私は、この問題に関してこれまで自分でも考え、多くの人達とも話しあつてきた。しかし、そこにあるものは、無責任な放言だけであつ

た。日本人として共通の立場から考えることもなく、あまりにも天皇を観念的にとらえ、天皇の御心というものをとらえていなかった。

国文研の合宿に参加し天皇の御歌にあらわれている御心を知り、諸先生の御講義を聞き、友達との真剣なる討論を通じてすなおなる心というものを知った。このすなおなる心が、今の私には一番必要なものであることがわかった。この合宿を通じて得たものを、これからはいつまでも心の中にとどめて、くりかえしくりかえし考えてゆかねばならないだろう。

小田村先生の御講義を聞きて

天皇の国民思はる御心に日の本に生くる喜びを知る

友と心を通い合せることが大切だ

(九州大学 歯 四年 吉田哲太郎)

合宿を通じて、班員の一人一人と心を通わせて生活するところが、国をよくしてゆく第一歩であると思ひました。まず、自分の身の廻りの友と心を通い合わせる事が大事だと思ひました。と言って、班員の一人一人と十分に心を通い合わせることができたという訳には行きませんでした。みんながそれぞれに、国のことを思い、それで、どうしたら国がもっと良くなるかということを考えているのを知って、嬉しくなりました。僕自身が国の事を思うように至ったこれまでの過程を具体的に話すことが少なくて後悔の念を感じますが、しか

し、これらの友達に、自分が本当に感じ、思ったことを話せばわかってくれるということを感じました。

合宿も終りになれば友達の花はなごみうちとけゆけり

合宿を転機に勉強してゆきたい

(学習院大学 経済 一年 坂本雄二)

本当に合宿へ来てよかったと思います。今まで自分なりに未熟ながらも、日本の国、天皇陛下に対する考え方もっていましたが、それが誤っていないことを知るとともに、まだまだ自分の不勉強なことに気づきました。しかし、この体験を転機として一層、考えを確立していくために努力していきたいと考えております。学窓に戻りまして後は、友にも真心をもって接してゆきたいと思っております。

御製を拝して

国民を愛しまれる大君の御心しのべわれらともども

短歌創作を続けたい

(東京大学 教養 一年 等 健次)

毎日毎日、諸先生の熱心な御講義をお聴きし、新しい知識で頭がいっぱいです。その中で特に心に残ったのは、命の触れ合いということです。真心をもって話し、虚心に事象を観ることが、命の触れ合いにつながる。そこで、短歌を創作することが如何に大切かが分かりました。短歌創作を日常生活



カメラ・レポート6

班別討論・心を開いて率直に語り合う。

に定着させようと思ひます。

合宿の最後の夜に友どちはただひたすらに歌ひかはせり

友どちは肩組み合ひて高らかに歌ふにわれは節知らずして

活路を見いだせなかつた

(熊本大学 工 一年 前川 深)

諸先生の御講義をお聞きしたり、班で討論をしたりして、現代の思想的混沌に活路を見いだすつもりで参加したが、ほとんどそれができなかつた。感動できなかつた。

にぎりなき霧島山の青空は心さやかにほれわりゆく

第九班

—男子学生—

松陰と玄瑞に本当の師弟関係をみた

(東京大学 法 四年 小田村初男)

今年を去年までの、何となく受身の姿勢を脱して、積極的に先生方の御講義を心で感じとり、また感じた事、自分の心に思ったことを、卒直にしかも心を開いて友達にぶっつけ、また友達のことを真剣に聞き心に受けとめたいと思つて参加しました。そしてこの合宿では、本当に先生方の御講義の一つ一つが心に伝わってくるのを感じました。併し、班別討論でこの思いを友達に一生懸命ぶつつけたつもりではありましたが、班の一人一人からはねかえってくるのを、なかなか感

じることができませんでした。この時本当に、自分のいたらなさ、心の聞くことの足りなさ、思ひのいたらなさを感じ、非常に残念でなりませんでした。班の人々に本当に申し訳ないと思つています。

御講義の中で一番感激したのは、小柳先生がお話して下さった久坂玄瑞と吉田松陰との間の激しい手紙のやりとりです。松陰先生は、初めて手紙をくれた十七才の久坂玄瑞に手厳しい返書をなさる。それに対して玄瑞もひるむところなく反論する。そうしたこと何度もくり返してゆくそういつたきびしさの中から、本当の師弟関係ができるのです。それが本当の学問を学ぶ姿勢だということも知りました。そうしたきびしさを私はもっていきたいし、またもっていきこうと思つています。

玄瑞と松陰がかはした書を読み

かはしたるはげしき書からまことなる道を求めし心伝はりく

みずみずしい情意をもつて生きたい

(明治大学 法 二年 白鳥 健)

過去の自分は、余りにも殻に閉じこもつて生活して来たのではないかと強く反省させられると共に、友達の真心の溢れる真剣さに心打たれた。ここで学んだみずみずしい情意をもつて生きてゆくために身近かなことから修練しゆきたいと強く思う。同時に自分の政治、社会についての見方がまちが

っていたのではないかという疑問が起り始めた。学んだ体験を今までの自分に、どう生かすかが大きな課題となった。

君が眼に直き姿の溢ふれゐて我が心根を恥しく思ふ

文字には表わし尽くせぬものを体得した

(中央大学 経 二年 田澤紀雪)

一例ではあるが、日本人の無心に掌を合わせるという習慣の何と素朴な心がそこにあるであらうか。形ばかりに神経を使っていた自分は、その行為を見て、日本の文化とも言えるものを見た思ひだした。「素直なる心」など、文字には表わし尽くせないものを体得した。このことが、これからの自分の生き方に強い支えになることが想像でき、非常に嬉しくなった。未熟ながらも心弾ませて家に帰ります。

人の世の真なる心知らまほしと集ひ来たりぬ霧島の地に
国思ふせつせつの意気会場に張りつめてをり心に響き来

我をまもるあまたのみたまに掌を合せ素直なる謝念を捧げまつりぬ

友の真心が胸深くしみこんだ

(国際経済大学 四年 竹下成美)

班別輪読、討論をとおして、未知の友達ではあるが、本当に心の奥底から討論して、もやもやとしたものが吹き飛んだような感じがした。自分と同じ様にいろいろなことで迷って

いる友がいるなと思った。

合宿を開催するに当って、台風でくずれた土砂を取り除いてくれた友達の心あたたまる真心、また事務でいろいろ気を使ってくれた人々の真心等が、胸深くしみこんでゆくのが感じられた。

天皇の問題を見過してはならぬ

(鹿児島大学 法文 二年 山辺尚幸)

現代日本の状況を見るに、憂慮に耐えない。この合宿で講師の先生方が力説された問題、即ち戦後社会の人心の荒廃を私達は真剣に考える必要がある。天皇の問題にしても、決して見過してはならない。小田村先生が、「天皇は人間の歩くべき道を素直に歩いてこられた人」と言われたが、正にそのとおりだと考える。最後に村松先生のお話を、直接聞いたことが最も嬉しかった。

納得のいくまで話せなかった

(亜細亜大学 経 一年 福岡 達)

諸先生方や先輩方のお話には、一つ一つ胸を打つものがあり、自分もやらねばという気持がこみ上げてまいりました。学校へ戻ってから、この気持を忘れずに実行に移していきたいと思います。しかし、ここで一つだけ残念なのは、班別討論の際に一人一人が活発な意見を出し合っていなかったよ

うに感じられたことでした。これは私も反省していますが、もつと一人一人、自分の意見を火花の散るように発言しなければいけないと思う。私はこの討論会で納得のいくまで話し合えなかったことが残念でなりません。

日常生活の中にこそ人間の学がある

(拓殖大学 商 三年 鶴間二郎)

この合宿で強く感じたことは、哲学とは我々の生活から、かけ離れた観念にあるのではなく、人間の日々の生活における、ささいな出来事の中にこそ本当の意味での人間学があり、これこそ哲学という名にふさわしいものであるということです。このことを日頃我々は忘れがちですが、そうしたもののほど、大事だと思えます。

この思ひ心に誓ひ忘れじと今霧島の地を我は去りゆく

先生方の言葉の響きに生命を感じた

(中央大学 法 一年 富山徳久)

先生、先輩方の言葉の響きに溢れでるような生命を感じました。今さまざまな執着を捨て切れないながらも、「一生懸命勉強し、実行していこう」と思っています。

第十班 | 男子学生 |

日常生活に真心を生かしたい

(熊本大学 法文 一年 田之上正明)

僕はこの合宿で一番心に残ったことは、人の心の美しさということでした。そしてこれから考えねばならぬ問題は、日常生活の中でいかに真心をもって生活するかということです。僕は素直な心をずっと持ち続けるように、精一杯の努力をしてみたい気持です。

「国を思っているのは自分だけでない」

(九州大学 医 五年 小柳左門)

全体意見発表で小野吉宣君が事務を司ってくれた中学、高校生諸君の事を話してくれたのを聞いて、とても胸を打たれました。そして中学、高校生諸君に対する小野君の暖い思いやりに頭が下がる思いがしました。事務の諸君は夜遅くまで起き、厚い印刷物が出来上がった時は、部屋中を飛び上って喜んだということです。木内先生の「人の為に働いた時に本当の生き甲斐を感じるのだ」という言葉を思い出しました。合宿全体がこのような人々の思いやり、努力の上に成り立っていることを強く感じました。同じく前田秀一郎君が、「国を思っているのは自分だけでない。誰しもが思っていること

なのだ。自分だけが国を思って行動している、他の人は何もやらないではないか、という考えは甘い」と述べましたが、僕自身、何かにつけ「自分がやっている」事に対して自惚れを抱がちです。自分が苦しみ、努力しているときは、他の人も違ったところで苦しみ、努力しているという事を忘れてはならないと痛感しました。

壇上に登りて前を見ずあつつ訴ふる友の口調はげしき

この三年ともに学びこし友がきの雄々しき姿に涙こぼれり

先人の和歌に雄々しきを感じた

(鹿児島大学 法文 三年 徳丸雅信)

この合宿程すなおに物に感じあるいは和歌に接することができた合宿はなかった。北島先生の和歌導入講義で紹介された防人の歌、幕末志士の歌そして戦争未亡人の歌の中に数多く子供との別れ、妻との別れあるいは亡き夫を偲ぶといった、今も昔も変わらない人としての悲しみが詠われていた。しかもその悲しみにおぼれず、流されずにそれを素直な心で受けとめ、乗り越えていった雄々しい心が表現されていました。僕はこれらの和歌に接し、本当にその雄々しい、丈夫の心をもっと学び、そしてそれを自分の心の中で育ててゆきたいと思いました。

刑部直千国の和歌を詠みて

いかばかりかなしかりけむますらはは涙あふれし妹が眼を見て



カメラ・レポート7

左より村松剛先生・木内信胤先生・小田村理事長・ロビーにて歓談

かなしみをのりこへてゆくますらをの雄々しき心我もまたなむ

「思う」ことの糸口がつかめた

(岡山大学 医 四年 柳生史登)

自発的にこの合宿に参加したのではないのですが、来てみてよかったですと思います。これまで僕が物を見ていた視点とは全く違った視点から物を見る見方のあることを知りました。これまでの僕なら、たとえそのような見方のあることを説いてくれる人があっても、全くかえりみなかったと思います。が、三百人近い人の中で一緒に考えたことによって、本当の意味での「思う」ということの糸口がつかめたと思います。合宿の終りてのちに素直なる心もちたし今は持てねど

幼な心を持つことの難しさ

(東京大学 理 二年 宮本章夫)

全員が先生方の言われる、まごころというものを大切にしたいと感じ、その気持を忘れずに今後の大学生活を送りたいと思っているようでした。その気持は僕にもあり、とてもうれしく思いました。しかし僕自身をかえりみると、幼な心をもつことは難しいことだと嘆かざるを得ません。桃園天皇は、そういうものを持っておられたでしょうが、私にはあのような御歌は修練してもできそうにありません。素直な気持になれないことが悲しいと思いました。

友らみな心開きて語れるも我はなかなかできずくやしき

何かを感じた

(亜細亜大学 商 三年 中館勝治)

感じた、確かに感じた、何かを感じた。しかし自分は未だ何か夢を見ているようだ。来年参加するときまでに、今感じていることをはっきりさせたい。

第十一班—男子学生—

素直な気持に戻るべきだと思った

(亜細亜大学 法 三年 成田幸太郎)

私は以前には生きてゆく為にはずるく、汚く、他人をごまかしてかけひきに勝ちながら生くべきだと思っていたし、それは現代を生きる大人としては不可欠な要素であると思いを実行して来た。その為、人に「おまえは絶対自分の本心を見せないな」等と言われてきたが別に気にもとめなかった。しかし合宿に参加して、はじめて私は目をさまさせられる思いがした。自分の和歌を、人から批評され、いかに自己の心に忠実に生きていないかが、いかに自分を偽わっているのか、それが自分の歌にあまりにも浮きぼりに写し出されているのに気づき、まさに赤面する思いであった。この時素直な心にもどるべきだと深く思いました。

これから私はこの体験を土台として和歌というものをもっと勉強し努力していきたいと思えます。

人の素直さに感激した

(九州大学 工 二年 岩下正幸)

先生方の御講義にも深く感動しましたが、班別討論や全体意見発表も非常にすばらしいなあと思えました。班別討論で上っ調子のことを言っても誰も激しい言葉でとがめるわけではない、しかし、自分の心に深く根ざしていかない言葉では、語れない内容をもっていました。全体意見発表の折、壇上で「我を通し過ぎてすまなかった」と涙を流してわびる人を見て、人を全く素直にさせるこの合宿に感激せずにはおれませんでした。

木内先生の御講義に対する私の質問に、先生から「このくらしいのことは自分で勉強しない」とはねつけられた時まだ私の考えや態度が充分でないということを悟られました。来年も何とかして合宿に参加したいというのが現在の私の心境です。

先生の「自分でせよ」との御言葉にわが心がけ足らぬを知れり

真剣にとり組みたい

(鹿児島大学 工 一年 高村経明)

この合宿は私にこれからの人生を生きゆく上で大きな影

響を与えてくれたように思う。

先生方の御講義を聞いて今までどう考えても解決できなかった天皇制について納得のいく御指導をいただいたことに誠に有り難く、またこれからの日本をよくして行く方向が解って大変うれしい。

これを機会にただ口で論ずるだけでなく、日本の歴史伝統を書物や和歌を通じて理解してゆくよう、また友と語り合い勉強して行きたいと決意して居ります。

日本の事を真剣に考えて居られる方が沢山おられる事に肝に銘じながら自分も真剣に取り組む覚悟です。

くに思ふ多くの人の姿見て我が身恥づかしこのままにては

心と心の対話が あった

(神奈川大学 経 三年 小菅俊男)

今まで異なった環境に育った者たちがこの合宿生活で共に学び、討論することにより、数年来の親友の様になって今日別れを迎えた。それはお互いに心と心の対話が あったからだと確信する。自分の気持を和歌に詠み、友の和歌を相互批評する時親しさが一段と増す。

聖徳太子は「和を以て貴しとなす」と言われたが一国家一民族一言語の国家は日本において外にない。だからこの乱れた時代ではあっても「日本人の心」は一つにできぬはずはないのです。めぐまれた中に生活する日本人はあまえずぎる

感があります。

苦難を乗り越えた合宿

(東京大学 工 四年 青山直幸)

今回の合宿は予期しなかった台風という突然の出来事が起つて、本来に従来の様に充実した合宿ができるだろうかと不安であった。しかし道路をふさいだ土砂を僕達の手で除去し、水も灯もない中で種々の合宿準備をやつていくうちにたとえ日数が一日減ろうと二日減ろうと絶対に従来に合宿以上のものにしなければならぬという気持がわいてきた。

合宿が一日遅れで始まり班員の人々と顔を合わせた時、やはり来てくれたんだなあとしみじみとうれしさがこみあげてきた。班員の方々に切実に求める気持があるからであり、それに応えるために全力を尽くさなければならぬと思った。

最後の討論の時、二人の友達が「今まで多少天皇に対して反発を感じていたが、御歌にあらわれた、全く私心のない御心に触れて今まで自分の心の中にあつたわだかまりが、とけ去つてゆくような気がした。これから天皇を知る上で大きな手がかりになつたように思う」と語つてくれた時は本当に嬉しかった。班別討論の時に皆で歴代の御歌を拝誦していくうちに皆の目が生き生きとして来るのを私は感じた。

朗々と声を合わせて詠みゆける御歌の調べに心高まる

朗々とよみゆくうちにしらずしらず皆の心の融けゆく覚ゆ

根本から考え直したい

(早稲田大学 理工 二年 桑原清春)

副班長をやらせていただきましたがほとんど発言出来ずに合宿を終ることが残念です。勉強の足りなさ、現実を見る目の甘さを痛感致しました。そして、より多くの本を読むと多くの友と語らえばよいとかいうものでなく、今までの二十年間の生き方を根本から改めなければ真の意味での自分の成長はあり得ないと思われる。来年の合宿でその成果を問うつもりでこれからの一年間を努力してみたいと思います。

全体意見発表にて

友はみな壇にのぼりそれぞれにおのが思ひをうちつけに述べ

心からとけこめなかつた

(専修大学 経営 二年 青砥誠一)

私は合宿参加は二度目ですが、果して自分は昨年比べてどのように変化したか、また多少進歩の跡があるであろうかと気にかかつていました。

班で和歌の相互批評をしているとき、私の和歌に心が通っていないと言われ、今の自分の姿勢を指摘されたようでハツとした。班別討論でも班の人々の心にとけ込んでいなかったと思ひました。班の人々の心にとけ込んで語り合うということとは大変むずかしいことであると思ひます。何でも言えば良

いということではなく、本当に自分の心の奥底より思っていることを言わなければならない、いい加減な気持で話してもそれは決して人々の心に感動を与えないものだと思う。

私は素直な気持になるという最も大切な姿勢に欠けていると思う。今自分自身の醜い心を清水で洗いたい気持です。

素直なる気持になれとわが胸に自分自身で言ひ聞かすなり

心に残る合宿

(京都産業大学 経 二年 笹山一義)

講義に続く講義、ともすれば眠りそうになる自分をうらめしく思いました。僕達のために声もはりさけんばかりに語って下さっている先生方を思うと居眠りなどとてもないことでした。ねむけを吹き飛ばすために、ペンでつついたりつねったりした跡のあざはおそらく帰った後も残っているでしょう。そしてその傷跡を見る都度、霧島での講義のこと、討論のこと、和歌創作に頭を痛めたこと、友のこと等々を想い出すに違いありません。最後に小田村先生が「君達はこの四日間に二、三ヶ月分の精神生活をしたんだよ」と言われましたが本当に有意義な生活を送ったと思っと思っています。



カメラ・レポート 8

衆議院議員・千葉三郎先生ご挨拶「合宿教室」を是非一度見学したいとご高齢にもかかわらずお越しいただいた。

第十二班 男子学生一

躍動する生命を持ちたい

(早稲田大学 文 五年 原川猛雄)

合宿での諸先生の講義は熱意あふれるもので日本のことを真剣に考えておられる御心が切々と僕の心に迫ってきて感動致しました。

この合宿に一貫して通っているものは、相手の気持ちになつて考えるということだと思います。このことはなかなか難しいことですが、大切なことと思つていきます。日々の生活でもすれば自分の殻に閉じこもりがちになり、みずみずしい情意というか、生き生きとした生命の躍動感を失いがちであつたのではないかと反省されます。物事に敏感に感ずる柔軟な心の働きのないところに、真の学問、人生はないように思います。古典に接するにしてもまた友達とつき合う時でも、いい加減な気持でそれに対するのではなく、誠意を持つてつき合つていききたいと思ひます。

他の人に伝えてゆきたい

(大分大学 経 一年 野尻哲雄)

この合宿に小・中・高又大学の先生方が参加しておられ、その先生方のはつらつとしたお顔を見てうれしく思ひまし

た。現在のように日教組によって教育界が牛耳られている中に祖国の歴史伝統を真剣に考えておられる先生方がいることを思うと心強いのです。先生方は各学校に帰って生徒や他の先生方にこの合宿で得たものを伝えて欲しいのです。僕もこの合宿で学んだことを自分一人の胸の中にしまいこんでいるのではなく、他の人に伝え一人でも多くの仲間を作つていきたい。

合宿で初めて知りし友達と別れを惜しみ語りあひたり
合宿に集ひし友はこもこもに決意を持ちて山降りるらむ

陛下についての認識を新たにさせられた

(九州大学 工 一年 石元寛明)

この三日間を振り返つてみますと小田村先生がおっしゃられたように多くの思い出が浮んで参ります。特に天皇陛下については認識をあらためさせられました。まだしつくりとまでは行きませんが御製を拝誦していると陛下の国民を思う心、又陛下の人間らしさ等が感じられてきます。今までの私の浅薄な天皇観が反省させられる思いでした。

横岳から桜島を眺めながら詠める

青き空緑の山はすがしきもなか心の晴れなくわれは

志士の和歌に力づけられた

(中央大学 経 三年 笠原敏夫)

この合宿に参加して全国の大学から参加したまじめな学生と会えたことは嬉しかった。私達は吉田松陰・高杉晋作・久坂玄瑞等々のすばらしい和歌を拝誦しました。日本の国難に立ち向かい、命をかけて祖国の危機を救おうとされた敵しい生活とほとばしる思いがあったればこそ立派な和歌ができたのだと思います。

私達が学生として現在の混乱している学園を正常化するために、実際に行動し努力したとき、はじめて先人の和歌がよく理解できるような気が致しました。

国難に憂ひあまりて詠まれたる志士の御歌に我奮ひたつ

ありきたりの評価で人を批判するな

(亜細亜大学 経営 二年 安田 誠)

自分の考え、思想を人に伝えることの出来ない者は、国家について論ずる資格はないときめつけ、それが出来ない人を軽蔑することは間違っていると思う。自分の考えを他に伝えられない者が居るなら、友達になりたいことが何かを汲んでやる努力をすべきである。人には行動力のある人もいるし、ない人もいる。言葉がうまく言える人もいるし、いえない人もいる。ありきたりの評価で人を批判することは出来ないはずだ。一番大切なことは人がどのような気持でいるのか心を配ってやることではないかと思う。

感激の押し売りをやめよ

(法政大学 経 四学 佐藤敏晴)

昨年に続き二度目の合宿参加であったが自分の心を見定めることの敵しさを改めて感じた。我々の言葉はとかく概念化陳腐化しがちであるが、そのことを相手に指摘する時には逆に「すなおさ」ということを手段として利用してしまいがちである。「感ずることを大切に」と合宿で呼びかけることも押し売りのごとくなれば清泉に潜む毒蛇ともなりかねない。

全体発表で意見を述べる後輩を見て

こみ上ぐる涙こらえつ友どちは「我れ悪し」と語りをりたり
いかほどに苦しみをりしか友どちの心のしるべりただうつむきて

第十三班 —男子学生—

天皇の御心と歴史を思う

(熊本大学 工 四年 松田信一郎)

「日本に何故天皇が永続したか」について小田村先生が精魂を傾けて話されたが今一番心に残っている。いのちあるものがいのちもあるものの中に、いのちを投入していくところに人としての生き甲斐があるということを経験した人々がさまざまの形で僕らに教えてくれる。「常に国民の幸福を思われている天皇」の御心を感得し、それに応えようと努力し

ていく中で、おのずから生き甲斐を見出し出していった祖先の姿がありありと思ひ起こされた。天皇の御心を思えばそのまま歴史の流れに出会うことができる。日本の歴史、伝統は、僕らにとつてかけがえのないものであるということを中心にしっかり留めておきたい。

慰霊祭の折りに

けふここに集ひ来ませる日の本のみ霊よ永遠に安らげくませ

相手の真心をつかむのはむずかしい

(慶応義塾大学 商 一年 小竹正記)

私はこの合宿に参加するまでは「理論」で武装しただけの人間であった。その為「討論」というものは相手を理論で論駁しあうものだと思っていた。だから合宿の前半にはどうしても皆の言っていることを素直に聞くという態度にはなれなかった。しかし、戸田先生が示された三島由紀夫の文「肉を裂いて骨を見るような態度はやめて素直に考えていこう」の「素直に考える」ということを考えていくうち、僕の考えていた討論というものが「理論」のぶっつけあいだけのものであって、何ら「真心」のふれあいになっていなかったということを知った。と同時に素直に相手の真心をつかむということとがどんなにむずかしいことであるかがこの合宿の討論で身にしみて感じられた。小田村先生や倉前先生は本当の自分の姿を人前でさらけ出すことが真の勇氣であり、それが今後最

も大切なことだとおっしゃった。自分を自分でないものに装いつけてきた私が恥かしくてならなかった。

あるがままを見、心に刻みたい

(福岡大学 法 四年 古賀 勉)

講義において討論において実に多くのことが論ぜられましたが、その底を流れるものはいずれも共通していると強く感ずるのです。その共通したものは、人間が生きて行く時に、また物事に対処する時に「あるがままを見、あるがままを心に刻もう」という態度、精神です。これは人間が生きて行く時の人生態度の中で考えねばならぬ重要なものだと感ずるようになりました。僕らの祖先はこのような気持で生活し、その心を受け継いで日本人の心の伝統として守ってきたのだらうと思うのです。日本を支えてきた精神を僕は受け継ぎそれを後世に伝えて行くということこそ僕らの使命であると強く感ずるのです。日本の歴史の中に培われてきた精神は非常に美しく力強いものであり、ぜひ学ばねばならないのだと感ずるのです。

真にきたえられた

(玉川大学 教 一年 小池 晃)

この合宿で、今までに体験したことのない先生方の熱のこもった講義を聞き、班別で真剣に討論したことは本当に楽し

かった。

台風のために一日間短縮され、相当のハードスケジュールで眠いのをがまんしながら過ごしたこの合宿生活を経験し、真に自分がきたえられたような気がする。

人間は美しいものだ

(九州大学 工 一年 川井泰彦)

自然に生きよう、何事にも論理をつけたがるような生活はやめようと強く感じています。僕が実感として感じるもの、そうせずにはいられない心をもっと大事にしなければいけないことがわかり、勇気づけられました。今後人とつき合っていく時、「信じる」ということを心を開くことによって実現していきたいと思います。そのことが僕自身の人生を発展させていく道なのだ、そしてそのように努力することが自然の姿であると思います。人間は美しいのだと確信しました。

国を思う心が実感できた

(鹿児島大学 理 一年 梯 祥郎)

第二日目の朝の国旗掲揚で、昇りゆく日の丸を আগে見た時、みんな一つだと思った。つまらぬ反感も自我も消えていくように美しく映る日の丸であった。

この合宿では国を思う心が実感できた。国を思う心で自分は何をやったらいいいのか。小柳先生の講義に出てきた「百姓

カメラ・レポート9



レクレーションとして付近の高原へハイキング昼食のにぎり飯が格別うまく感じられた。

は百姓より起すべし」という精神に自分もたねばならない。自然科学をやるうと思つている自分と国を思う心をどう結びつけたらいいのか今だにわからない。途方もなく難しい課題に思えるが、今はその心を暖めておこうと思う。

観念論はやめよう

(青山学院大学 経 三年 石橋守雄)

この短い期間でありながら、大変なものに接したものと驚きを感じています。その中で特に決意している事は観念論はやめようということです。目前のやむにやまれぬという実感から決意へ、ということが最も大切なことだと思ひました。私は今まで客観的に自分を見つめ、そこから出発するのが本当であると確信しつつもいつも何かむなしいらだちを感じていました。今は心がカラリと晴れあがった気がします。

又、班別討論において素直な心で話し合うということがいかに難しいものであるか、自分が素直であると思つていてもそれでもまだ自分をさらけ出し、相手のことばを受けとめ得なかつたことが惜しまれます。このような状態に自然に引っぱられるその雰囲気が決して作務的なものでないことにこの合宿のすばらしさを感じました。

言葉の重さを感じた

(法政大学 経 三年 伊藤 祐)

卒直に言つて自分が心を開いて話さなければいくら雄弁に話しても友達のことを動かすことが出来ないと思ひました。自分は班長だから班員を何とか話させようとか、なごませようとあせつてばかりいました。そんな思ひ上がりの気持を恥かしく思つています。班員の人は言葉足りない僕の話でも真剣に聞いてくれました。とてもありがたいと思ひました。今回は特に言葉というものの重さを感じました。「言葉は心」といわれていることをこれから勉強したいと思つております。「国を思ふ」とか「日本を語る」ことは自分の心を見つめない限りひとことも触れる資格がないと思ひました。より自分を見つめた人、より自分を知っている人が国のために最も大切な役割を果しているのだと思ひます。

君こそが心を開いて語れよとの師の御言葉はきびしかりけり

第十四班—男子学生—

己の身より見を起すべし

(早稲田大学 政経 一年 藤 俊輔)

三日目の班別討論で、班付の三宅先生から「君の話は私の心をちつとも打たない」と言われ、愕然とした。大学に入り、信和会等で心を素直に表わそうと努力してきたつもりであったが、僕の甘い考え方が打ち砕かれた。小柳先生の講義の中にあつた、松陰先生の「己の身より見を起すべし」と

という言葉が、その時まるで自分自身に言われているような気がしてきた。自分では国を憂えていると思っていたし、人の付き合いには真心が必要だという事も知っているつもりであった。しかし、僕はそれを頭の中だけで考えているにすぎなかった。自分の生活態度に根ざさない言葉がいかに空しいかという事を痛感した。

小田村先生の御講義は、歴代天皇の真心を先生御自身の真心で伝えようとなさったのだと思います。先生の言葉の一つ一つが僕の心を強く打った。天皇の真心、人の真心という、今まで頭の中でしかとらえ得なかったものを、幾分かでも、自分の心でとらえることができたような気がする。この合宿に参加して本当に良かったと思っている。大学に帰り、ここで体得したことを、真心をもって伝え、皆と接してゆきたいと思う。

真心をこめて話せる先生の御言葉きけば心打たるる

和歌創作のよろこびを感じた

(関西学院大学 経 二年 福田 豊)

自分の経験に基づいて、自分の思想を作り出していかなくてはならない、という班長や先生方のお話をお聞きして、その通りだとうなずかずにはおれない気持ちになりました。これまで禅の本で体験が大事である、体得することが大事であるということを読み、わかったつもりでいましたが、それは単

に頭の中で考えただけのものにすぎなかったことが痛感されます。この合宿でこうした思想の根本を自覚したことは大きな収穫だったと思っています。

また、和歌を創作することは初めての経験でしたので、不安でしたが、それだけに出来上ったときの喜びもひとしおでした。私は二首作りましたが、一首はなかなか出来ず苦労し、もう一首は思ったままを詠んだらすーと出来ました。そしてその二首を比べてみると、自然に出来た歌の方が良い歌だと思いました。歌とは自分の心から湧き出てくるような気持ちをそのまま言葉にしたものでないのだめだなとつくづく思いました。

対話の中にこそ真の学問がある

(明星大学 四年 丹沢文夫)

私はこの合宿で、学問は頭の中で観念的に考えたり、単なる知識の寄せ集めにあるのではなく、生きた人と人との対話の中に真の学問があるのだということを知りました。貴重な体験や、心の底からの思いを熱心に語ってくれた先輩、先生そして友達をみて、こうした人と人とが心で結ばれた世界こそ、皆が求めている社会なのだと思います。私は勇氣と自信をもって自分の出来得るかぎりの力を尽して日本のためになるよう生きてゆきたいと思えます。

真実を見つめる態度に感動した

(九州大学 工 一年 松嶋貴志)

大学に於ける学生運動や、クラス討論に僕はどうもスッキリしないものを感じていました。それは、そうした討論に本当に正しいことを見つめようとする態度が欠けているからでした。この合宿では正しいことを正しいと考え、見つめる態度があるのを見出し非常に感激致しました。講師の方々の真実を見つめる態度およびいままでの研究によるところの確信をもった、堂々とした態度に素晴らしい感動を覚えた。自分の知識不足や、体験不足によって、その講義を十分に消化しきれなかったことが残念である。

ほんたうに正しきことを正しいと見つめる態度もちて進まむ

天皇に対する疑問が取り払われた

(九州大学 工 三年 久々宮 章)

天皇に関する疑問が御講義をお聞きしてすっかり取り払われたように思います。先生方の心のこもった御講義に、理屈ぬきに引き込まれてゆく自分を感じました。有難い気持で一
杯です。

国を思うということは頭の中でいくら考えてもわからないものだと思います。国のために身を挺してこられた先人達の生き方に触れて始めて心を動かされることを経験致しまし

た。しかし、その気持を友に伝えようとして、なかなか相手がわかってくれないと相手のせいにしてしまいがちでした。わかってほしいという気持が先走って、機械的に話していたせいだと思います。松陰がやむにやまれぬ思いで精一杯生きていかれたことを思うとき、自分がまだまだ甘いなど思いません。

物事を突っこんで深く考えたい

(亜細亜大学 経 一年 村上 勤)

大変有意義な生活であった。自分自身の考えの狭さ、謙虚さの欠乏を感じた。班別討論で、あなたはどうか考えますかと問われて、スラスラと自分の考えが出てこなかった。普段、世の中のできごとに対して、ただこんなことがあった、あれからにはもう少し物事を突っこんで深く考えてゆくようにしたい。天皇の御気持も、うまく言葉には表わせないが、諸先生方の講演や、短歌創作によってわかったような気がする。これからも暇をみつけて自分で短歌を創作してゆきたい。また自分で思ったり感じたりしたことは友にすべてを言い尽すよう努力し、また友の考えもよく聞き入れて心にわかまりの残らないような毎日を送りたい。常に真心をもって。

友どちの真心こもる言の葉にわが胸内のあつくなりゆく

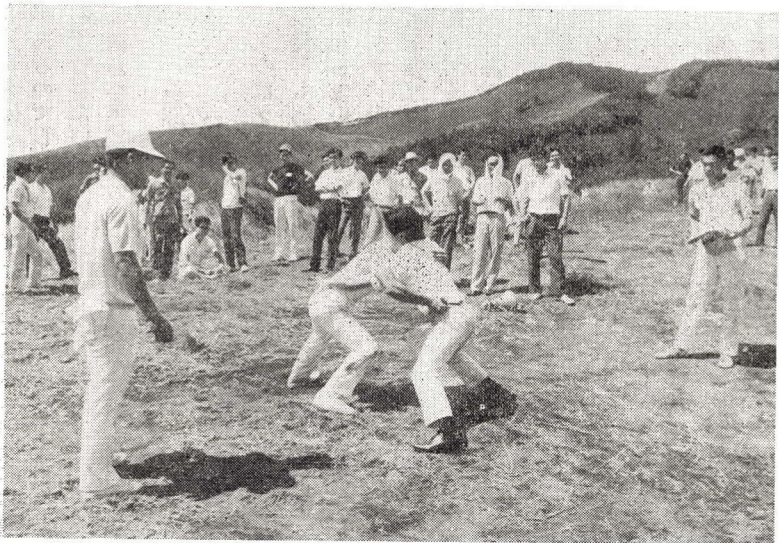
多くの学生に語りかけねばならぬ

(大分大学 経 三年 野田清文)

私は合宿教室に参加して今回で三回目になります。回を重ねるたびにこの合宿の独特な良さが解るようになってきたのですが、同時に少々もの足りなさを感じることも否定できません。というのは、毎年多勢の学生が集まりますが、例えばせっかく天皇の素晴らしさを知り、それを通じて日本の文化、歴史の偉大さが解っても、この合宿を離れば、その感情が薄らいでしまったり、日常生活においてここで得たものを生かしていない人がかなりいるのではないのでしょうか。

学生運動が影をひそめてしまった今日、もうこれで学園は良くなったのだと思っている人が多い。学園は少しも良くないはず、むしろ悪い状態へと進んでいるのではないだろうか。だから、私達は合宿教室で学んだ事を土台として、少しでも多くの学生に語りかけ、理解してもらおうようにしなければならぬと思う。そして来年の合宿には出来るだけ多くの友達を連れてくるのが大切な事だと思います。

昨年の合宿で知りし友どちと二たびあひてかたたき合ふ



カメラ・レポート10

元気のよい若者による勝ち抜き相撲が始まった。

第十五班 男子学生

天皇というものが身近に感じられる

(東京大学 法 四年 伊藤哲郎)

今回で四回目の参加でした。先生方の御講義を今までとは異なった新たな感激で拜聴できたことは大変有難いことだと思いました。中でも国武先生、小柳先生の御講義でお聞きした「歴史は作るうとしてできるものではない。やむにやまれぬ気持が人を動かしそれが歴史を動かす大きな原動力になったのだ。」という言葉は心に焼きついて忘れることができません。又、小田村先生のお話で天皇というものが今まで以上に身近に感じられるようになったことは、大変有難いことだと思えます。合宿教室を築きあげていかれた先輩方、先生方の積み重ねられた御努力の尊さを感じます。

素直に自分の身に入っってこなかった

(鹿児島大学 農 二年 檜木 直)

日本の歴史を通じて日本の命を求めてゆくのは非常に地についでいて常識的ですがそのみに安住しているようにも受けとれました。だからこの合宿で言われたことがどうも素直に自分の身には入っってこなかったように思います。しかし日本の超一流の先生方、それに幾多の社会人が精魂を打ち込ん

で居られるものですから、今のままの自分には誤ったところがあるのでしょう。教えを頂いたことを土台にして研鑽を積んで行きたいと思えます。

霧島に集ひ学べる友どちの心はねがふ国のさかえを

祖父の言葉を思い出した

(長崎大学 経 一年 富永泰介)

人の言うことを真剣に聞かねばならないと感じた。又自分の発言も内容を適確に言い切るだけのものをもっていなければならぬ。また使う言葉にも注意しなければならぬと思えます。祖父が酒飲んだ時に色々言ってくれた事があ、あんな事だったんだなあとか、誠意で接すれば必ず誠意でかえってくると言ってくれた事がやっぱり本当だったんだとしみじみ思えてくる。他の合宿に行っってすぐさまかけつけたので疲労が残っって講義を聴くのがつらかった。眠くて聞きのがしたのが残念です。

祖国に誇りをもつことを

(拓殖大学 政経 二年 妹尾恭治)

国民ひとりひとりが多種多様のイデオロギーを超越して互いに国の象徴である天皇を信じ合ひ、独立国日本が我々の祖国であることに誇りをもつということがこれからの国民に与えられた最善の義務だと思えます。

もっと多くの人に来てもらいたかった

(岡山大学 医 四年 納所 実)

毎日の講義を聞くと常日頃自分の生活の全てが反省され、改めていかなければならないと痛感した。去年は岡山から数人で来たけれど今年は二人だけ参加した。もっと多くの人に来てもらえたらと残念でならない。一緒に来た友がどんな風に感じてくれたかはわからぬが少しでも「感じて」もらえていたらと思う。

川尻君、殆ど話をする暇も無かったけど君の目を見れば全てを話してもらったのと同じです。君の目の輝きにはいつも頭の下る思いです。

長内先生からの歌を聞きて

北の地に居らるる師からの和歌教首を聞けば心に伝はりにける

「道」を見出し得た

(亜細亜大学 商 四年 成田 諭)

私は初めて合宿に参加したわけですが特に強く心に残った事は日本人の精神的退廃が取り沙汰されている今日、かような多くの先生を始め学生・社会人の皆さんがやむにやまれぬ憂国への熱情を持って真剣に話すのを聞き、心の安らぎを覚えると同時に、今迄悩み迷っていた自分が何らかの「道」を見出し得た気がして非常にうれしく思います。又歴代の天皇

の御製を拝して私心なき無私の御心に触れた時、日本人として更に一層の喜びを感じました。

第十六班—男子学生—

万葉の心を知りたい

(長崎大学 工 二年 西田伸二)

確かに他への批判ばかりに目が向いていると、己のいたるなさを忘れていることがあることを気づかせていただいた。人と人との和の心が大切であることを日常の活動の中で忘れそうになっている自分が、ふと恐ろしくなる。「身を修めよ」という言葉は、常に言いきかせているつもりなのだが、まだまだという感じがする。謙虚な姿勢は決して、積極的行動・創造的行動を阻害するものでないとわかった。自分にとって、現在の運動(学協運動)は一生をかけた闘いであると思っているし、その発展に全てをかけるつもりである。己が学協であり、己が日本である。その信念をもって、一日一日生きていきたい。万葉の心は、人の心の微妙なところを、みごと雄大に朗らかに歌ってあるところにあるという。小生もそのようになるため修養します。

涙うかべとつとつと語る友どちの姿に感ず人のまことを

自分の中に日本民族の伝統が生きている

(国際基督教大学 教養 三年 大野幸一)

天皇についての小田村先生の御講義をお聞きして、今まで、ぼんやりと考えていた事を、はっきりとした形で、言葉に直して頂いた様な気がして嬉しく感じました。また自分自身の心の中にも、無意識のうちに、日本民族の伝統が生きている事がわかり、大いに励まされました。しかし、一方この合宿で「素直になって、天皇を思う事がまず第一歩なんだ」と教えられました。が「自分」を捨て切れない僕にとっては、素直になるには、「自分」を強くしなければならぬし、また強い「自分」なしには、日本民族の真の伝統を継承し、子孫に伝えていく事はできないと僕は思うのです。この四日間の合宿で得た日常生活で得られない体験を大事にしていきたいと思います。

霧島台への遠足を思ひ出して

よき道を皆連なりて行くよりも一人で野道を歩きたく思ふ

自分を正確にみつめていなかった

(早稲田大学 商 三年 西山芳克)

この合宿には二回参加しましたが、今年の合宿ほど今までの自分に誠実さがなかったということをひしひしと感じた事はありませぬ。先生方によって御講義された日本の文化ある

いは天皇をどう考えるのかという問題は、どれを聴いても今の自分には背筋がふるえるような思いで夢中になって聴かせていただきました。

班別討論、和歌創作などで自分の心で感じたと思って口に出した言葉がまだまだ自分の心を正確にみつめていない点を指摘され自分の心のいたらなさを感じました。しかし、そういう自分なのに、真剣になって一緒に考えてくれる友を得て大変うれしく感謝しています。これからは自分の心に誠実に、そして素直になるよう心掛け新学期に備えたいと思います。

合宿のこのすばらしき今すぐに友に伝へむ何としても

素直に事に接したい

(鹿児島大学 教 一年 小原芳久)

合宿に参加するのに初めは積極的でなかったが、参加してみて今の世の中に欠けている何かを考えようとする合宿であることを感じました。それが何であるか今の自分にはうまく言えませんが、少なくとも合宿に参加している皆がこれほど真剣にしかも真心をもって取組んでいる合宿は他にないのではないかと思う。この合宿で感じたことは『素直』に何事にも接したいということ。『素直』に接すれば何事にも本当の姿があらわれるような気がするからです。

思ふこと素直にいへばおのずから和歌うたへるを教へられけり

自分の気持を語りきれなかった

(亜細亜大学 法 二年 村田隆和)

私はこの合宿で人と人との心が触れ合うことのできるような付き合い方というものを学びとろうとして参加致しました。初めの二日間はどうもそれができませんでした。三日目の小田村先生の御講義を聞いてなぜできないか解ったような気がしました。それは今考えると、自分の生活態度に思い上がりがあり、生活信念のあまさがあつたからだと思いました。そしてその思い上がり、あまさを厳しく指摘してくれた班の人々に感謝を持つこともできませんでした。

この合宿では一つ一つの言葉を非常に大切にし、その言葉の中に正確な自分の思想、考え方を表現するように努力させられてきました。語れば語るほど自分の気持とかけ離れるような気がして多くを語れませんでした。それはそれでよかったと思っております。

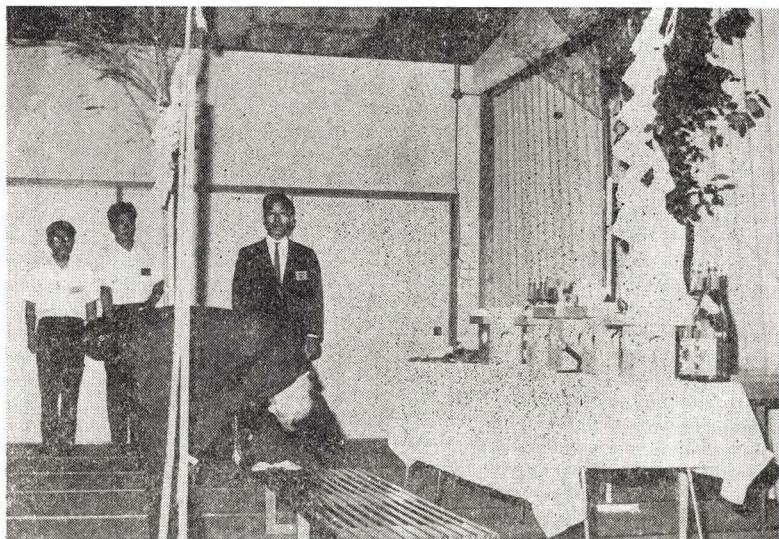
我が甘さ指摘してくれし友人のその友情に頭下れり
そこまでもよくぞ言ひくれしと思ひけりただありがたき思ひのみして

傲慢であった

(熊本大学 法文 三年 福永好紀)

班長をさせてもらい『よしやるぞ』という気持が事前合宿

カメラ・レポート11



大広間に設けられた祭壇を前に慰霊祭は神ながらの手ぶりのもとに厳修された。

の時からしだいに強まってきましたが、かえって、それにと
らわれすぎ、自分の心を班の人たちにありのままにぶつける
ことができなかったように思います。班付の内田さんから、
僕の心がいじけていると言われた時は、それがどうしても納
得できませんでした。しかし、全体意見発表の時、伊藤君が
涙を流して、素直に、「班の人にすまなかった、有難う」と話
してくれ、ようやく、内田さんが指摘されたことがわかった
ような気がしました。今まで自分はやってきたのだという、
傲慢な気持があったのだと反省しました。今年の合宿で先生
方のお話を聞いたり、御製をみんなと詠んでいる時、無性に
胸にこみあげてくるものがあり、どうすることもできなかった。
その気持と内田さんに指摘されたことを大切にして、も
う一度最初からやりなおそうと思っています。

先輩の指摘したまひしことのは強くにわかに胸にせまりく

心から湧き起る気持を持続させたい

(玉川大学 農 三年 川尻博宣)

この合宿において、本物の自分をみつめさせられました。
納所さんとしっかと手を結びながら、言葉にはでない、本当
にすばらしい心の結びつきを感じました。私も学校に帰りま
したら、表面的なものでなく、真に心からわきおこる気持を
もちつづけ、行動していきたいと思います。全体意見発表の
際、自然と涙が流れてきました。国のいのちが生きていると

いうことを、おぼろげながらわかってくるからです。私もこ
の気持をもち、雄々しく、生きたいと思えます。

天皇の国民思ふ御心をとどめをかましわが胸のうち

第十七班—男子学生—

日本の文化の流れの中に自分もいる

(早稲田大学 文 四年 広瀬清治)

天皇の問題は、ずっと考へ続けてゆかねばならない問題と
して、ぼくの心の裡で、大きな比重を占めて来てゐるのを感じ
てゐます。幾多の祖先の積み重ねられた足跡のうちに、日
本人のあらゆる人々の生き方があり、日本の文化があるのだ
と思はれます。さういった流れの中に、自分も又連なつてゐ
るのであり、その無限の連りの裡に、自分の有限な生命を連
ねてゆかうとする努力をしてゆかねばならぬやうに思はれま
す。さういふ努力の中で、天皇といふ問題を考え続けていく
ことが、とつても大切なことのやうに思へます。

もだしつつ涙ながせる友どちのすがたにじつとまなこをそそぐ

自分の心を開いた生き方をしたい

(亜細亜大学 商 三年 駒ヶ嶺純一)

自分の友達の何人かはこの合宿を右翼の思想教育の場であ
ると言っていたが、自分にはそうだとは思えなかった。

講義を聞いたあとの班別討論でみんな良く講義の要点をつかんで話しているのを聞いてみると、焦点がぼけたような聞き方しかしていない自分は、その討論の中に入り込んでいけなかった。来年も合宿に是非参加したいが、その時はもう少し討論の中に入り込んで自分の考えを言いたいと思う。さらに、自分の心を開いて、今後、自分の生き方をしていきたいと思う。

式おはり帰へりのしたくする友と来年もまた会ひたしと思ふ

より人間的に「青春」を生きたい

(東京外語大学 四年 古屋 明)

「青年は非人間的であることによって人間となる。」私がかつてこの谷川俊太郎の言葉を「青年」というものの資質を表わす端的な表現だと後生大事に思い続けてきた。そこには青年の始原的な、理念的映像が投射されていると思つて来たのである。そう思い続けることによって私は一切の人間的目的を嫌い続けてきたのである。今思えば、私は何と「青年」という觀念に対して一面的理解しか持ち得なかつたことか。私はどうやら青春を抽象的にしか理解していなかつたようである。今、より人間的に「青春」を生きようと思う。

なさけある友らに会ひし霧島の雲は白くてかがやきぬたり

大変神経を使った

(皇学館大学 国史 一年 菅原高穂)

他の大学の学生と接するのも良い事ではないかと思ひ合宿参加の続きをとりましたが、自分の勉強不足や、見知らぬ人と短期間ではあるが生活する事に不安をおぼえ、来るまで迷っていました。しかし、四日間、こうして生活してみると大変神経を使う事は確かだが、夏休みの良い思い出となりました。来年は僕の大学からも十人位連れて来たいと思ひます。そして、今年は初めてだったので自分の意見はあまり積極的に発表しなかつたが来年は、どんどん発表したいと思つております。

友らとの良き思ひ出を抱きつつ再び会ふを我れは祈らん

天皇の御心を感じながら生きたい

(九州大学 工 三年 青山 昭)

若人の熱気の中ですごした充実感、他になかなか味わえないものであった。しかし、自分の中にも意気どみすぎるため、わからせようとして、我を通し、気負いすぎるきらいがある。天皇の問題にしても、このようにつきつめて考えていくことに本当の意味があるのだろうか。我々は静かに、天皇の御心を感じながら生きていけばいいのではないのか。

大君の御歌詠まるる先達の声は澄みぬて我が身ふるはず

すなおになつてゆく自分に驚いた

(熊本工業大学 建 二年 山田範人)

一年間の精神活動の怠惰のために、すなおな心を失いかけていたせいか、合宿最初の日には自分の中にどうしても、他を受け入れない気持があつたような気がします。友と語り先生方の御講義をお聞きしてだんだんとすなおになつてゆく自分に驚くとともに、今までの生活のどこかがまちがつていたのだと反省いたしました。この謙虚な気持を長く保ちつづけたと思います。

すなほなる言の葉つかひてわがこころ心ゆくまで歌ひまほしき
すなほなるおさなごの心をわすれじと胸にとどめて霧島山を降りぬ

合宿の感激を生活に生かし続けたい

(玉川大学 文 三年 石黒栄信)

貴重な合宿体験を昨年に続き二回も与えられて、これからどのように生活して行けばよいかということを考えるのに頭が一杯です。この合宿で聞かせていただいた、とてつもなく大切な先生方のお話し、そして班別討論でそのことについてみんなで考え、話し合った一言一句、そして、その時みんなが話している時のあの白熱した心、そういったものをなんとか自分の一日一日の生活に生かし、来年までなんとか忘れず

に留めておきたい。そして、一人でも多くの人々に、この合宿が本当に我々日本人にとって貴重なものであることを理解してもらい、日本人全体にここで話されていることが早く知れたらなんとすばらしいことかと感じられます。

合宿を契機に自分を作り上げたい

(福岡教育大学 一年 木原健夫)

この合宿に参加するまでは、大学教授とか、評論家とかの講演をその場で聞いた事が無かつたけど、今回、それを経験し、もつと純粋な気持で物事を考えなければならぬということを感じました。又、我々学生は、もつと多くの本を読みもつと多くの人々と話し合い、人間を深めて行かなければならないことを知った。ただその場合注意することは、考え方がかたよらないようにしなければならぬことだと思えます。今回の合宿を契機として、今から自分を作り上げて行きたいと思えます。

壇に立ち語る友どちみつめれば涙ぐみきてじつと聞きいる

“天皇”というイメージが変わった

(鹿児島大学 法 三年 山本俊一)

去年に続いて二回目の参加であるが、今年は、最初の日より、先生方の感動を私自身、感じ得られ、この事だけでも嬉しい。小田村先生の御講義で、“天皇”に対して今まででもつ

ていたイメージ、とらえ方が変化した様に思う。桃園天皇の御歌を見た時は驚いた。

九日の慰霊祭が、部屋の中であったのは何かしっくりしなかった。でも、英霊をお慰めすることはできたと思った。それから、八名の班員が、私を見守ってくれた事をありがたく思う。楽しくすごせた。みんなの暖かい気持が、感じられ、素晴らしい班であった。

我友の語る姿は国思ふ心あふれていとど雄々しき

第十八班 男子学生

人の心を大事にしたい

(九州大学 工 一年 栗原俊男)

初めのうちはどうも班の中に溶けこめなくて班別討論の時もあまり思ったことを言えなかった。しかし、時がたつにつれてお互いの気持が通いあってきて、みんなの心がまとまってきたような気がした。今の世は、何でも理論だけで割りきろうとするのが通例であるが、本当に人の心というもの的大事にしたいと思うようになった。もう別れるというのは惜しい気がする。

今までの信念を考えなおしたい

(東京大学 教養学部 一年 滝澤勝美)



カメラ・レポート12

“最後の夜の集い(コンパ)” 合宿最終日を明日にして若人のエネルギーがむんむんする会場。

初めての参加で少し驚きました。今まで僕が大事にしてきた「物事を客観的に考える」という信念がぐらついてきました。小田村先生の講義に大変心を動かされました。しかし、先生の意見をそのまま受け入れることは今の僕にはできません。自分が今まで考えてきた天皇や日本は、先生の御意見と反対であり、その考えが急にくずれてしまうことはつらいのです。自分が本当に信じてきたことが完全にまちがいであったとは言いきれないのです。しかしながら、この合宿は僕にとってもう一度考えなおしてみようという一つのきっかけを作ってくれたと思います。

物事にこだわる心があった

(福岡教育大学 教 三年 小林 至)

合宿教室に参加して、自分自身にこだわる心、素直になれない心に気づき心にひっかかってなりませんでした。それは関先生から私の体操指導に対する姿勢の足りない点を親切に忠告していただいたのに、その御言葉にこだわって素直になることが出来なかったのです。ともすれば自分を弁解し、理屈を言う心がつきまとうのです。戸田先生は、自分自身にこだわる心を打ち払ってこそ本当の生き甲斐があると述べられました。僕は少しでも物事にこだわる心、素直になれない心をなおしていきたいと思いました。

実感を実行に移していきたい

(皇学館大学 文 四年 白江恒夫)

川井先生が「みずみずしい情意から出発しよう」と呼びかけられた後で、「実感↓決意↓方法の追求↓実行」と、事を進める場合の順序を教えて下さいました。私は今迄「実感↓方法の追求↓決意↓実行」というような順序をとっていたと思います。それ故、実感しても実行に移すまで相当の時間がかかっていたし、あるいは又、折角実感しても実行せずに終わってしまう事がしばしばありました。方法の追求をしている内に感動が薄れていくことがしばしばあったのです。

先生方の講義をお聞きしながら記録したノートを何度も読み返し、追体験したいと思っています。

全体意見発表の折

つぎつぎと登壇したる友どち思ひのたけを述べらるるなり

閉じた心が開きつつある

(国際キリスト教大学 教 三年 工藤高史)

幾分曖昧な気持での合宿参加であった。しかし、合宿が終わった今は参加してよかったと思っている。真剣な姿勢で参加された諸兄に心打たれたのかもしれない。自分の閉じていた心が開きつつあるような、そんな気持で帰れそうである。

黒上先生の御本に大切なものを発見した

(成城大学 文芸 二年 坂田道一)

二度目の合宿に参加して、友達に再び会えた喜びと、一つ大いなる発見をしたことを感じました。それは、僕は国文科を専攻するにあたって次の事を理由としました。一つはまず日本の事を知らない自分を反省して、それから今の西洋文明が行き詰まりにきており東洋の文化を求めていることがヒッピース等の考えにも現われているのを見て、日本を知らない者が東洋の文化を紹介できるわけがない、だからまず日本を見つめ、そしてできるかぎり紹介しようと思ったからです。ところが、この合宿で黒上先生の本を読みますと東西文化融合の事がでてきます。発想が同じに思えて大切なものを発見したと感じてとてもうれしい思いでした。

天皇を政治的見地から見てきたが……

(東北大学 農 二年 後藤和文)

各方面の一流の先生方の講義を直接聞くことができましたことは本当にありがたく思っています。特に僕の場合、今まで天皇というものについて政治的な見地ばかりとらえてきたことの誤ちを天皇の御歌を詠んだ時感じました。今後はもっと広い見地から天皇について考えていこうと思っています。

霧島で親しくなりし友達と別れるつらさ身にしみにけり

真心をもって生きたい

(鹿児島大学 法文 一年 野間口俊行)

今思うに天皇の大御心を胸に感じない人は全ての偉人といわれる人の言葉もわからず尊敬することができないであろうと思います。自分自身も真心を常にもって今からの生活を送っていきたいです。

「君が代」を大声出して歌ふれば身のひきしまる心地覚ゆる

第十九班 男子学生

松陰の言葉に心うたれた

(東京外国語大学 四年 安納俊紘)

『事を論ずるにはまず己れより見を起すべし』の言葉が心で脈打っています。美辞麗句を用いず、大言壮語せず、先ず己の心を謙虚に見つめ、身のまわりのことから出発する。自分の弱さからくる環境への責任転嫁はやめるべし。行動を正当化する巧みな言論は責任回避である。日々全力を尽せないものがどうしてこの長い人生を強く生きてゆけようか。友人親に対して心を配れないものがなぜ国のために命を捧げることができようか。精一杯努力すること、これしかない。

日本の本の絶ゆることなき伝統を心つくして守りてゆかむ

天皇の御心を知り得た

(九州大学 工 二年 天本和馬)

合宿の前日、不注意によりおもわぬケガをしてしまい先生方や班の方々など多くの人に迷惑をかけてしまい大変申し訳なく思います。また私の身を本心に心配して下さった多くの方々の気持を大変ありがたく思いました。

合宿そのものについては何も思い残すことなく充実した気持で過ごせたと思っています。小田村先生の御講義で歴代天皇の御歌の紹介がありました。歴代の天皇がいかに国民のことを思っておられたかを知って涙が出てきました。徳川幕府が徳川家という「家」のみを第一に考えていたとき、天皇は経済的に苦しいにもかかわらず国民のことを思っておられた。このような天皇の御心を大事にしていくならば日本という国は決して滅びることはないし素晴らしい国になると思います。

慰霊祭にて

国のためうせにし人を偲びつつ祭壇に向ひをろがみまつる

「知識」のアカを洗い落としたい

(慶応大学 法 三年 栗原博行)

この合宿で自分のもっているもの、考えているものを班別討論でぶつけてみました。たまたま来て下さった戸田先生

や同じ班の人達の指摘により、自分は理屈を述べている事がわかりました。今の世の風潮には何でも理屈をつけなければ信用しないということがある。しかし、そんなものより、こうあるものはこうだという正しい把握が大切だと思えました。理屈で説明できる場合もあるが、できない時もあるという事を知るべきです。

ただこの合宿で残念に思ったことは、もう少し班別討論の時間をさいていただきたかったことと、そこで人生を自分はどうに生きるべきかという事をもっと直接に討論したかった。又私はもう少しこの合宿で私が身につけている「知識」のアカを洗い落したかった。

全体意見発表を聞いて

演壇で涙ながしてあやまれる友みつめれば胸あつくなりぬ

学校で聞けないことを聞いた

(九州大学 工 一年 大野英則)

先生方からは学校では聞くことのできないような話をしていただきましたし、又、数人ではありましたが班の中で真剣に話せたことはよかったです。学校の勉強以外に色々学習しなくてはならない事も感じました。今後、実行できるできないは別問題として頑張っていきたいと今は考えております。

霧島山上ホテルに着くまで

土砂くずれ道ふさがりて通れずに引き返へすことたびかさなりぬ
霧島のホテルにや々と着きし時友と二人で喜びあひぬ

新しい世界を見た

(鹿児島大学 工 二年 矢野忠行)

先生方の御講義には感銘させられました。木内先生、村松先生あの痛快な国際状況分析のお話しには驚きとともに力強い支えを得た気がしました。と同時に私に「もっと勉強せよ、君はまだまだほんの子供にすぎない」とおっしゃっておられるような気もしました。

戸田先生、小田村先生その他の先生方の御講義も難しくなかなか理解できなかった話しもありましたが、興味深く、まったく新しい世界を見ることができたような感じがして嬉しく思いました。これから、もっともっと学問を追求し、そしてしかるべく行動していきたいと決意しています。

心の触れ合いこそ基本である

(日本大学 文理 三年 熊倉幸一)

学園生活において、ややもすると見失いがちな人と人との「心の触れ合い」といったものが昨年と同様、いやそれ以上に、大切なものであるとの思いが胸中にわきあがってきました。現在の日本において欠けている「心の触れあい」は人と人とを結びつける基本であると再認識させられた様な気が致



カメラ・レポート13

珍芸・奇芸の続出によって、緊張感のとかれた和やかな一時
“最後の夜の集い”から

します。

私はこの合宿で感激、感動したことを深く心に受けとめ、今後の我々のサークル活動、学園正常化のため、ひいては祖国再建のためのエネルギー源となる様に頑張る所存です。

熱意こめ語り尽せし友ども今は静かに山を下りぬ

第二十班—男子学生—

自分の心に直接伝わってきた

(九州大学 法 一年 十時一郎)

初めてこの合宿に参加いたしました。今までの生活では友達と本当に打ちとけて話すという経験は少なく、特に夜遅くまで語るのは初めてでした。そのためか心を開いて語るということは難しく、自分の殻を破れなかったのが残念です。ですから、このまま山を降りるのは何か心残りで、もっと話し合いたい気がいたします。またこの合宿に来る前は、先生方の御講義をお聞きするのは、本を読むのと大した違いはないと思っておりました。しかし、先生方を実際に目前に拝見いたしますと、そのお言葉が直接に自分の心に伝わってくるようで、これこそ生きた御講義だと思いました。一時間半から二時間もかかる長いお話でしたが、本当に短く感じ、もっともってお話をうかがいたくてたまりませんでした。

合宿に来ざりし友に聴かせたしこの素晴しき御講義のあまたを

友の言葉に考えさせられた

(鹿児島大学 文理 二年 仁多永夫)

立派な先生方の熱心な御講義をお聞きして感動しました。

時の経つを忘れて耳を傾けぬ師の御心のありがたく思へて

昨晚まで御講義を聞いても、これからどう生きてゆくかはつきり決まっていますでしたが、昨晚の夜の集いの後、ふとんをかぶって友達と語り合いました折、私の妥協的な言動に対し、友達が「そのままでもいいのか」と鋭く迫ってきました。そこで私自身踏み止まって考えました。日々事々においてたじろいでしまう原因は何であったのか。そこまで自分の思いが及び、さらに一步、「何事にも自信がないからだ」、「経験の不足で事に柔軟に処し得ないのだ」、そこまで気づきました。

友どちの鋭き問ひの迫りくれば思はず我は考へこむなり

友達にそうしたことを話しますと、真剣に聞いてくれて、さらにもう一步つきつめて考えてみようという気持ちになりました。

友どちの聞き入るまなこ見上ぐればさらにつきつめ語らむとぞ思ふ

語りあう友達の真剣な態度に感動しました。こうした付き合いを合宿外でも実現しようと思います。これからどんな状況の中にあっても、友達と心を通わせ合って、充実した生き

方をしてゆきたく思います。

いかならむ事ありとても友どちと心通はせ励みてゆかむ

現実在即して決断する力をつけたい

(早稲田大学 政経 四年 山口秀範)

思わぬ台風による様々な体験は、貴重なものとして一つ一つ胸に刻み込まれています。僕等が生きていく上で、一歩先にはどんな困難があり、どんな決断を迫られるかわからないうということ、友と一緒に体験でき、本当にありがたく思います。

痛感せざるを得なかったことは、一人の友を前にして、その友に心を聞いてもらうことの難しさ、現実在即して自分の心を働かせることの難しさでした。ある場合はじつと相手の話を聞いていた方が良し、ある場合は間髪を入れず友の姿勢の誤りを指摘せねばならないでしょう。その判断、決断をする力をつけてゆくことが、今からの課題であるとはっきりわかりました。

御講義は未だ混然として整理がつきかねています。一つずつ血肉とすることのできるよう勉強を続けてゆきます。

講義前に懐しき顔見出して思はずそはへかけよりてゆけり

その友は遅れてすまぬとそれのみを頭かきつゝ繰り返したり
雨風の險しき道を乗り継ぎて着けりとぞいふ友の有難きかな

生命の大切さを痛感した

(慶応義塾大学 法 二年 西 博嗣)

東京の毎日曇った空の下から、この霧島の澄みきった高原に来て心も晴れ晴れとしてきました。今まで抱いていた疑問も、多くの先生方の内容深い御講義により、解決できる指針が示されたのでした。それは今の大学教育や社会の中で忘れつつあった「生命の大切さ」でありました。自分を投げすて、あるもののために尽くす、そんな心持であったのです。日本の伝統や文化の中にもその心が通っていたことをはっきりと確信することができました。

鹿屋の特別攻撃隊の話聞きて

栄へよと祖国を思ひ飛び立ちし特攻員の心をぞ偲ぶ

深く勉強してゆきたい

(中央大学 商 二年 森内豊隆)

私は学内の先輩に勧められてこの合宿に初めて参加して非常に良かったと思っています。先ずなんといっても、先生方の熱のこもった講義が素晴しかったと思います。これから学内にもどってからも、同志の人達と一緒にもっと深く勉強してゆきたいと思います。台風の影響で一日少なくなっただけもあって、班の人々と心を割って話す時間が少なく、心と心の強いきずなを結ぶことが充分にはできなかったことは、少

々残念に思いました。

充実した日々を送れた

(熊本商科大学 商 三年 中國俊郎)

ただ、今は友達に感謝するだけです。もし、友達を通してこの合宿を知ることができなかったら、先生方のあのようならばらしい迫力のある御講義は、おそらく、一生聴くことはなかったでしょう。今迄の人生でこれほど充実した日々を送ったことはありませんでした。これを契機に自分の道に自信を持って進み、学んで行きたいと思えます。この合宿で一番印象に残った事は、先生方は、みな、自分の事など忘れ、世の中の為に身を投じておられるということでした。広い視野に立ち正しく率直に生きてゆきます。ほんとうに、ありがとうございます。

思ふ事同じ友とかり合へば時過ぎゆくを忘れてしまひぬ

日本人としての使命感をみつけた

(亜細亜大学 経 一年 相山政利)

小田村先生をはじめ多数の先生方の講義をおききして、自分の天皇に対する認識不足や、日本人として祖国を思う心があまりにも軽薄であったと反省しました。また、日本人としての使命感と生きがいを見つけたような気がします。短歌をつくりながら、自分の心が素直にうたえず、天皇の御歌にふ

れたときにも、御心が解らなかつたのですが、最終日に、「本来、日本人の心は正直である。」というお話を聞きまして、「この世は、ウソのかたまりである。」と想っていた自分が恥しく思いました。

霧島で語りあかせし友どちと別れ行くのは名残り惜しけり

木内先生の雄大な気持に心をうたれた

(東京工業大学 工 二年 井原 透)

台風の去った霧島に登ってくると、道はこわれ、水は流れでて、木はねじり倒されていました。そんな生々しい中でも、もう、蟬は、腹の底をひびかせて鳴いていました。たのもしいではありませんか。木内先生が御話になりました。「ひょっとすると、日本は、ひっくり返ってしまうかもしれない。しかし、それは、それで、僕は、いいと思う。」ということをお聞きして、先生をたのもしく感じました。私は、先生のような大きなもの見方、目にはみえないが雄大なお気持ちにふれて強く心に打たれました。

第二十一班—社会人—

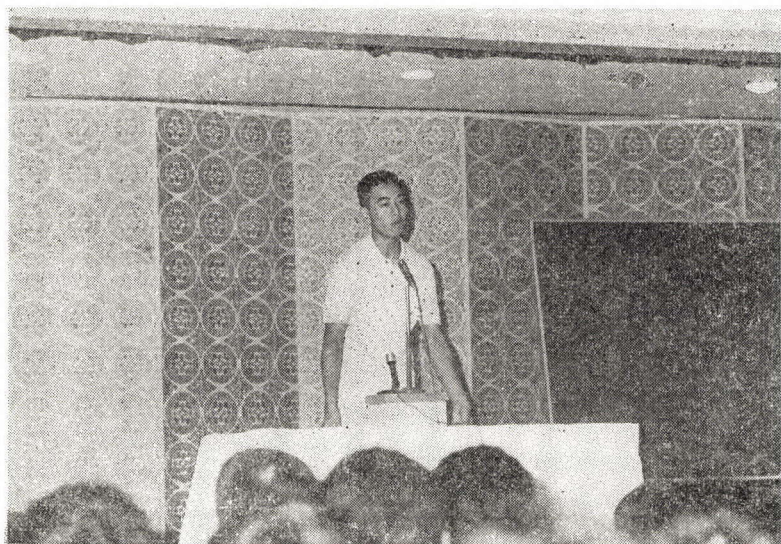
日本人として恥しくない人生を送りたい

(高千穂相互銀行 江藤正俊)

私は会社からの勧めもあり、また自己啓発になると思い、



続々と登壇・さまざま
な所見はいずれも真剣
な合宿生活からにじみでたものであった。



カメラ・レポート14

“全体意見発表” 解散直前に合宿をふりかえて感ずることを
自由に卒直に発言してもらった。

この合宿に参加した訳である。初めての参加であり、この合宿の趣旨も漠然としか知らず、自分自身何の予備知識もなく参加し、この四日間、天皇を中心とした日本国のあり方、また日本経済や日本文化、さらに世界情勢等、ありとあらゆる知識を講演や班別討論の中から学びとった非常に有意義な合宿であったと思う。私としても、この合宿で学び得たことを、今後さらに深く追求し、国民の一人として恥じることをく生きて行きたいと決意を新たにしたい訳である。

自分の思考方法がひっくり返えされた

(鹿児島興業信用組合 西田輝樹)

合宿に参加するまで、日本の伝統とか天皇についてあまり識らなかつた。意識的にさけていた「天皇」についての問題を、この合宿期間中に教わり、いままでの自分達があまりに天皇の一面だけを強調して教えられ、それを信じて来たことに気がついた。古代の天皇から今上天皇に至るまでの御歌を詠み、歴代天皇の御心を教えられて、今までの自分の思考方法というものが根本からひっくり返えされた。そして種々の言動は自主性をもって自ら真剣に考えてからのものでありたいと思う。その時の自分は「おさな心」に出来るだけ近い状態であるように心掛けたい。

天皇の貴き御心初めて識りて歸りて語らむこの胸内を

国を思うことの大切さを痛感した

(宮崎交通轉 船木敏靖)

この合宿参加にあたっては、どちらかというと会社から強制的に参加させられたというのが実情でした。しかしこの合宿全体に流れる信念というものにふれ、いま強く感じていることを記したい。

一、会社生活六年目を迎える私個人が純粹さを失なっていること。

一、心を空しくして物事に対するという態度が欠如していたこと。

一、国を思うということに対し、合宿に参加する迄深く考えが痛感された。

が痛感された。

みたまをばむかへまつりてまなことじ散りにし父をしのびまつりぬ

天皇について虚心に考え直したい

(南日本放送轉 安木憲政)

近ごろ薄れつつある人間社会の心のふれあい、また経済的繁栄の裏に失われつつある精神的な糧。このような世の様を憂えていた私には御講義で拝聴した真心・虚心ということに強い同感を覚え深く感動した。しかし天皇についての御講義

は虚心に聞けず、後日の日常生活の中に帰ってもう一度考え直してみようと思っている。

学んだことを自分の言葉で人に伝えたい

(益山 茂)

この合宿で諸先生方や友から学んで成る程と納得できたことを、今度は自分の言葉として人に伝えて行きたい。また今後の自分の活動に合宿で学んだことを活かして行きたい。

山ふかき霧島山の朝霧に心さはやか今日も学ばむ

新しい世界が開かれた思い

(家事手伝い 高村真澄)

この合宿を経験して私の前に新しい世界が開けた思いです。木内先生、村松先生、小田村先生の御講義は本当にすばらしかった。ここにこそ本物があることを実感できた。このような機会に恵まれ、それを知ることが出来たことで喜びが溢れるようです。

二十年近い人生で身に沁みついた物の見方、考え方に何の疑いも抱いたことのない私。しかし今まで教えられてきたことは西洋からの借りものであること、日本にはずっとずっとすばらしい伝統と歴史があり、その頂点に天皇がいらっしゃることが理解できました。

又自分自身の人生に対する姿勢は間違っていることに気づ

きます。今までの受身の態度を改めて多くの先輩方が遺されたものを知ることを第一歩にして、自分に少しでも定着させていくことに努めたいと思います。

自分の生きてゆく道が開かれた

(日本編物専門学校 高村恒子)

初めて参加させて頂き、今までになかった経験をさせてもらい、これからの私の生きてゆく道が開かれた思いです。私の感じた所ではまず素直になるということです。和歌を学ぶことよって天皇の御心を知り、日本人としてのとるべき道を教えられました。諸先生の御熱心な御講義には言葉では言い表せない感激を覚えました。特に小田村先生の心の底から人をゆりうごかすような御講義はよく理解でき、もつれた糸がほどけてゆく思いがしました。多勢の学生や若い人達の力強い一言一言から私もそれにつづいてゆきたいと女性としての立場から思うのです。そして一人でも多くの人達に真の日本の歴史をわかって欲しいと思う次第です。

合宿での感激を実践に生かしたい

(高千穂相互銀行 西山義朗)

初めての合宿参加でしたが、いろんな人々と同じ場所と同じ事を真剣に考え討論しあい、また先生方の御講義をお聞きして深く感激しました。今までの自分というもの、或いは今

まで考えて来た事などを更に考え精進してゆかねばとの感を強くした。ただ感激するばかりでなく、実行に及ぶことは多難ではあるが、一つの事にとどまらずに機会を生かして実行していきたい。今後は自分の身の廻りに大きく目を見開いて、この合宿の体験を一つでも実践してゆきたい。

心の深い結びつきが国を救う

(市民大学講座 浜田博子)

霧島の緑は美しい。人間がいつもこういう環境の中に生活出来たら、世の中はここまで混沌としなかったかもしれない。国を思い生命を捨てた多くの祖先の方々が、どれ程この国を守りたかつたかがわかるような気がする。

人間と人間の深い結びつき以外に国を救う力は無い事を確信する。国文研の先生方と若い方々との間のお互いを、思いやる心の一片をかいまみて非常にうれしかった。生命あるものが生命あるもののために生命を捨てること、自分の生命を得んと思うものはそれを失い、それを失うものは永遠の生命を得る。という意味の聖句にいつも身のひきしまる思いがするが、聖徳太子や特攻隊やその他の多くの方々の御心に感動する。天皇についても随分再認識させられた。日本民族が不思議な程に他には無い良いものをもっている事に驚く。この忠・孝・真心といわれる精神を現代に如何に生かし、私自身がこれからどういう心の持主になっていくかが問題だと思

う。精一杯頑張ります。

真心をもって事にあたりたい

(日本遺族会 板垣亭次郎)

この合宿にご苦労なされた多くの人々、特に事務局の皆様方のご苦労は人一倍のものがあつたと思います。前日までのあの激しい台風にあいながら、スムーズに合宿運営を行えたことは、遺族会事務局に居て事務運営の経験がある私には苦労がよくわかります。立場からも大変だったろうなあと思っています。特に感激だったのは班別討論です。もっぱら私は勉強不足で聞き方にまわつたが実に有意義だった。ただ残念だったのは時間が少なかったこと、また、中にはあまりにも優等生的な意見があつたこと、もっとこだわりなしに腹を割って話し合いが出来たら、より一層これからの人生にプラスになるのではないかと思う。多くの先生方の御意見をお聞きしたことを職場に帰り私のできることから少しずつ実行したいと思う。「ことにあたるにつき真心を持つ」ということは、実にあたりまえのことと思うが、これこそ実行するには何とむずかしいことか、果して僕に出来るのかどうか判らないが一步一步努力したい。

人間はみな兄弟である

(中村建設 山田 肇)

我々が忘れかけていた日本の伝統を思いもよらない方法で
教えられた事は感謝すべき事だと思っています。私はかつて
人間の生き方について若い学生と語り合った事がありました。
た。その時に話題になった内容も「人間はすなおにならなく
てはならない！」という事でした。私は人間はみな自分の考
え方及び物の見方をしっかり認識すべきです。「人間は自ら
の欲に走ればその欲にて滅びる」「人間世界においては全て
の「人間はみな兄弟である！」」「他人が有りて己があ
る！」

第二十二班—社会人—

もつと天皇と国について考えたい

(高千穂相互銀行 森 厚機)

私が四日間の合宿で感じた事は、これだけ多くの人々が天
皇と国について深く考えていたこと、又講義を通じて、天皇
がこれほどまでに国民の事を思われていたのかということだ
でした。この事は私が今迄二十六年間に経験し得なかったこと
です。これからの人生においてもつと天皇と国について考
え、勉強したいと思います。

霧島に集ひし友と語らへば空の青さに心澄むかも



カメラ・レポート 15

“別れ”名残りを惜しみいつまでも手をふりかわす友と友。

心の触れあいの重要さを確認できた

(海上自衛隊佐世保教育隊 石戸勇太)

合宿教室の参加者は、みなお互いの心に触れたいという気持ちも強くなっていったように思われる。現在の勤務について以来、心のつながり、即ち心と心が触れあうことの重要さを感じていましたが、この教室に参加してそれが重要であり、絶対に必要であることを確認できたことは大きな成果であった。合宿教室を支え、縁の下の力持ちとなった方々、遠方から馳せつけて講演していただいた方々に心からお礼申し上げます。

松風の騒ぐ丘べに憩ふときタバコのうまさ友も知るらん

心をこめて仕事をしたい

(株高田工業所 前田哲秀)

勤務の都合上(人事課)人との交わりの機会が多く、それに伴う事務手続が私の日常業務であります。この合宿で得た心の交わり、誠意、他の為につくす心が日常業務の事務手続きの上に実施できそうです。この合宿に参加する前の自分のやり方は何か合理的すぎて心のこもらない事務手続きであったように思われてこれからは誠心のあるものにしたいたいと思う。今後大きく仕事に国を思う気持ちでぞみたい。

友どちとつくりて語るしきしまの道ぞ心に残りけるかな

友と語り明かした事を大切に

(高千穂相互銀行 河野邦夫)

突然会社の先輩の紹介でこの合宿教室に参加致しました。が、出席者全員の国を想う真剣な眼差を見て感無量に成ると共に、私の今までの生活がいかに惰性的で無意味な生活を送っていたかに気づきました。これからは、日本の現在の姿、或いは日本の将来を友と真剣に語り明かした事を思い出して、一日一日を大切に送って行きたいと思えます。

満天の空を仰ぎてながむれば笑いし吾子の幼顔うかびくる

強く生きてゆきたい

(鹿児島興業信用組合 本村健三)

毎回の合宿で感じるのですが、全く知らない同志がこんなにもうちとけ心を開けることに驚きすら感じます。

人間の魅力は表面的なものからは決して生れてこないし、魅力を出そうと思っても出せるものではない。そういう意味において国文研合宿は人間の魅力づくりをしていると言えます。その人間の魅力に多く人々がついてくるはずですよ。お互いが自分自身の魅力づくりをすることによって職場、ひいては国がよくなっていくと信じます。私は自分自身をよく見つけておだやかな中にも強いものをもって生きてゆきたい。

国のため我れをきたへむと合宿の師の言の葉に耳を傾く

感激の連続であつた

(航空自衛隊第四術科学校 村山寿彦)

この合宿での毎日が感激の連続であり、今までの自己の怠惰を深く反省させられました。今はただこの感激を大切にしたいと考えております。

霧島の山路より見る山々の木立の緑はあざやかにして

楽しかった

(鹿児島興業信用組合 松崎純一)

私は今までこのような会があることを知りませんでした。会社からの推薦で来てみたものの、台風で一日開催がのび、運営面においていろいろな問題も起つてきたことでしようが、この三泊四日はほんとうに楽しく、またこれから私が社会生活をしていく上に、ここで学んだことは大変勉強になりました。ほんとうに有難うございました。

有意義な体験をした

(中村建設 上野高義)

この四日間をふり返ってみると熱のこもつた先生方の御講義、合宿参加者の規律正しい態度、新しくできた親友達など、この短かい日数の間に、従来にない貴重で且つ有意義な体験をさせていただきました。このような環境がいつも自分

のまわりにあれば、自分の生き甲斐というものを確実に見出すことが出来るように感じました。

第二十三班―教員―

論ずる前に真心がなければ

(熊本県山鹿小学校 白本敏和)

日本の国を論ずるにも、教育を論ずるにも又、人間というものを論ずるにも、そこには相通するものがなければならぬと思う。それは、単なる目先だけの考えや技術ではなく、正しい物の見方、考え方ができてこそ前述のようなことも語れるし、実践をもできるものと思う。

その正しい物の見方、考え方を今回の合宿においてつかみかけていますことを何よりも心嬉しく思っています。真心、すなおな心をもって、毎日これからの児童の教育にあたり、これまでの美しい、日本独自の伝統を受けつぐべく児童の育成に専念したいと思っております。

日本人としての進むべき道、又今後道を進む折の姿勢、物の見方・考え方をはっきりと示していただきまして、ほんとうにありがとうございます。深く感謝致します。この上なき有意義な合宿でした。

霧島合宿全体発表表において

涙ぐみ語りし友のことばききわが目頭もあつくなりけり

若人に負けないように努力したい

(熊本県杵北町立高浜中学校 齊藤 恵)

はじめは、若人の集いである合宿教室に参加する事に何となく抵抗を感じた。

若い人々について行けるであろうかと思ひ四十才の心にもちうち、不安のままに参加した訳である。

併し、次代をになう若人と共に、毎日規則正しく、勉学に励み、共に語り楽しい日々を送りました。

今さらながら参加してよかったと嬉しく思っています。合宿で自分の将来に明るい希望を持って生きる何ものかをつかんだようです。今後、若人に負けないよう努力したいと思っています。

霧島で次代をになう若人と共に語りて我れ若がへり

子どもたちを真心で導きたい

(熊本県山鹿市立山鹿小学校 瀬口忠一)

本物に触れた喜び、わかる喜び、美しい心を語り合う喜びは幼な心に支えられるものであろう。自分の仕事に全力を尽して、一日一日を大切に暮していくこと。子どもたちのひとりひとりを大切にしながら真心で導くこと。そして教育する本物の喜びを見出す教師でありたい。

真心をけふより子らに伝へむと霧島山を下るはうれしき

合宿で身がひきしまった

(熊本県熊本市立五福小学校 豊田幸弘)

合宿に参加するために人吉から山越えしたときの時間の長く感じられたこと。それだけに、やっと目の前にひらけた霧島山をみたときのよろこびはたとえようもない。僕は今、合宿を終えてそれと同じような気持である。暗く狭い林道がこれまでで、僕、いろいろのことをしっかりと学んだ今の僕はひろびろとした野山である。規律ある生活の中に班員との真の心のふれあいが続き、先生方の御講義はどれも心うつものであった。なんととはなしにくらして来た身が反省させられ、数多く学んだことをこれからの教師生活の中に生かしてゆくことを心にきめて霧島山を去ろうとしている。

棄にて病をさへてこの五日師友の言に光見へ来ぬ

若人の素直さ礼義正しさを発見した

(熊本県熊本市立出水中学校 衛藤純一)

有意義な四日間、本当に国文研の方々とお世話になりました。真心のこもったお世話で心が洗われていくのを覚えました。若人大学生がこんなに素直で礼儀正しいことも改めて発見でき嬉しく思いました。リクレエーションの血潮たぎる力強いエネルギー、今日の全体意見発表で涙を流して改悔する若人を見て、本当にこれが生きていることだと感激しまし

た。ややもすれば惰性に流れ、自己の出世、利益のみを考えた生活が如何に教育の正常化を侵しているかを確認いたしました。一人でも多くこの国文研に参加させ、その環をひろげていきたいと思えます。これからも祖国日本のため努力していきたいと思えます。

真心をこめたる若人感想を涙流して語りをりぬ

自分の信念に更に力を加えられた

(熊本市立京陵中学校 田中慶博)

現代の日本人は日本の国土に住みながら、あまりにも日本を知らないような気がしていました。そのことを憂えてあちこちで祖国愛とか愛国心とか叫ばれるようになりました。

その中で国民文化研究会が次代を背負う学生・青年諸君に対して「日本を知ろう」と標題こそ掲げてないが、真の日本を知らしめていただいている事に心より感謝致します。私も熊本の地で教育問題懇談会の代表者としてお世話致しておりますが、四泊五日の研修で自分の信念に更に力を加えられました。これから大和男子として、日本の歴史の上に立って、日本民族の発展の為に大いに頑張ります。

霧島に学びしことを胸に秘め日々の暮らしに役立てむとす

自分の生くべき方向が発見できた

(福岡県久留米市立城南中学校 藤丸国彦)

カメラ・レポート16



台風による崖くずれ、道路寸断のため土砂除去の箇所。

「人生と祖国と学問」、今までの教員生活十五余年をふり返って、この四泊五日はまさに一つ一つが人生觀の発見であったと思う。自分の心に本当にこれではいけないと言いつけ、自分の視野のせまさを痛切に感じました。講師の先生のお話しを聞いた時に、自分の心がやきつけられるようで、自分の生きていく方向を示して下さいました事を感謝します。

心が洗われた気持

(福岡県久留米市立南小学校 中村清輝)

初めて、この合宿に参加させていただいて本当にありがたうございました。一般社会ではなかなか聞けない、充実し、迫力のある御講話を生の声でお聞きできて大へんうれしゅうございました。班別討論では心のよるいをとって、安心して心を許して話し合えたことを喜び、自分自身の今までの人生の反省となり、何となく心が洗われた気持です。

霧島の湯にひたりつつ夜もすがら心をこめて語り合ひけり

第二十四班—教員—

目を開かされたような気がする

(熊本県南関南中学校 徳永宗正)

私は国文研の合宿に初めて参加させていただきました。教員生活十六年、正に合宿教室と同級生であります。終戦時は

国民学校の五年生で、その後、いわゆる新教育を受けてまいりました。その必然といえは責任のがれのようにも聞こえますが、日本の国、私たちを育ててくれた祖国日本について、何ら真剣に考え、勉強したことも皆無だったとも言えます。その私が十六年にもわたって教壇に立っていたのかと思うと、本当に生徒に対し、また日本国に対し、全くすまない気持であります。合宿を終えます今、講師の先生方、合宿を共にしました友の尊い教えに何かしら大きく目を開かされるような気がいたします。日本の国を思う心が今やっとわかりかけた自分ではありますが今後、この気持を素直に伸ばしたいと決意している次第であります。

霧島に集ひし友の言の葉に日本のこころ聞くぞうれしき

御製に言いしれぬ感動を覚えた

(熊本市立清水小学校 福富二人)

平素、教育の現場でわたくしたちが学習していることは、ほとんど専門的なことであり、狭い範囲のことが多かったのであるが、この合宿では、祖国日本の美しい姿、日本人として何をなすべきか、また、わたくしたちが、命がけで、この混乱のさ中にある祖国日本を護らねばならないこと、などを、第一流の講師の先生方の切々たる講義の中から、はたまた、膝つき合わせ、食事の時間も忘れて討論した班別討論の中から、この肌で、じかに感じることができた。小田村先

生の、「自分を忘れて、他の人の中に心を寄せて、自分を投入していく。」という魂のふれ合いができたことを、心から喜んでゐる。また、太平洋戦争を戦ってきたひとりとして、「天皇制」の問題について、歴代天皇の御歌の中にお詠みになつておられる、「絶えず、国民のことに思いをよせて、しばしの安らぎも得られなかつた大御心」に言いしれぬ感動を覚えたものである。この合宿の尊い体験を、明日からの教育に生かし、ひとりでも多くの人が、燃ゆる祖国愛を持つよう話し合つて、同志をふやしていきたいと思う。

ほのぼのと心温まる想ひ故郷さして今帰り行く

同志に伝えて新しい芽を伸してきた

(福岡県久留米市立荘島小学校 馬場フミ子)

合宿教室で四日間生活を共にし、先生方の講義を受けたり、色々な方の話をきいて、私自身がほんとうに勉強がたりないことを深く反省しました。そして、子どもを教育する教師がまず、信念をもって実行できる人になることだと強く感じました。

「日本人としてどうあるべきか」「伝統」「心の結びつき」

「天皇論」等について、皆様方と共に討議しているうちに、少しずつ自分の考えがまとまってきたと思ひます。ここで学んだことを教壇の上で生かし、同志に伝えて新しい芽を伸していきたいと思ひます。

古典に接し自分の心としていきたい

(福岡県久留米市立京町小学校 塚本正宏)

自分の日頃の生活ぶりを素直な気持ちで反省させられました。今までは、狭い自分の立場に固執し、防壁を築き、言葉を投げつけるだけで他人の考えを聞くことができなかった。今も尚、そこから抜け出せない自分を大変恥かしいことだと思つてゐます。ただ、この四日間の体験から、人の心を自分の心として受けとめ、自分の真心を表現していくことの大切さだけは身にしみて感じました。

合宿の終りにあたつて思ふことは、本会の研究の主題の一つである天皇の理解について、多分に、感情的、直観的な認識の仕方もありますが、どこか心ひかれる天皇像をつかんだ様に思ひます。これからは、天皇を含めた先人の心を、古典に接しながら確かめ、自分の心として行きたいと思ひます。

霧島の四日の過ぎて我が心かくも変わりとおどろきにけり

集団生活で精神修養ができた

(福岡県久留米市立荒木小学校 青木正信)

この合宿教室で、四日間の集団生活を共に送り何か精神の修養が心の中に養なわれたように思ふ。講師の方の熱烈なるお言葉はひしひしと、私の胸を打ちました。

班別討論で自分の悩みと同じ悩みを他の先生方も持つておられることがわかり、その悩みを一步一步自分なりに考え、そこから生まれた実感を他の一人一人に伝えていきたいと思う。学生諸君が、「国を思う心」、「命を国に捧げる気持」を持つている事から将来の日本が益々発展して行くことに確信づけられ心強く感じた。開会式での「君が代」、慰霊祭での「海ゆかば」の合唱では、これ程心の中から歌ったことがここ数年来なく、感激深いものがあつた。

天皇は日本の中核たりえた

(福岡県久留米市立宮ノ陣中学校 近藤嘉登)

合宿教室で何よりも勇気づけられ確信にまで高められたものは、戦時中という異様な世相の中で、天皇を現人神とし、朝に夕に儀式時に、御製を唱え、見ることの出来ぬ姿に礼拝していたが、この合宿で私利私欲を離れ、国民の身の上を案じられる歴代天皇の和歌とその真情に接し、天皇が日本の国体の中核たりえたということの自覚を深めたことである。戦時中のように天皇と国民との間を切り離さず、又為政者の権力の具になされない、自由な位置に天皇を守ることが必要であると感じた。

国思ひ集ひ来たり同胞の君守る心の強きなるかな

天皇の御心に接しえた

(熊本県玉名郡南関第三小学校 赤木忠明)

私は、戦時中に教育され、戦争に勝つために、ただ観念的に指導されて来たものである。身をもって、国のため、大君のためにつくす覚悟は出来ていたと思うし、また持っていたと思う。しかし、今度の研修によって、先生方の熱心な御指導で、特に歴代天皇の和歌などにより、はじめて、天皇の御心に接することが出来、ありがたさを今更のように強く感じ、日本人として生まれた喜びを感じたものでした。このすぐれた日本の歴史を後世につたうべき責任のあることを強く感じました。明日からの生活の中で、どこかに生かしていきたいと思っております。

大君の御心ふかきを歌に知りただかしこくもとはにつたへむ

かねて感じていた以上のことを感じた

(熊本県玉名郡三加和町立神尾小学校 木崎武弘)

私は、教育者として、「教育者は何をなすべきか」を、他の者以上に考えて合宿に参加していると思っていた。ところが、諸先生の講義をお聞きして、自分がかねて感じていた以上の大事な事に、気づかされそれを実感として受けとめることが出来た。理論と規律ある合宿生活の中で、特に心にきざみつけられた感じである。また、お互の話し合いの中でも、

人間として、日本民族として、今後どうすればよいかということがわかり、合宿に参加して良かったと思った。そして、国を愛する気持を、実人生にどのような生かしていくかを追究し、実行に移して行かねばならぬと思う。国を愛するという事は、理論でなく、実行に移してはじめて、生きてくると思う。

よもすがら倫を求めて語り合ふ友のまなこのするどかりけり

第二十五班—教員—

物事を虚心に見つめる努力をしたい

(久留米市立日吉小学校 柳 邦彦)

特に印象に残った点は、

一、この会は「祖国、人生、学問について語り合う」ことがねらいだったが、講師も司会者も会員も、ほんとに自分を投げ出して、真剣に討論された。全く頭の下がる思いであった。人の話を聞くこと、自分の意見を述べることのなんとむづかしいことが痛感させられた次第である。

二、短歌の創作をはじめて経験したが、感動した事柄を素直に表現することに苦労した。しかし、よい勉強になったと思う。

三、天皇の問題については、今まであまり考えた事がなかったが、天皇の御歌を朗読するにつれ、その御心がありがた

く感じられた。この気持ちを今後忘れずに教育の場にも生かしたいと思う。

四、合宿の終りにあたって、川井修治先生が云われた。「実感↓決意↓方法の追求↓実行」の教えを胸に大切にしまいい山をおりたいと思う。そして、もっと物事を「虚心」に見つめる努力を続けたいと思う。

峰を背に遙かかなたをながむれば静かに浮ぶ桜島やま

天皇の御心と御歌を知った

(福岡県久留米市立善導寺小学校 白土 浩)

合宿に参加して本当によかったと思います。いろいろと感激するものも多く、心に残りましたが、うまく表現出来ないので箇条書きにしてみます。

一、現代日本の直面しているさまざまな問題を大局的な立場からわかり易くご講義していただいたこと。

二、各先生方のご熱心なご講義には本当に心をうたれた。

三、歴代天皇の御心と御歌についてくわしくご講義していただき、また人と人との対話の大切さ、真心の大切さ、ことばの味わい方などを学び、現在ともすると忘れられがちな日本古来の美風をしみじみと考えさせられたこと。

四、班別討論の人数が適切で、また先生方の親身な指導によって、実りある討議がなされたこと。

五、朝の集いや他のスケジュールについて細かい心づかいを

なされ、学生のまじめなきびぎびした行動には心のひきしまる清々しい気分をうけたこと。

充実した四日間を過ごすことができました。深く感謝いたします。

やる気が湧き出てくる

(福岡県久留米市立南小学校 山崎 寛)

昨年の合宿教室参加者から、この合宿教室は心身ともに大いに勉強になると聞いて参加した。そして聞いていた以上にすばらしく、感謝の気持ちでいっぱいである。講義内容やスケジュール等本当に充実した組み方がなされ、会を運営される主催者の方々の目に見えない御苦労に深くお礼を申しあげたい。教師として自分はどうあるべきか、もつと足もとを見つめ真剣に考えなおさなくては、真に祖国日本を背負って立つ人間の育成はできないと強く感じとった。このように強く感じたことを少々オーバーにいうのも、こんなに私の心を動かしてくれたことが今までになかったからである。心の中に「やるぞ、やらねばならぬ」という気持が自然と湧き出てくるのを覚える。

霧島で得たるよろこび子どもらにつたへむと思へば胸内おどる

統一の中心となられた天皇の御力

(熊本市立藤園中学校 清田清蔵)

第一の収穫は、国の現状を憂い将来を思う講師の先生方の熱心な講義、学生、教師、社会人からなる参加者全員の真剣な合宿参加態度に接したことであった。此の合宿で共に学んだ人々が、各々の職場や大学に帰られたあと、この合宿で得られた事が、必ずや有形無形の大きな力となって今後の生活にあらわれていくことであろう。

第二は、和歌に対する関心をよびさまされたことであった。学生の頃、啄木や牧水の歌にひかれたことはあったが、その後和歌ということから全く気持ちが遠ざかっていた。この合宿において天皇の御製、憂国の志士の歌、戦争未亡人の魂の叫びのような歌等についていろいろ話を聞き、又参加者の作られた数百首の歌に接し、すぐれた日本の伝統である和歌について全く心の清められる思いがしたことであった。

第三は、天皇制についてである。講義を聞いたあと班別の討論により天皇についての熱心な話し合いがなされた。いつもはつきり解っている様なことで、案外考えていなかったことを反省させられた。日本民族が二千年にわたって独立を維持してきたのは、その独立を維持してゆくために中心となつて存在してきた天皇の御力というものがいかに大きかったか。我々の祖先が、いくたの生命をかけて守ってきた日本で

はあるが、そのためにはその統一の中心となられた天皇の御力があつたということを実感として感じた。今、合宿を終えて山を下りるに当りこの合宿に参加してよかつたと、しみじみと感じられる。

四日間の合宿終へて帰る日は小雨の中に別れぞ惜しまる

和歌の重要性に気づいた

(福岡県久留米市立草野小学校 千頭康夫)

この合宿に参加する前は、日程表にはスケジュールが示されているものの、どういう講義、行事が行なわれるのか不安でもあつたし、また期待もあつた。しかし、終わった今では、ほんとうによかつたと思う。今は感想をまとめるだけの整理がついていないが、人生、祖国、学問という問題が氷解したように思う。又ものの考え方、見方というものも諸先生方の御講義の中で天皇制の問題を中心にして、どうにか自分なりにわかつたような気がする。

和歌についても、自分の今まで持っていた考えがまちがっていたということに気がついた。どうして、この合宿の中で和歌がとりあげられているのかということが、最初は不思議でならなかつたが、御講義を受けているうちに、その重要性に気づかせられた。ほんとうにぎつたりつまつたスケジュールに苦しめられたが、有意義な四日間であつた。この合宿に対して感謝いたします。

あらしざり暗雲ざりて今はわれはればれとして宿をはなれむ

永い歴史のたまもの

(福岡県久留米市立宮ノ陣小学校 山浦耕治)

日本は古来、東洋的思想に貫かれた日本文化、日本的な物の考え方を形造つて来たという。同感である。我々は常に己を反省し、その反省の上に立つて行動する習性ともいえるものを身につけていると考えられる。そこにあるものは、排他的でなく攻撃的なものでもない。むしろ黙し己を見つめ、その上に立つて他を見つめるといった人生観なりがあると思える。それは根底から西歐人の物の考え方と異なる。それは教育とかいったもので作られたものでなく、永い間の歴史のたまものともいえよう。なぜ、そういう特性が培われたのか。同一民族、風土等、種々の原因が考えられよう。いずれにしても、かかる国民感情は大切なものであり美德ともいえよう。日本は幸にも海に囲まれ同一民族としての共通の場があつた。しかるに現在、右も左も日本を良くする、国家を憂うという事のみ考え、あまりにも過激に走りすぎるのではなからうか。国家を憂うる前に、まず己を考える事が大切と思ふ。己の考え、思想体系と異なるからといって決してそれを潰そうと無理おししてはいけないのである。教育における素直さ、誠とは何か。それは、とりもなおさず事実である。事実をあるがままに伝承すること、己の目を通して他を批評す

る事がおろかであるように、教育が体制の手によって事実を伝える事ほどおそろしい事はなからう。真実の伝承によって芽ばえた民の心の集り、そこに真の国家があると思う。

先ず教師が真実を知らなければ

(福岡県久留米市高良内小学校 末崎利治)

本会の参加は初めてであったが、大変有意義であった。この会が目標の一つとして取り上げられている、日本の精神文化の興揚と日本の進路ということについて、現在の世界の文化の動向と日本文化の荒廃を考えると強く憂慮されるところである。それを正常化するために、日本の伝統価値の再発見と向上を目指す考え方に大いに感動させられた。

教職にたずさわる者として、私達は真実を教えなければならぬ。そのためには、先ず教師が真実を知らなければならぬ。ということをおのここの合宿は私に教えてくれて大いに啓発させられた。

世界文化の動向の中で日本の文化をどのように生かしていくかという命題は大変むずかしいことであるが、何とか、方向をあやまらないようにして発展させたいものである。

合宿はまことの心たずね合ふ人どち集ひて頼もしくもふ

人間性豊かな教育をする決意です

(熊本市花園小学校 東 正知)

開会式での力強い君が代は頼もしく感じ、また、講演内容が大変よかった上に講師の先生の熱意から受ける感化は参加した者でないとわからない貴重なものでした。私は今まで合宿教室で受けた「心の結びつきを大切にす」ということを父兄や子どもに広め教育の効果を上げ、喜ばれました。今度はこの教育で最も欠けている真心を学校や家庭に広めたいと思っています。虫や花にいろいろあるように心にもいろいろあると思います。常に心を洗い人間性豊かな教育をする決意をかためました。講演を聞くたびに知らないことの多いのに気づき、今後は一層勉強して知ることにつとめたいと思います。天皇を中心とした日本の同胞の心の結びつき、世界の国際情勢を知って国を愛する心を養い、小学校上級生や父兄に学年会などで和歌を作らせ誠の心を養いたいと思います。今後は合宿の感激を実行にうつすことです。

国思ふ心一途にあらしつき霧島山へいそげり我は
杜絶した道をのぼりてはるばるとたどり着きたる霧島の宿

第二十六班—女子学生—

素直になろう

(上智大学 外 一年 角丸泰子)

私がこの合宿で学んだことはたくさんありましたが、その中で最も大きなことは「素直になろう」ということでした。

今まで何だか自分に自信がなく、人に批判されることが恐ろしくて、人前で自分をさらけ出すことのできなかつた私の甘えた姿勢を恥ずかしく思いました。そして理屈のみで押し切ってきたような大学生活に一番欠けていたものは、「こころ」というか、人に対するあたたかい目といったものではないかと感じました。

そういうあたたかさを持って人と接するということが戸田先生のおっしゃった「かけがえのない生命を捨ててこそ最上の喜びが得られる」ということにつながり、ひいては日本の伝統的な精神である「無私の心」ということになるのではないかと思います。またこの合宿では女性の生き方ということについても考えさせられました。自分は何に適しているのかということ、結局「生き甲斐」ということになりませんが、自分が最後に捨てることのできないものは何かを自覚し自分を見詰めて生きて行くことが必要だと痛感しました。

国を思うということがわかった

(鹿児島大学 法文 一年 吉原たつ子)

友だちにこの合宿のことを聞き、不安ではあったけど参加しましたが、初めに予想していたものとは随分違ってました。これまで国のことを思うという気持ちを漠然としかわかっていなかったが、この合宿で、それがはっきりとして、国を思うという気持ちが日常の生活や人との交わりの中にも、かよいあ

うものがあるということがはつきりわかったのは嬉しい。そしてまた強い信念のもとに、私達を導いてくださる先生や、素直な心を持った多くの友達に会えたのはなにより収穫であった。これからこの人達のこと、素直な心を忘れずに生きて行きたい。

心をこめた接し方をしたい

(鹿児島大学 教 二年 吉行ゆう子)

この合宿に参加して、先生方の御心のこもった御講義を聞いて、何かしら胸にジーンと響くものを感じました。本当に参加してよかったなあと思いました。

心のこもった話とそうでない話とではこれほど人の心に訴える力が違うものかと痛感しました。これから人に接する時にはいつでも心をこめた接し方をしようと思います。また和歌創作を通じて思いましたことは、和歌をつくることによつて人は自分の心境をみつめることができ、それによつて成長できるということです。現在、家庭教師をしています。和歌や、日本の古典をもとにして、真心の大切さを教えることに専念したいと考えています。

すなおに人を見詰めたい

(鹿児島大学 教 二年 内山なな子)

この合宿に対する私の心がまえば、あまりにもうわついた

ものであった。いつもそうなのだが、行動するにも物事を浅くしか考えてやらないものだから、その底に含まれている大事な意味を逃がしてしまふ。だから和歌を作るにもびったりした言葉で表現できず、概括的な言葉しかでてこなくて、全く自分の心にじっくり行かなくなる。全体意見発表でも言われたように、他人を傷つけないようにという話し合いでは本当の話し合いではないと思う。私の場合、自分可愛さからの八方美人な話し合いであったし、心の内に不満があつてもそれを出すことをしなかった。それがすなおでない不純な心なのだけれど、もう一步つっこんだ話し合いのできるようにしていかなくてはと思った。

合宿中、どうしようもなく悲しく思ったのは私の心の一部に不純な心があつてどうしようもなかった。とにかく、すなおに人を見詰めようと思う。

来て本当に良かった

(青山学院大学 法 四年 柿並雅子)

九州に台風が上陸したと聞き、合宿に参加しようかどうかどうしようかと迷ったが、今は本当に良かったと思つてゐる。

しかし、途中で風邪をひき、講義を聞くのも頭痛との戦いであった。しかしそれによつて、班の人達の友情のありがたみ、いたわりが身にしみて感じられた。

もやもやしたものが取り除かれた

(熊本大学 薬 二年 黒川幸子)

この合宿で天皇について、納得のいく説明をお聞かせいただき、私の頭から、もやもやしたものが取り除かれました。天皇というものの真の姿、その御心を、私の知っている範囲内で、解ってもらいたい、感じてもらいたいという気持ち、人と話していきたい。

美しい心を持つと、真心で人と接しようと主張している人に対して、この人達はこの美しい言葉に酔いしれているのだと批判的に見ることもあったのですが、こんな見方ではないけないと思ひました。合宿では友達と心をひらいて話ができて、気持ちよく過せました。

緊張して過した四日間

(鹿児島大学 教 二年 鈴木由美子)

この合宿を終え、小田村先生が今日、「開会式を思い出してみて下さい。思い出されますか?……」と言われた時、なにかしら体中に熱いものが通り、「涙が出てしかたがありました。わずかな四日間、本当に精神を集中させ、緊張して過しました。先生方の本当に心から国を思い、話される講義に感激し、部屋に帰って、その喜びを友だちと話し合ひました。真剣な態度、すなわち、すなおな心の姿勢がないと通

じにくく、討論後は私も皆もくた／＼になりました。

でも疲れた中にも喜びを強く感じることがたび／＼でした。床につくと討論で発した自分の言葉に悩まされ苦しみました。じっと黙っていても自分の心が相手に伝わるようにならないかなと思っていました。まだまだ自分の心を磨き、強くしていかなければならないと思いました。

もう別れるのかと思うと本当に淋しくなります。いい人達ばかりでした。有難度うございました。

動揺し続けました

(鹿児島大学 教 二年 小山さよ子)

率直に言いましてこの合宿中、私は動揺し続けました。夜静かに目を閉じて先生の御講義で心にひっかかっていたこと、また班別討論で赤裸々に述べられた数々の言葉、またその時、自分が述べたことを整理してみました。そして、人は各々顔が違うようにどんなに同じような考えを持っている人でも、やっぱり違うんだと思われて、少々悲しくなり、あきらめの気持のようなものが、どうしても私の心に漂っていました。しかし今、全体意見発表をお聞きして、どんなに言葉の表現は異っても、結局皆言っていること、否、言いたいことは同じではないだろうか、皆が心の底で求めているものは一つなのだとすることに気づきました。戸田先生のお話にありました「生命ある者が生命ある者へ生命を捧げる」という

言葉は、非常に強く心に残っています。

自分の気持を正直に見詰めよう

(玉川大学 芸 二年 佐原深雪)

一個の尊いのちを授った人間として私達が生きていく上で、本当に大切なもの、——それは言葉で言えば「まごころ」でしょう。日本の現状を思う時、高度文明化、経済社会の急速な発達の影響に、人間として、日本人として大切なものを忘れすぎているかと思うのです。気づいてはいても、今の社会情勢がこうなのだからどうしようもない、そうやって結局、社会の情勢に流されていたのではないかと思うのです。自分自身のことを考えた時、今まで自分を大事にしすぎていたと思うのです。どこかで自分に甘えていたし、自分を守ろうとしていたと思うのです。もっと自分の殻を打ち破っていかねばならないと思うのです。いろんな人と話す時にも、小田村先生のおっしゃったように、ある一定線までは話すけど、それ以上は、相手の気持を傷つけるし、口下手の自分だからわかってもらえないし、という事で口をつぐんで相手をも自分をもごまかしてきたことが随分あったと思うのです。

まごころをこめて自分の気持を素直にみつめて話せばお互い感じるものはあると思うのです。それに自分の気持を口にする事で、自分の気持を確かめ、また相手の反応によって自

分の足りなさも知ると思うのです。最後の全体意見発表を聞いて、自分の気持ちを正直にみつめ、口にする事の大切さを痛感しました。じっと聞いていると、その人のおっしゃりたい気持ちが痛い位に通じてくるのでした。

第二十七班 社会人

普通では味わえない心のふれあい

(南日本放送 平田美雄)

思想のおしつけや、相互批判の厳しさを懸念しつつ合宿に参加したが、初日にしてその懸念は払拭され、精神的に快い四日間がすぎた。年齢も業種も生活環境もちがう友らと寢食を共にし、心をわって話し合えたことは貴重な体験であった。自分の考えを充分に言葉に表わし得ず、また、友の心を充分に理解し得ないもどかしさはあったが、少くとも普通では味わえない心と心のふれあいは数年来の旧友との交わりにもまさるともおとらないものであった。この先、何年か後に再会しても、きっとこの四日間と同じ気持で、同じ心境ですぐに言葉を交わせると確信する。

さはやかな朝にはあれどけふのみで集ひ終るはさびしかりけり
別れても文かはさむとのたまひし師の御言葉を胸にきざみぬ

本当の自分をさらけ出して語りたい

(高千穂相互銀行 中山能道)

この合宿での講義はどれをとっても感銘深いものばかりです。その講義の一つを述べたいと思います。それは小柳陽太郎先生の「久坂生の文を評す」という講義です。吉田松陰が初めて手紙をくれた人に対し、あの様に自分の本心を出して書簡を送っている。まるで男対男の真剣勝負を見ている様です。しかし、その中に虚心に自分の真心を出して語りあっているのを感じ、私の日常生活における態度に誤まりを発見しました。今まで多くの友と接して来ましたがあの様に真剣に自分の心を赤裸々に伝えていたであらうか。行動を共にする時、友に本当の自分を語っていたらどうか。自分をさらけ出すことに恥ずかしい様な恐れのような気持をもっていないか。だるうか。等々を反省しています。今後の私の行動に大きな変化を与えてくれた講義です。

合宿に集ひし友と語りたるこの喜びを忘れざらめや

天皇の御心に触れえた

(宮崎交通 本部城聖)

台風のためただ一つの交通機関となった汽車で霧島に向いながら私の胸にあったのは何を学び何を修得し又ペンフレットにある「天皇をどのように位置づけするか」であった。最

初は精神の動揺と混乱の中にあつたが諸先生方の御講義を聞き、初めて会う班友と語りながら山を降りようとする今、下記のことから私の胸の中に鮮烈に焼きついた。

△真の生きがいという事

「生命あるものが生命あるもののために生命を捨てる」という事、この言葉が今後の私の指針となつて行くことと思う。

△天皇の御心にふれる事

小田村先生の御講義や歴代天皇の和歌を拝聴、拝読することによつて人間としての天皇の御心に触れることができ、しかも天皇（どの歴代天皇も）が常に国民全体の事を案じていらつしやるご様子がわかり身の洗われる気がした。

△学生の純粋な心に触れたこと。

学生の方とひざを交えて話すことができなかつたのが残念ではあるが本日の全体意見発表の場で示された、あの純粋な態度には深く感激をうけた。学生は純粋であるが故に正しい指導者・教育が大切であるとも認識させられたのである。一日も早く教育界がこのことに目覚められることを切に希望する。

以上のことが強く心に残り、意義のある合宿体験であつた。

ひと足先に山降りる友にいつの日かまた語らむと手をさしのべにけり

自分を鍛え直したい

（鹿児島興業信用組合 永野正人）

私がこの合宿において身にしみて感じたことは、まだまだ世事に対する勉強が足りないということと、自分の心を鍛えることが足らないということです。自分への甘え、世間への甘えがあまりにも今まで強すぎたということです。つまり、このまま平々凡々と暮らしていれば何とかなる。そんな気持ちだつたんです。しかし、それでは生きてはいけないということを諸講師の御講義をお聞きして痛感しました。

こんなにも世界の情勢が悪化し、日本の立場がよくないといふことをほとんど知らずにいました。こんな私でしたから、どの講師の御講義を聞いておりましたが、何かしら難しく頭が混乱しそうでした。しかし講義における諸講師の一言一句へのお力のこめようを見て感動するとともに、今までの生活のままではいけない、もっともつと自分を色んな面において鍛え直さねばいけないと痛感しました。来年もぜひ参加させてもらいたいと思つております。

合宿であまたの友と心得しことのよろこびもいまだきつ生きむ

実感Ⅱ行動の心がまえをもちたい

（高千穂相互銀行 山口忠信）

教育の大事さという事をつくづく感じさせられました。私はずっと以前に衆愚ということについて考えた事があります。一般大衆が体制を作っていることをこの前の参院選でもつくづく感じさせられたことでした。今こそ国民は自我をすて、勉強し、行動して立派な体制を作るべき時だと思います。私のモットーは、『得意冷然、失意泰然』という事です。私が実感のまま行動にうつすという事は一つの収穫でした。今までは実感を判断し、分析して行動にうつすのが良いとばかり思っていたのです。これからは実感⇨行動となるよう自己の心がまえを変えて行きたいと思えます。一日に一度でもこの合宿の事を想い出し心の糧とし、つとめて「人間」になりたいと思えます。

わきいづる泉のごとくさはやかな気持になりて我歩まなむ

物の純粹な考え方がわかった

(中村建設 本間俊男)

私はこの合宿において具体的に何をやり何を求めたら良いのかよく解らないままに参加した。しかし、合宿に参加し、班別討論及び講義等によってある程度わかった様な気がする。

村松、木内両先生の、マスコミでは小さくしか扱われていないが重要な問題である『日本が今どのような現状にあり、どのような方向に進むべきか』という御講義をお聞きした

が、日頃あまり考えた事がない問題であったが故に改めてその重要さを思い知らされ感銘を受けると共に社会のみつめ方がわかってきたような気がする。

理論で裁断せず心でみよう

(明星大学助手 金平安男)

私は数年前より主観的あるいは直感的とも言うべき心の世界は、どの様に出来ているかを客観的に見出し、又客観的になっている自分の心をどのようにして主観的な世界に入らしめる事が出来るかを考えてきた。だが、この合宿をふりかえって言える事は理論的に物事を考える事よりも以心伝心、不立文字というように心という面から日本文化をもう一度考え直して行かねばならぬという事である。

合宿で学んだ事を活動に役立てたい

(日本遺族会 飯森照男)

日頃、とかく忘れがちな天皇制の問題、東洋の文化等決して現実生活に欠くことのできない問題を深く掘り下げてご指導いただきましたことにより、自分の今後の活動の新しい方向を見い出せたように思います。また、歌の心について色々御指導いただきましたが、歌の心を少しではありますが感じ取ることが出来ましたことは何か新しいものを発見した感があります。現在、自分の仕事も組織活動の問題等大きな壁に

ぶつかっておりますが、講義を聞き、班別討論などを行なうべきながら学んだことを大いに参考にさせていただきたいと思ひます。

第二十八班—教員—

学問の厳しさに初めて触れた

(久留米南筑高 西尾金十郎)

先づ、先生方の情熱のほとばしる御講義をお聞きして、学問の厳しさに初めてふれたような気がして、今迄の自分の学問などとても学問と言えるものでないと思ひ、痛烈に反省しました。次に、自分の言葉を他人に正確に伝えることの難しさが、班別討論や歌の創作でよくわかった。それは、話し方のうまいへたにあるのではなく、自分の心をいかに他人に投入して接するかにかかっていることがわかった。すなわち、人から理解して貰うためには、真心を持って接することが第一であるということである。次に、体制第一と考えるのは、自分を逃避させる卑怯な手段であることがわかった。その他余りに多くの事を教わり経験して衝撃を受けたように、よく考えがまとまらない。帰ってよく整理したい。とに角、貴重な経験であった。

人の道教へ給ひし師の声に心打たれて涙流るる

教育には「魂の触れ合い」が大切

(熊本市立清水小学校 稲津正典)

混沌の嵐の如き思想界で、私は二十六年前を思い出し、失われていた自分を見つけ出したのでした。そして、その自分に、更に力強いところを覚めさせてもらいました。すなおな心、それは誰しもが生まれながらに持っているもので、それを常に持ちつづけようと努力することこそ、真に生き甲斐ある人生と思ひます。誰しもが持ち得るものですが、それは、努力なしには持ちつづけられないものです。そのためには、日本の伝統を、長い間祖先の方々が命がけて保ち、みがきつづけて来られた努力を、もう一度想い起こし、これを継承し、これを少しでも多くの日本人に想起させたい。これこそ、教育者の最大の任務であると思ひます。「たましいの触れあい」これなくして教育は存在しない。そして、真実のことばを真心をもって伝える、これこそ知識の切り売りと言われがちな教育に最も重要なものと思ひます。講師の先生方の胸を打つ講義の中に、思想と真心とを読みとりたいと努力しました。こんな研究会が日本にみちあふれて、各所に開催されることを、切に希望します。

虚心の強さを感じた

(熊本県鹿本郡菊鹿中学校 松永栄助)

この合宿で、私は、いかに現実に向といかを深く反省させられた。また、日本の政治経済の動向、その他あらゆることに目を向けさせていただいた。さらに、歴代の天皇が虚心になって、私たちの祖先のこと、また私たちのことを考えておられていたという大変貴重なことを知ることができた。そして、第四日目の全体意見発表の場で心うたれたことは、講師の先生のあの力強いことば、また、若い学生の、自分を素直に省みる姿をみたことである。すべてが虚心からでた尊い姿だと思ひ、胸のときめきを押えることができなかった。虚心の強さ！ このことを現場でも生かし、教師であることに誇りを持ち、これからの歩みを一步一步ふみしめたい。我が心真心なりと知りつつもなほ真心の深さを知れり

歴史の講義に感銘した

(熊本県玉名市上立願寺馬場 福原和富)

合宿に参加した動機は、職場の先輩からすすめられ、長い夏期休業中を、国文研その他の研修会に参加して消化する事にあつた。当初、この合宿に対して好奇心等もあつたが、どういう内容のものなのかは、殆んど何も知らなかつた。しかし、初日目の講義から、誠に感銘の深い日本の歴史に関する

お話を聞き、合宿終了までを、一生懸命すごすことができた。こんなに真剣になつた自分というものを、今までの経験からは、ちよつと思ひ出せない。今、感想を書くに当つて、自分のこれからの生活に、大きな変化の起るだらう事を感じるのである。

「聞く」ことの術さえ知らずでこの日まで歩み来し日の悲しかりけり

古典に対する眼を開かれた

(熊本県玉名郡菊水町立菊水西小学校 森沢正昭)

本研修会のテーマの中に学園改革の根本的究明があげられ、その中で、教育正常化への課題が取り上げられていきます。今の教育の問題を靜かに考えて見ますと、科学技術の急速な進歩にともない物質文明のもたらした暗い姿が、あまりにも多いことを痛感させられます。このような時にこの合宿に参加し、「日本文化のよさ」を、具体的事例を通して指導していただきました。即ち、古典に対する眼を開かしていただいたことを、今後の現場の指導に生かしていきたいと思ひます。

右翼団体ではなかつた

(久留米市立諏訪中学校 猪飼 幸)

数ヶ月前、中学校校長会長より、鹿児島で合宿教室があるか

ら参加して見ないかと言われ、どんな合宿教室だろうかと思
いながら申し込みました。ところが後日「日本への回帰第六
集」を読んで、この会を右翼団体だなと思っていました。
しかし、色々と見聞を開くことも教師として大切な事だから
喜んで来しました。ところが実際に教室に入って勉強して見
て、ほんとうに日本を愛する者の集りである事がわかりまし
た。色々の講義の中から学んだことを今後の参考資料として
勉強し、子供の教育にあたりたいと思います。ほんとうに有
難うございました。

教育を通して愛国心を具現したい

(久留米牟田山中学校 大坪 豊)

現在の日本が危機に立っていることは、直感としては判っ
ていたが、これほど明快に指摘されたのは初めてであった。
教職にある自分としては、就中、教頭の職にある自分として
は、現在の教育界を正常化するために一途にこの身をぶっつ
けなければならぬ。これが、教職にある者の本務であるこ
とを痛感した。武道専門学校卒業後、剣道の精神を生活の中
に具現しようと努力して来、今後もそういう生き方をして行
きたいと念願していた自分にとって、この合宿は開眼の合宿
であったと思う。祖先が剣の道を通して武士道を確立して行
ったように、国民の一人一人の血の中に流れている愛国心
を、教育の場を通して是非具現したい。その具現が一人でも

二人でもよいから、その人に現われるならば満足である。先
ず自分自身から始めよう。そして、その輪を広げよう。まご
ころは必ず天に通ずるものだと思う。常に「感謝の心が幸福
への道である。」ということを生生活信条にしながら、限られた
人生を生き抜きたい。そうして、自分に厳しく、人に寛大な
心、即ち、清濁併呑の心の広さを生活の中から作り上げるよ
う、不断の努力を続けていきたい。

むらぎもの心の迷ひ暗れにけり我が道直ぐに進み行かなむ
空しさの消えし心のうれしかり国を思ひてただひたすらに

教育の重大さを確認できた

(久留米市立屏水中学校 山中弥四郎)

常々、教職にある我が身を自ら誇りとして、今日まで過し
て来ましたが、今回の合宿にのぞみ、ますます勇気が湧いて
参りました。それは、私の本務である教育という仕事、祖
国の再建に如何に重大な役割を果たすかという事が重ねて確
認出来たからです。そして、その目標が明確に自覚出来たか
らです。すなわち、一人一人の人間が真心によって支えられ
るという事、真心を持った人間の育成を期して日々を精進す
る事、そして自らも黙して卒先する事……、この事を大目標
にかかげて、今後更に勇気をもって、この誇りある仕事に一
生を捧げる覚悟がついたからです。諸先生方、及び会員の皆
さま、本当に有難う御座居ました。

第二十九班―教員―

慰霊祭で涙のでるほど感激した

(八代市立八千把小学校 橋本洗心)

合宿教室において有意義な講演を聞き、人間としての生き方が分つたような気がする。現在程、平和な時代はない。

経済成長のすばらしい時代において、また今日ほど精神文化が要求される時代はないであろう。日本の伝統を後世に伝え残す教育こそ、我々教育者としての使命ではないだろうか。

集団生活において若さあふれる学生青年諸君と共に行動し、その考え行動を見聞し、今後の日本を背負うたのもしさを感じ、私自身も心が洗われ、若さを取り戻したようで嬉しい。

涙がでるほど感激したのは慰霊祭の行事である。第二次世界大戦に参加し、戦友を亡くしながらも今日まで、慰霊祭を挙行したこともなく、また参加したこともない。しかし、今回の合宿では壮厳な式をあげて戴き、在りし日の戦友の御霊を祭ることができ、重荷がおりたようで安心できた。この行事は是非今後とも継続していただきたい。

おごそかなる慰霊の式に友しのび歌声かれて涙あふるる

まごころで人に接するよう努力したい

(熊本市立城北小学校 梅田 司)

台風のため参加が遅れ、大変困った訳ですが、苦勞して来てみれば、参加者の殆んどの方が真剣な態度であり、また講師の先生方の熱心なお話しを聞く内に、自然と自分も皆の仲間入りができました。

講義の中で感銘を受けたものも沢山ありますが、木内先生の中共問題や、他の先生方による天皇の国民に対してお気持ち、まごころを知り、自分の今迄の生活を反省し、まごころを持って人に接するよう努力していこうと思えました。また合宿中、若い人々と接し、規律ある生活の中で、よく統一がとれ、よく守り、頑張っていたことについて、こんなよい青年が日本に多くなればよいがなあと思えました。

霧島山あい流るるせせらぎのかすかに聞こゆ朝のひととき

身も心も洗い浄められた

(八代市立日奈久小学校 寺田陽徳)

講義、班別討論、和歌創作、班別相互批評等で、身も心も洗い浄められたようである。各講師の熱気を帯びた講義、すべて職務上、教育の面におきかえ聴き入る。日常児童の教育に携わり、得てして近視眼的になりがちな生活に、今後の生き方を御指導いただいた国民文化研究会、大学教官有志協議

会の御企画に対して厚く敬意を表しますと共に、今後の貴会の御隆盛と御発展をお祈り致します。

古典にふれ人間の道を知る

(八代市代陽小学校 宮坂 斌)

一、不眠不休の日程だったが、張りつめた気持で臨んだので、疲れを感じなかった。

二、講義の内容は迫力ある講師陣による充実した内容であった。台風で流れた日程が真にくやまれる。

三、戦争のショック以来二十数年、忘れ去ろうとしていた民族の精神にふれ、今後の進むべき方向が、暗夜に光明をえた思いである。

四、「愛国心」は一つの団結した民族なら当然持つべきである。現在の自分の立場で、高揚にはげみたい

五、歴代天皇の御製を拝誦し、民思ふ暖い大御心に唯々感激あるのみです。

六、古典にふれ、いつの世にも変らぬ、人間の道を知る。

七、和歌創作、物の見方、すなおな考え方、教えられる事ばかりでした。

台風のためとはいえないすらに去りにし二日真に口惜し

まごころをもって生きるよう努力したい

(八代市立第一中学校 石原 貢)

国民文化研究会については、たいした知識もなく、すすめられるままに参加したわけですが、三日間の合宿をふりかえって見ると、先ず諸先生方の真剣な御指導をはじめ、諸先輩とかわした語らいの中に、自分の生き方を見つめ、反省し、どうあるべきかを考える糸口をえたような気がいたします。又かねての勉強のたりなさを身にしみて感じました。

これを機会に、まごころをもって生きるよう努力し、教えた子たちにも、このことを話し、身をもって教え将来の日本を背負ってたつ、若き力を育てるよう努力するつもりです。

自分の姿勢から直すよう心がけたい

(八代市立二見中学校 則座正治)

語気強く日本の危機を語られる先生方の姿は心から日本の将来を思い涙ぐまんばかりの熱意である。そして素直にそれを受けとめている学生達、こういう熱意こそがこれからの日本を造るのだと思う。「体制だけをとのえてもだめだ、真心がなければ、真の日本は生まれぬ」全くその通りである。今日の社会情勢などと人ごとのように言っておられない。私もその社会の一員であり、まぎれもなく「花を愛する日本人」なのだ。小田村先生が最後に言われたことは私達の職場にも

一つ一つあてはまることである。自分の姿勢から正すこと、若者には負けない強い心を育てることを心がけて行きたい。

自分にもやればできる

(八代市立第五中学校 園田光雄)

豊富な講師陣の充実した講義内容、それを一つ一つときほぐす様な班別討論の進め方、はじめて経験する和歌創作等、あげれば眼を見はるものばかりでした。最大の印象は日本人という自覚に立って真心でふれ合う話し合いをもてば、自ら前途に光明を見出せるという信念と、古来維持し続けた日本の真の姿を持続できるという確信がもてた事でした。今後どうあらねばならないか、静かに自省する素材を多く得た事が大きな体験でありました。次に若い人達を見誤っていたという事に気付いた事です。同時に自分の若い頃を思い出して何か若返った気持になった事です。自分達のまわりにたのもしい若者がたくさん居る事を知り意を強くしました。唯、若い人達が軍歌を大声で歌うのにちよいと異和感を覚えたのは私だけでしょうか。

最後に一つ、「時間厳守」が守れたらなあと思いました。自分にもやればできるという自信、またやらねばならないと言う気持が得られた事を大変うれしく思います。

降る雨に避難さわぎおこせし我が家のつつがなかれとひたに祈りぬ

合宿中に創作された「短歌詠草」

—しきしまのみち—



短歌創作について

国民文化研究会の年中行事である大合宿の参加者が一人残らず短歌創作を実行し、その相互批評を通じて心の交流を図ろうとする試みは、最初は不可能のことに思われました。しかし、同人の緊密な協力によって、この企図は実行に移され、かれこれ十年近い実績を持つに至りました。短歌が本来持っている心と心を結ぶという機能が、こういう形で生かされ、深められている例は余りないのではないかと、ひそかに自負している次第です。

もちろん、われわれの意図する短歌の創作は、いわゆる教養講座式の趣味やたしなみのためではありません。それは合宿実施要項にあるように「思想および表現の正確さを修練するために」という目的を持っています。ここで「思想」というのは、よくいわれるようにある特定のイデオロギーや理論体系をさすものではありません。われわれはとかく、さまざまな知識の集積の中に埋れて、人間にとって最も根源的なもの、人のまごころに敏感に感じる素朴にして溢れるような人間性を失いがちな日々を過しています。そのような夾雑物を洗い落して、人間の心の奥に眠っているまごころに還ろう、そこに軽薄な論断や渦巻く人間不信の世相の中にも敵として存在している貴重な魂の輝きを奪回しよう、そういう祈念が、この短歌創作の試みの中にはこめられているのです。

今年是最初の短歌導入の講義は、この合宿教室から巢立った北島照明氏によって行われました。氏は万葉や現代短歌の例を引きながら、作歌の要点を要領よく解説しました。今まで全く「うた」なるものにズブの素人であった人達が、わずか三十分程度の解説でどんな反応を示してくれるか、内心いくらかの懸念はありましたが、収録のような習作ができました。これらの習作について、国文研会員である山田輝彦氏の全体批評が行われ、やがて班に別れて、班別相互批評が行われたのです。班別の相互批評というのは、経験者が口を揃えてすばらし

いと言います。そこでは巷間の歌会などで行われるような、もっぱら技巧の巧拙を論ずるのではなく、作者の心を偲びながら、その心に沿って表現を直して行くという作業が徹底的に実行されるのです。自分の歌が直されるに従って、正確な表現に近づいてゆき、正しく客観化されて行くという経験は、まことに稀有なものであるようです。苦楽を共にした大合宿の友情の結びは、この相互批評の中で確認されてゆくのです。

収録されている歌は必ずしもうまい歌ではないでしょう。生れて始めて作られたものが大部分であれば、稚拙であるのも当然でしょう。しかし、三百人を超える人々が、十九号台風の障害をのりこえて集り、その一つ思いにいとなまれた精神生活の姿が鮮かにうかんでいる点に注目して頂きたいと思うのです。先着の学生諸君は、台風のため土砂が埋った道路を、泥土に塗れて切り開いたのです。会場と国鉄の駅をつなぐたった一本の道路によって、開催を危ぶまれた合宿はやっと開かれたのです。学生の一人、中央大学二年生の石井育英君は、垂れ幕を持って霧島神宮駅まで、遅れた列車で到着する友らを迎えに行った時の思いを次のように詠んでいます。

着くごとに垂れ幕持ちて友どちの来るや来ぬやと案じられけり

垂れ幕を持ちて迎ふる友どちの笑顔のこぼれ忘れせぬかも

又、上智大学二年山口良男君は次のように詠んでいます。

友どちの着きしと聞きていちはやく顔を見むとて部屋を探しぬ

その友は旅の疲れで大の字に眠りてあたり身じろぎもせず

こういうまごころは、現代短歌の専門家たちがとくに忘れてしまったものですが、短歌の最も大切なものと思われてなりません。

短歌詠草 (しきしまのみち)

第一班

福岡教育大 大槻 躬信

君が代の高き調べの歌声は心にひびき胸のたかなる

眼下には桜島見えて霧島の高原の風はだにすずしも

国際経済大 根岸 正幸

台風のはげしきさまのしのばるる杉の木立ち

の傷跡見れば

友どちの和歌を詠まんと思へども素直な心いでこず我れは

日本大 浜口 清

霧島のふもとの里の静けさをとほに護らむ日の本の国に

熊本大 高岡 正人

霧島の出湯の里に立ちのぼる硫黄の煙はるかに見ゆる

長崎大 鈴木 志郎

静座してただく思ふこの身をば我が神の為燃やし尽くさん

九州大 堀田 真澄

夜遅くかけつけ来ぬる友どちのいかにしてもてふ心のうれし

ひとたびは家へもどりてさらにまたかけつけしことおろそかならず

かくばかりそろひあひたる心もてこの合宿をみのらせゆかむ

慶応大 伊佐 裕

山頂に雲かかりたる桜島裾野を広げて湾上にあり

第二班

長崎大 小島 明

去年の夏ひとり登りし霧島を今日同胞と登り行くかな

九州大 前田 秀一郎

乗りものの不便を忍びて全国ゆから集ひて式はじまれり

全国ゆ集ひ来ませる友どちと心一つに歌ふ君が代

友皆の声はしだいにたかまりて力強くも響き

渡れり

国のため斃れし人も集ひ来て共に君が代歌へるごとし

亜細亜大 渋谷 啓一

霧島の青く澄みたる高原で初めて友らと歌つくるなり

神戸大 高橋 敏人

霧島ゆはるかに眺むる桜島の錦江湾に浮かぶ雄姿よ

台風のすぎて晴れたる大空にそびえてたてり

高千穂の峰

専修大 福田 篤志

桜島を近くに望む高原で心静かに我をふりかえる

中央大 佐野 和利

霧島の強き日射しを身に浴びて友ら歩まむ展望台へ

歩みつゝ真剣に語りあふ友どちの後姿に心ひかるる

鹿児島大 四ヶ所 敏夫

台風の中、霧島の友をしのぶ

台風の強き雨風吹き荒れて自然の強き思ひ知らざる

嵐は鳴り灯は消えてただ一人心に浮かぶは霧島の友

嵐の中いかにしつらむ友どちは無事であれよとただ願ふのみ

第三班

中央大 石井育英
霧島神宮駅に友どちを迎へにゆきて

汽車のつくそのたびごとに幕をもちて友らのも来るやと案じつつ待つ

熊本大 佐小田 学
緑濃きあたり一面の木々の葉にわれの心もひとつにとけゆく

日本大 久保田 義一
桜島の遠く浮ぶを眺むれば大和心のよみがへりくる

亜細亜大 土田 広生
高原を流るる風にはろかにも波うつ草の美しきかな

九州大 佐藤 則夫
青草の繁りし原にたゞずめば心地よき風吹きなでてゆく

慶応大 和田 正一

草原に眼とじればわが耳に友の歌詠む声の聞え来

早稲田大 藤井 貢
見渡せばひのき木立ちのなみづくそのさ緑のうるはしきかな

第四班

亜細亜大 北原 康国
霧島の宿に迎ふる友どちの笑まひをみれば疲れ忘るる

東京外語大 井上 春雄
タオル持ちいそぐ山道ひとときの雲のかけりにやすらぎ覚ゆ

上智大 山口 良男
合宿地に友を迎ふ
その友は旅の疲れて大の字に眠りてゐたり身じろぎもせず

吾はすぐ話しかけたしと思へども友を案じてそつと帰りぬ

九州大 佐久間 弘二
古への人ゆ伝へこしやまと心我学はずばいかに帰らむ

法政大 高山 直幸
見も知らぬ我が着くを祈り待ちしと述ぶる友どちに心うたるる

熊本大 折田 豊生
よそよそしくふるまひ過ごせし友どちも一夜を越せば笑顔かはせる

一夜越して初めて友に声かくれば何とはなしに嬉しかりけり
佐賀大 松田 敏男

村松先生のご講義を聞きて
生き方を正せと言はるる言の葉は心の底にしみにけるかな
鹿児島大 畠 中宗一

はるかにも山の連なりしそのかなた開聞岳のうかべるが見ゆ

第五班

西南大 脇岡 俊一

諸先生のご講義に接して
日の本を守り育てし師の君のみ教えとはに絶やさじと思ふ

成蹊大 富田 泰史
嵐去り雨風やみしひとときを草に座りて虫の音を聞く

亜細亜大 林 正紀
涙して講義をさるる先生と一体になりてしばし動けず

秋田大 栗山 隆

雲白しその美しさにわれみとれ歌よむことを
しばし忘るる

慶応大 重松 賢一
去年の夏雲仙に集ひし友どちと写真を撮りけ
り霧島高原に

法政大 鈴木 良知
えんがわで蟬の鳴く声聞きをればはずしき風
の山ゆ吹きくる

九州大 戸早 哲郎
幾重にも連なる山のそのかなた静かに見ゆる
桜島山

鹿児島大 定栄 安治
暮れなづむ山の端にかかると一筋の夕焼け雲を
あかず眺むる

第六班

中央大 岩上 隆一
み友らと肩ならべゆくこの道のたのしき語ら
ひわれは忘れじ

九州大 木村 秀晴
大合宿準備の折に
硝子戸の割るゝ音してかけつけければ血だらけ
になりて友の立ちたる

病院に急ぎ行きたる友どちは額の傷に五針も
縫ふとふ

皆共に頑張りてこしに病院に待つらむ君が無
念さを思ふ

法政大 井上 常憲
嵐去り姿美しき桜島参加せざりし友にも見せ
たし

鹿児島経済大 森 茂木
雲晴れて姿をみせし桜島嵐はすぎてはれやか
に見ゆ

慶応大 仁熊 浩
霧島ゆ遠く眼下を見渡せば芥のごとき人の世
のさま

熊本大 坂本 精児
はじめての合宿教室で放送の係とな
りて

大きくせよ小さくせよといふ声に講義も聞け
ずつまみを握る

亜細亜大 成田 義人
素直なる幼な心で学ばなむ古へよりの敷島の
道

鹿児島大 太田 勘
ろうそくのあかりをたよりに合宿の準備急ぎ
ぬ嵐のさ中に

第七班

亜細亜大 林 光夫

霧島の山道たどり歩みくればはるかかなたに
桜島見ゆ

熊本大 栗原 茂
霧島の山に登りて眺むれば空の青さのいとす
がすがし

夏の日の朝の日射しはさわやかに人と語るも
心なごみぬ

法政大 渡辺 利己
はるばると薩摩国原ながめをれば古へさなが
らただに静けき

玉川大 青木 常泰
嵐にもめげず集ひし友どちと共に過ぎむ三泊
四日を

わくむくと出ずる白雲ながむれば心ひらかれ
たかなりおぼゆ

日本大 藤井 伸一
幕末の志士を偲びつつ眺むれば桜島山われに
せまりく

京都大 鈴木 睦夫
桜島を眺めて暮すもあと三日甲斐ある日々
なさんとぞ思ふ

福岡教育大 金沢 明夫
少しでも早く行きたき心地して夜行列車に我
は飛び乗る
夜あけて霧島近くなりければ思ひははする合

宿教室

霧島に着きし我れらを迎へ来し友の心のあり
がたきかな

鹿兒島経済大 成尾 勇一

野分吹くこの原に立てばいにしへのますらを
の声ひびくがごとし

早稲田大 開 克史

さらさらと音を立てつつ草原をなめるごとく
に風の吹きゆく

第八班

九州大 吉田 哲太郎

友達と飯くひをればさわやかな涼しき風の吹
きて来るなり

緑なす山のかなたに真白き入道雲の湧き立つ
が見ゆ

早稲田大 富田 欣三郎

合宿に來る途中、唐津にて

草枕旅のつかれにうち伏して海鳴りの音には
つと目のさむ

亜細亞大 光山 和秀

合宿地に着く

ホテルの前にかゝげられたる垂れ幕のみ歌し
よめば疲れやすまる

東京大等 健次

真夜中に着きたる我を暖かく迎ふる友に疲れ
忘れき

熊本大 前川 深

北島先生の講義を聞きて

防人の心根ひたにつたはりて我が父母のしの
ばるゝかな

学習院大 坂本雄二

霧島へとはやる心を抑へつつアナウンスにぞ
耳を傾く

日の丸を見上ぐる時ぞ我が祖国を思ふ心のこ
みあぐるなり

鹿兒島大 出田 哲朗

ひろがれる青空のかなた山の端にまぶしきば
かり雲かがやけり

高原で友らと共ににぎやかに写真をとるは菜
しかりけり

慶応大 鈴木 利明

合宿の友

たゞ単に話す友らと異なりて集ひし同胞の瞳
光れり

第九班

亜細亞大 福岡 達

雲間より日射しもれきて嵐すでに過ぎし喜び
胸にわきくる

せみの鳴く緑の山に踏み入れればいづこともな
くきこゆせせらぎの音

明治大 白鳥 健

たまゆらのけふのいのちを鳴くせみの声わが
むねにしみるがごとし

緑濃き山の辺に湧く雲の姿よその雄々しきを
ますらを我に

長崎国際経済大 竹下 成美

桜島悩むわれらをやさしくも見守るごとく遠
く浮べる

鹿兒島大 山辺 尚幸

朝に夕にふりあおぎ見し桜島はるか彼方に小
さくみゆる

拓植大 鶴間 二郎

うたよまむとみ山を行けど道のべは見る影も
なし崖くずれして

東京大 小田村 初男

合宿の開会予定日に友らを迎へる

為、台風による崖くずれをとり除き
し時よめる

嵐ざりくずれたる土砂を友どちと力あはせて
とりのぞきたり

嵐ざり友らの來るを思ひてはスコップ持つ手
に力こもれり

中央大 田沢 紀雪

おくれ来し友をしみればなつかしく去年こぞの雲
仙心に浮かびく

中央大 富山 徳久

人のため命を捧ぐとふ友の言葉強くはあれど
信じたしを

第十班

東京大 宮本章 夫

そより立つ入道雲を仰ぎつゝ歩めば草は風に
なびけり

鹿児島大 徳丸 雅信

台風のためホテル孤立したるときよめる

ろうそくの灯をたよりに友どちと友を迎へる
標語を書けり

山は裂け電話はとだえてをりたれどたゞ友を
待てり心ひとつに

九州大 小柳 左門

事前合宿に参加したる友達が折から降り
し大雨に合宿地へ向ふ道の整備に当りた
ると聞きて

崖くづれ道をうめたる泥あまた裸になりて運
びしといふ

合宿に集ふ友らを何としてもむかへむとして
泥運びしといふ

汽車動かす道さへぎらうとも合宿地に友ら次
々に集ひ来たりぬ

集ひ来る友らを見ては喜びて迎ふる友の心い

かにか

亜細亜大 中館 勝治

南国の林の中で鳴くセミはあらしのすぎしを
喜ぶごとし

岡山大 柳生 史 登

日をうけて白く輝く雲の下はるかにかすむ桜
島山

熊本大 田之上 正 明

まだひとつこの合宿に来りしがさだかならね
ど道ひらけゆく

第十一班

京都産業大 笹山 一 義

汗ばみて友と登りし霧島にそよ吹く風のこと
ちよきかな

早稲田大 桑原 清 春

くつろぎてわが身を草にうづむれば涼しき風
の心地よきかな

鹿児島大 高村 経 明

すみわたる空にそびゆる山々を見れば心のき
よまる思ひす

東京大 青山 直 幸

事前合宿―台風襲来―
ろうそくの火をながめつついかにして合宿せ
んかと智恵を集めつ

亜細亜大 成田 幸太郎
故郷ふるさとを遠く離れて霧島の深き緑ぞなぜかなつ
かし

神奈川大 小菅 俊 男

ますらをの国を思ひて市谷に残せし檄に身は
ふるひ立つ

九州大 岩下 正 幸

さしのぼる朝の光にかがやける日の丸見れば
胸ひきしまる

専修大 青砥 誠 一

かがやける海山背にし桜島かすみをままとひ横
たわりたる

第十二班

亜細亜大 安田 誠

霧島の濃き緑をながむるも心なごまず空を見
上ぐる

法政大 佐藤 敏 晴

そよ風にふかれてなびく草の間に友ら集ひて
語らひをれり

九州大 石元 審 明

車窓よりあまたの景色をながめつつすぎこし
旅をしみじみ思ふ

大分大 野尻 哲 雄

緑映ゆる山路を下りて横岳をめざして友らと

語らひ歩く

中央大 笠原敏夫

混濁の偽善に満ちたる世なれども我は歩まん
一筋の道

早稲田大 原川 猛雄

野尻君の到着を電話で知らされて

ノックする音の聞えて我いそぎ戸を開きて友
を迎ふる

何時くるかと思ひし友はほゝえみて戸口に立
てりつかれもみせず

第十三班

法政大 伊藤 祐

話しても話し足らざる思ひして友にふたゝび
語りかけゆく

熊本大 松田 信一郎

胸内の洗はるる如き思ひして師のみ言葉にじ
つと聞き入る

慶応大 小竹 正記

雄大なパノラマに向かへど我はたゞ歌よめず
して途方にくる

福岡大 古賀 勉

合宿に障碍のりこえ集ひ来る友の心はみなひ
とつなり

玉川大 小池 晃

霧島の高原たかはらに立てば桜島雲をいただきて雨の
ふるらし

九州大 川井 泰彦

話しやめ風ふく原に寝ころべば友らの声のた
のしく聞え来

青山学院大 石橋 守雄

昨日きのうまで他人と思ひし若者わかしゅとうちとけ語りぬ
旧友のごとくに

鹿児島大 梯 祥郎

霧島の野原もとの下ゆ風吹き上げ乱るる髪をかき
あぐる友

第十四班

九州大 久々宮 章

遠足の帰りに

ひとり走りふたり走ればそのあとを先を競ひ
てみな走り出す

ゆるやかにカーブ描ける山道をわれもつゞけ
り友らのあとに

亜細亜大 村上 勤

おほらかに姿見せたる桜島雨ふるらむか姿か
すめり

明星大 丹沢 文夫

霧島の赤き土を手に握りしめ学びてゆかむと
心さだめぬ

大分大 野田 清文

友達と肩くみあはせ入道雲の白くわきたつ桜
島見る

関西学院大 福田 豊

山すそゆ吹きくる風を身にうけてせのびをす
れば我すがすがし

早稲田大 藤 俊輔

台風でくずれし土砂を除かむとはげみし友ら
の労苦偲ばゆ

杉の香をかきて山道過ぎゆけば暑さ忘るる心
地するなり

九州大 松島 貴志

山の上にま白き雲のむくむくとわきあがる見
ゆ青空を背に

第十五班

東京大 伊藤 哲朗

国武先生のご講義をお聞きして
心こめ思ひのたけを語られし師かたせの顔かほのはれや
かに見ゆ

思はずも手を握りしめ胸のうちを語る御声は
さげんばかりに

鹿児島大 楢木 直

霧島は集中豪雨に洗はれてみどり色冴え夏さ
かりなり

長崎大 富 永 泰 介
初めてで歌のよみ方がわからずに五七五七と
数へるばかり

拓植大 妹 尾 恭 治

高原に立ちて眼下をながむれば清き光の雲間
よりさす

亜細亜大 成 田 諭

目にしみる木々をとをしてはるかに薩摩の
勇峰桜島見ゆ

岡山大 納 所 実

霧島に向ふ列車は通はずと聞けど我れにはな
すすべもなし

霧島の駅頭に立てば友どちのバスを仕立てて
迎へたまへる

第十六班

熊本大 福 永 好 紀

村松先生のご購義をお聞きして

師の著書を読みしときより一目なりとも会ひ
たき望みいまだかなひぬ

御講義の二時間といふ時の間の短かきことよ

夢のごとくに

国際基督教大 大 野 幸 一

なだらかに続く緑に連なりて遠く霞みし桜島
見ゆ

思ひがけず風の運びし雨粒の顔にかゝるはこ
うちよきかな

早稲田大 西 山 芳 克

合宿にむかふ車中にて

車中にて話かはせし友の目に並々ならぬ決意
ぞ光れる

亜細亜大 村 田 隆 和

南国の澄みわたりたる青空に日の丸ひとときわ
さえて見ゆるも

霧島の山の上にも蟬の声しげく鳴きをり熱き
日射しに

玉川大 川 尻 博 宣

汗かきて着きし草原に腰おろし昼のむすびを
口にはおぼる

鹿児島大 小 原 芳 久

霧島のはるかに続く山なみをみれば心の澄み
ゆくおぼゆ

友どちの真心こめし言の葉に我もすなおに語
りあひたし

長崎大 西 田 伸 二

遅れ来し友の元気な姿見てよくぞ来たなと肩
たゞきあふ

第十七班

亜細亜大 駒ヶ峯 純 一

雄大に空を流るる雲見ればせまきおのれのあ
はれに思はる

鹿児島大 山 本 俊 一

霧島神宮駅にて

降りたちてなつかしき友の顔見ればうれしく
なりてつかれ忘るる

山の上赤くそまりし白雲の黒くなりゆくさま
はかなしき

玉川大 石 黒 栄 信

嵐去りて残りし傷を氣にとめず自然はあたか
も生きてをるごとし

皇学館大 芦 原 高 穂

若人の集ひの中でいざわれも心ゆくまで語り
あひなむ

東京外語大 古 屋 明

はるかなる雲の行方を見てをればたのしき声
の聞えくるなり

九州大 青 山 昭

講義にて

幾度か声もとぎれて語氣激しく我等をみつめ
て語りたまひき

熊本大 山 田 範 人

うぐひすの声すがすがしき道々に枯れし桜の
枝のさびしき

福岡教育大 木 原 健 夫

そよ風にゆれるささの葉ながむればわがふる
さとの思ひださるる

展覧台にて

早稲田大 広瀬 清治

草むらに友らと坐りてにぎりめしをほゞばり
ながら語りひするも

桜島の手前のあたりかすみつつはるかに見え
て夕立ふるらし

第十八班

国際基督教大 工藤 高史

吸ひこまるゝごとき青空のひろがりて遠くに
浮ぶ桜島山

鹿児島大 野間口 俊行

一日遅れて合宿に来て

あと数日を頑張れと励まし給ふ師のみ言葉の
ありがたきかな

東北大 後藤 和文

霧島で見知らぬ友と語りあひ学びあへるをう
れしく思ふ

皇学館大 白江 恒夫

台風のさなかにありても友達は今合宿準備に励
みあはらむ

友達を待ちていままさむ霧島へ早くつきたしと
心はやれり

東京大 滝沢 勝美

草原に一人わけいればぎりぎりすの声すゞし
くも聞えくるなり

九州大 栗原 俊男

山の上白雲浮ぶ青空の夏の光のまぶしかりけ
り

福岡教育大 小林 至

木内先生の御講義のをりに

先生の日本の行くへを述べ給ふ話におもはず
吸ひ込まれけり

スケールの雄大な話を聞き終わり握りこぶし
の汗に気づきぬ

成城大 坂田 道一

年かはり再びあひし友どちと写真をうつすは
楽しかりけり

第十九班

東京外国語大 安納 俊紘

あくまでも澄みわたりたる青空をながめつつ
居れば心やすらぐ

日本大 熊倉 幸一

濃き薄き緑の中にたたずめば合宿の疲れしば
し忘るゝ

心こめ語らるる師の御言葉に胸あつくなりじ

つと聞きぬる

慶応大 栗原 博行

一昨年の闘病生活をふりかえつて

病床に日記つけよと言ふ父の言葉のまゝに日
記記しぬ

面会が終らむとしてさし出せし父の手をばし
かたにぎりし

九州大 大野 英則

台風にわがゆく道はふさがれて往かむとすれ
どもひきかへすのみ

鹿児島大 矢野 忠行

左手に澄みわたりたる大空のいや遠くに見ゆ
桜島山

九州大 天本 和馬

合宿に行く列車の中にて

混みあへる列車の中に年老いし行商人らしき
夫婦のをれり

やゝありて行商夫婦は手を取りあひ包みをと
きて整理を始めぬ

赤黒く日焼けし給ひしその顔に暑きさかりの
商ひを思ふ

幾年をともに商ひし給ひしか二人のみ手に深
き皺あり

第二十班

熊本商科大 中園俊郎

たんたんと静かにかたたるゝ師の君の涼しき
まなこにむねうたれけり

鹿児島大 仁多永夫

友どちと行列なして歩みをればさはやかな風
の吹きぬけてゆく

道の辺ゆ広ごる山すを見おろせば心さやけく
なりてきにけり

中央大 森内豊隆

朝夕に桜島見つゝ住む人のあると思へばうら
やましきかな

東京工大 井原透

霧島の緑の草原のひろびろと広ごるまうへに
白き雲の湧く

九州大 十時一郎

かくのごとく清き自然に囲まるゝ我が日の本
はありがたきかな

亜細亜大 梶山政利

思ふことそのまゝ詠まば良きものとうなづき
つつも筆はすすまず

慶応大 西博嗣

澄みわたる空にそびるゆ大杉の揺るる小枝に
心ひかるゝ

早稲田大 山口秀範

国武先生の御講義をきゝて

孝允の苦しき胸内語らるゝわが師のみ声はひ
たにふるへき

幕末の志士の心はそのまゝに師の御心ゆ伝は
りて来ぬ

第二十一班

南日本放送 安木憲政

かねてより見慣れし景色なれど美してふ友の
言葉に心うごきぬ

中村建設(株) 山田肇

夏の日昇る朝日に誓ひけり我が人生のゆく
べき道を

益山 茂

夏の日日傘のやうな白雲のかかりてそびゆ
る桜島山

日本遺族会 板垣淳次郎

霧島の台地に立ちてみわたせばおのれがすが
たのあまりに小さし

高千穂相互銀行 西山義朗

高原の涼しき風を身にうけてしばし語らふ多
くの友らと

高千穂相互銀行 江藤正俊

緑こき草木のしげる高原に集ひし友とともに
語りむ

官崎交通(株) 船木敏靖

駅頭で我らを見出し友どちは疲れし顔に笑み
をうかべたり

鹿児島興業信用組合 西田輝樹

もどかしくなる

市民大学講座 浜田博子

国武先生の御講義を聞きて

国思ふますらをの心語らるる師は感極まりて
御声つまりぬ

国思ひ生命を捨てし人々は我等と同じ年頃と
いふ

いふ

家事手伝い 高村真澄

霧島ゆながむる遠き海山のそのまたかなたに
友を偲ぶも

日本編物専門学校 高村恒子

二日前はじめて会ひし友達と語りは尽きぬ霧
島の夜

宮崎銀行庶務部 寺原三保子

山かげの夕焼け空に日の丸のたちし姿に心ひ
かるる

第二十二班

中村建設(株) 上野高義

霧島にのぼりて見ればはるかにも桜島山なが
めやらるる

鹿兒島興業信用組合 本村 健三
合宿に遅れんとする友どちの真剣な顔胸に迫りく

高田工業所 前田 哲秀
山上ゆながむれば常に桜島真白き雲のかゝりて見ゆる

高千穂相互銀行 森 厚機
霧島に集ひし友と語りをればいつしか心は澄みゆくおもひす

鹿兒島興業信用組合 松崎 純一
誰かしら上にゐるらし笹舟の時折せせらぎを流れくるなり

海上自衛隊 石戸 勇太
松風の騒ぐ丘べにいこふときタバコのうまさたとふかたなし

航空自衛隊 村山 寿彦
照りつくる日ざしの山路歩みゆけば吹き来る風の心地よきかな

高千穂相互銀行 河野 邦夫
満天の空を仰げばふるさとの笑ひし吾子の顔思ひ出す

第二十三班

熊本・出水中学校教諭 衛藤 純一
先達の思ひしのべば死への覚悟いまだしきわ

れのいとも恥かし

熊本・山鹿小学校教諭 瀬口 忠一
えぐられしけはしき崖の片隅に目にしむごとし紅カンナの花

熊本・天草高浜中学校教諭 斉藤 恵
台風をつきて集ひしみ友らと語らひをれば若がへるごとし

久留米・城南中学校教諭 藤丸 国彦
歌よめと言はれて悲し我がこころ歌らしき歌の言葉いでこず

熊本・山鹿小学校教諭 白木 敏和
心をこめてわが友どちと日の本の国の行く道を語りあひけり

熊本・京陵中学校教諭 田中 慶博
霧島の山あひに住む人々の日々の暮らしはさびしかるらむ

久留米・南小学校教諭 中村 清輝
霧島の峰に立ち居て木の間より眺めつゝをれば故郷ぞ恋しき

熊本・五福小学校教諭 豊田 幸弘
わづかなる命にもへて山蟬が夜明けをまちてきほひ鳴きおり

熊本・南関南中学校教諭 徳永 宗正
昨日まで見知らぬ友とうちとけて竹馬の友のごといまは語りをり

熊本・南関第三小学校教諭 赤木 忠明
吾子等はすでに寝にしか旅先の夜のしじまにそつと目をとづ

火山灰地に

第二十四班

久留米・荘島小学校教諭 馬場 フミ子
合宿で我を見つめて語りかくる友の声に世のさびしさ思ふ

久留米・宮ノ陣中学校教諭 近藤 嘉登
木洩日の和らかに射す杉木立清らなる冷気に安らぎおぼゆ

久留米・京町小学校教諭 塚本 正宏
生命かけ維新を遂げし人々の育ちし土地をはるか眺めけり

久留米・荒木小学校教諭 青木 正信
合宿に老いも若きも集ひきて友となりてぞ語りあひけり

熊本・清水小学校教諭 福富 二人
霧島の朝のしじまに上りゆく日の丸の旗のすがすがしきかな

熊本・南関南中学校教諭 徳永 宗正
昨日まで見知らぬ友とうちとけて竹馬の友のごといまは語りをり

熊本・南関第三小学校教諭 赤木 忠明
やうやくに霧島の地に着きにけりはるか阿蘇

へのまわり道して

熊本・神尾小学校教諭 木崎 武 弘

合宿で道を求めて語りあふ心あらたに古へしのびて

第二十五班

久留米・善導寺小学校教諭 白土 浩

霧島のみどり重なるかのはてに特攻基地のありしと聞くも

久留米・宮ノ陣小学校教諭 山浦 耕 治

霧島の草木を見つうつりゆく今の世のすがたしみじみ思ふ

久留米・南小学校教諭 山崎 寛

夕暮の松風の音にうちまじりひぐらしの声の流れてきこゆ

久留米・草野小学校教諭 千頭 康 夫

草原に身を横たへて見たせばはるかかなたに桜島見ゆ

久留米・高良内小学校教諭 末崎 利 治

霧島神宮駅にて

はろばろと集ひきまししわが友のすがしき声をきくぞうれしき

久留米・日吉小学校教諭 柳 邦 彦

みんなみの遙かかなたを眺むれば雲のかかりし桜島見ゆ

熊本・藤園中学校教諭 清田 清 蔵

暁時雨降る山道を登りてゆけば紺碧の空に白雲の湧く

熊本・花園小学校教諭 東 正 知

国のため思ふ心の一筋にあらしをつきて霧島へ行く

第二十六班

鹿児島大 鈴木 由美子

事前合宿に参加された方々を思ひて

鳴り狂ふ嵐の中に過ぎるる友を思へばわが胸いたむ

すなほなる心に語る友どちにつつまれし身の幸せをおもふ

鹿児島大 内山 なな子

日頃から感動うすき我ゆゑか歌をつくるに言葉いでこそ

今よりは青空のごと限りなく澄みし心を持ち続けたし

上智大 角 丸 泰 子

真青なる大空のもとに日の丸のはためく姿うつくしきかな

鹿児島大 吉行 ゆう子

照りつくる太陽の下わが母は汗を流して歎とりまさむ

玉川大 佐原 深 雪

霧島に台風の中をたどりつき迎ふる友に心安らぐ

台風を案じておられる川井先生にお会いして

赤き目に夜もいねられず合宿をいちずに思はる御心を感ず

師の君のやつれし様に合宿をいちずに思はるみ心をおもふ

青山学院大 柿 並 雅 子

霧島の連なる山のそのかなた海に浮べる煙ふく島

熊本大 黒川 幸 子

あざやかに海に浮びし桜島近くによりて見まほしく思ふ

鹿児島大 吉原 たつ子

父母をおもひ国を思ふを忘れなばこの世に何のよろこびかあらん

鹿児島大 小山 さよ子

涼風を顔いつばいにうけながらおにぎりをおもたりおさな子のごと

師の君のニューモアあふるるお話にやつと心がときほぐされけり

第二十七班

官崎交通(株) 本部 城 聖

嵐去り一人二人と集ひくる友等のズボンは泥にまみれたり

高千穂相互銀行 山口 忠 信

朝日さす霧島山のつつじ花いつ咲くらむかと思ひつつ見る

明星大学助手 金 平安 男

うつくしき霧島の地に心こめ真の生甲斐を学び求めむ

南日本放送 平 田 美 雄

青空にひかり輝く夏雲のあまりの白きに友を呼びとむ

日本遺族会 飯 森 照 男

合宿所の窓ゆながむる桜島にかりし雲見ればふるさと思ふ

鹿児島興業信用組合 永 野 正 人

おだやかに眠るがごとく遠く見ゆわがふるさとの桜島山

中村建設(株) 本 間 俊 男

霧島に登りてみればひたすらに心ひかるゝ桜島山

高千穂相互銀行 中 山 能 道

嵐つきてやつとたどりし霧島に友と語れば喜

びわきぬ

第二十八班

熊本・清水小学校教諭 稲 津 正 典

霧島の山にありても独り旅に行きにし吾娘の無事を祈るも

熊本・菊水小学校教諭 森 澤 正 昭

霧島へ心はずませ家を出れば台風にあひ心あせるのみ

久留米・屏水中学校教諭 山 中 孫 四郎

嵐ざりし朝の広場もさはやかに上る日の丸あはぎ見るかも

熊本・豊水小学校教諭 福 原 和 富

夏空の陽ざしの強さ身にうけていまみはるかす薩摩国原

久留米・南筑高等学校教諭 西 尾 金 十郎

汽車おくれ夜半になりしに駅頭に迎ふる友のいとど嬉しき

久留米・諏訪中学校教諭 猪 飼 幸

住みなれし我がふるさとをはなれきて友と語りて道をもとむる

久留米・牟田山中学校教諭 大 坪 豊

さし昇る朝日をうけて上がりゆく日の丸の旗のまぶしかりけり

溪流の深き響きを下にして友等と登る青葉の

路を

熊本・菊鹿中学校教諭 松 永 栄 助

夏あらしのつめあとを歩き驚きぬこの山奥に死者のありてふ

第二十九班

熊本・八千把小学校教諭 橋 本 洗 心

山なみは遠くつゞきてはなる錦江湾に桜島見ゆ

熊本・第一中学校教諭 石 原 貢

日向路を走る列車の車窓より波浪おさまりし海原の見ゆ

熊本・代陽小学校教諭 宮 坂 斌

緑なす涼しき山を友どちとくさぐさのこと語らひてゆく

熊本・日奈久小学校教諭 寺 田 陽 徳

緑濃き道進みゆけば思ひ出づ昨日の嵐のはげしきさまを

熊本・二見中学校教諭 則 座 正 治

立ちしまゝ食する吾に気持よく席ゆずり娘の心うれしき

熊本・城北小学校教諭 梅 田 司

整然と植込まれたる杉苗木の伸びゆく姿のいともうるはし

大学教官有志協議会

順天堂大助教授 鈴木 満男

夕されば夕ぐらしの声しるくしてこの山なかの緑は深し

国民文化研究会

国民文化研究会理事長 小田村 寅二郎

八月九日朝

雨音を耳にすと思ふやたちまちに雨足早くはげしく降り来ぬ

窓の外は霧立ちこめてはるかなるつねのながめもいまは消失せつ

大きな木々は梢も大ゆれにゆれてなびけり吹きくる風に

今朝にしてまたも新らたに颪風の起りしきざしかこの風雨は

深山辺につどふ友らの別れゆく日の近づくに雨よ晴れかし

国民文化研究会副理事長 浜田 収二郎

六日朝合宿地の電話不通のため丸尾

局に向ふ

雨あがり風やみたれど土砂くづれ多く起りて道をふさぎぬ

泥まみれの人々に出会ふ丸尾より土砂をわたりて来りしといふ

この道路のゆく先いかにあらむとも人とほるなりうれしからずや

鹿兒島大学教授 川井 修治

夏雲のわき立つ下にひろされる薩摩国原一望に見ゆ

広々とひらけし原のそここに多みつ語りつあそぶ若きら

涼風のさわたる草場に腰おろし友らとともにうつつを撮る

時ならぬあらしにあひて苦悩せし三日前思へば夢の如しも

八代市助役 加藤 敏治

長内兄を偲びて

西空に残る光のうすれつゝ薩摩国原夕ぐれにけり

遠空にかすかに見えし開聞ははやくも隠れぬ眺めあかぬに

桜島に夕居る雲を眺めつゝはるかに君を偲びるるなり

北海に離れてあれば来ることかなはぬ君を偲びるるなり

七夕のちぎりにあやかり一年に一度の会ひを楽しみをりしに

君が顔見えぬさびしさにぎわしく集ひし友と語らひをれども

長内兄をおもふ

修猷館高校教諭 小柳 陽太郎

合宿の友らにそぐみおもひのただに迫りく胸いたきまで

嵐はげしく吹くとふしらせいかばかり心いためて聞きたまひけむ

もろびとの力集めて合宿は遂にひらかれぬと君につげやらむ

嵐すぎて晴れしみ空にまぶしくも天そより立つ雲の目にしむ

もろともにながめしかの日きながらにしづもりて立つ桜島山

君まさばと思ひつつ見るみんなみの空に美しき夕焼けの雲

福岡教育大学講師 山田 輝彦

けぶり噴く桜島山まなかひにけさやかに見ゆ真昼日のもと

戦ひにいでゆく友ら寄り集ひ酒酌みまししその日偲ばゆ

月読は照り透りたり天地をどよもし過ぎし台風のあと

友らみな力つくして道ふさぐ土砂のけしといふに涙ぐまるる

共同通信論説委員 島田 好衛

碧瑠璃の空を覆へる夏雲の流るるなべに桜島

見ゆ

舞岡八幡宮宮司 関 正 臣

霧島展望台にて

見さけやる目路も遙けく立てり見ゆる開聞岳
のなつかしきかな

昭和の初めの頃を思ひて

すめろぎのみゆき寿ぐ村人の群れし辺りかも
霞む岸辺は

熊本県林業専門技術員 瀬上 安 正

かの山かけの町に吾子は居るらむに此の合宿
に來ぬを悲しむ

親の思ひ伝へ得ざりし悲しみのひたによせ來
る霧島の原

宝辺商店 宝辺 正 久

国思ふ人らとならむ若きらが薩摩国原見さけ
つゝ立つ

われら立つなだら草原海につゞき桜島山見れ
どあかぬかも

開聞の岳さへ遠に見ゆるなり霧島草野風そよ
ぎつゝ

松風の音さわやかに聞きのつつ友と飯とる草
原木かげ

安田信託銀行 松 吉 基 順

緑なす櫓の林に風そよぎ木立の奥にひぐらし
の鳴く

見あぐれば韓國岳の頂ゆ真白き雲の湧き出づ
るかも

大阪府大芝小学校教諭 岡 村 義 一

合宿参加の途中台風十九号にあひて

心のみ霧島にはせどなすすべもなきがまゝに
て時は過ぎゆく

見も知らぬプラットホームに降りたてばなつ
かしき友四人いませり

たき出しの弁当配る駅員の心労偲ばる赤き眼
見れば

福岡県宇美商業高校教諭 小 林 国 男

高原の草原そよぐ涼風に吹かれてうまきにぎ
りをほゝばる

東急建設(株) 奥 富 修 一

合宿に向かふ途中、徳島空港に降り
たち、黒上先生を偲ぶ

はからずも合宿に向かふ道すがら師の君の郷
土の土を踏みにき

緑野に囲まれし郷土に師の君は今やすらかに
眠り給ふらむ

み教えを守りうけつぎゆきますと誓ひて霧島
へ向かひ立つ 吾は

先に東京を発ちし友らのいまだ着か

ずと知りて

我らより先に発ちにし友の身の無事なりませ

とただいのるなり

幹線の不通の報を聞くもたゞ友らの胸内のい
かにと思ふ

熊本県嘉島中学校教諭 北 島 照 明

短歌導入講義を担当して

「やれるさ」とわがこと思ひ述べられし師の
御言葉にささえられこし

友どちの「しつかりやれ」と肩たたくその心
ばせ万の力なり

皇宮護衛官 亀 井 孝 之

車中にて

台風の影響うけてすすまざる列車の窓ゆ外を
ながむる

灯のともる台所見え妻と子はわが家にありて
いかにと思ふ

大阪大学研究生 東 中 野 修

坂本竜馬の話の聞きて

国のため生命を賭してはたらける竜馬の姿う
かぶがごとし

いつしかに身は歴史の中にひきずられ胸の高
まり覚えてならす

日本自動変速機(株) 古 川 修

霧島の空をそめつつ山の端にいままさに日の
沈まむとする

講談社 磯 貝 保 博

合宿開催準備のをりに

ねむれぬまゝに一夜をあかしてつてふ師の顔は
笑ひ給へど疲れの見えて
夜なべて友らむかへにやみのなかの友の車の
出発しにけり

新日鉄八幡製鉄所 今 林 賢 郁

すさびゆく世のさま見つつひたぶるにみくに
のいのちを思ふこのごろ

神奈川県横浜翠嵐高校教諭 国 武 忠 彦

色紙を貼りたるやうな青き空白き雲みて山道
をゆく

富山県高岡ろう学校教諭 岸 本 弘

神宮駅に合宿参加の友を迎へて

一人でも多くの友の来てしがなと汽車つくご
とに祈り待ちけり

集ひくる友らの数の増しゆけば心もややにほ
ぐれゆくなり

着きませりなつかしき師や友達の前つらなり
て歩み来ませり

鹿児島県清水中学校教諭 江 口 正 弘

高きよりはるけき空を見つむれば寂しかりけ
り山の夕暮

神奈川県横浜平沼高校教諭 福 田 忠 之

岸本君の友を思ふ歌をよみて

友思ふみ歌をよめば友どちの熱き心に胸こみ

あぐる

熊本市中学校教諭 松 浦 良 雄

歩みきて木影に立てばすがしがし汗ばむ肌
に風の吹ききて
嵐つき合宿に集ふみ友らのかくも多きをたの
もしく思ふ

豊林省林業試験場 行 武 潔

思ひがけず六年振りに友にあひて

久々に友に会ひたり思はずも「元氣か」と声
を掛けたり

六年前不治の病と苦しげに語りし友はここに
いませり

完治したる訳にはあらずと語り給ふも今はと
もあれ友はすこやか

おへるさだめに負けず生きませ友がきよ吾も

また負けず生きんとぞ思ふ

兵庫県姫路北高校教諭 伊 藤 三 樹 夫

霧島の高原とほくながむればやまなみはるか
緑つづけり

友どちとなごみて語れば緑こきこの高原に風

ぞすずしき

東京工科大学院理工学研究科 大 岡 弘

うち続く山はらのきわ雲と海を結ぶがごとく

雨けぶり立つ

けぶり立つ雨の次第にうつりゆきて桜島をも

つひに隠しぬ

鹿児島銀行 南 正 人

久々に友との語りになごみてさわやかなる
かな霧島の原は

メディックス貿易(株) 古 賀 保 臣

すがすがしき朝日をうけてのぼりゆく日の丸
の旗の美しきかな

青々と連なる山並ながめつつにぎりをはば
り語るは楽し

亜細亜大学学生課 三 谷 文 雄

台風をいとわず友ら次々に集ひきませる姿た
のもし

熊本市経済部長 徳 永 正 巳

読みふける書に光のさしこみて面上げ見れば
緑目にしむ

読みさしの書をおきつゝ山かひの清き流れに

しばし見とれつ

ただ一人客の降り立つ山かひの小さき駅に椿

実のなる

なつかしき友等の顔をしぬびつゝさやけき朝
の旅路楽しも

旅 館 業 青 砥 宏 一

一年の思ひをこゝに友しらの集ひの庭にゆか

ざらめやも

気ぜわしく荷物まとめて満月の近き夜ふけに

汽車にのりたり

上段の列車寝台狭けれど一人たぬしも友らしのべば

いねられぬ夜汽車の床に合宿のテキスト読むに心しまりぬ

小泉明会計事務所長 小泉 明

さまざまにてだてて尽して集ひ来る多くの友ら意気さかんなり

熊本県砥用東中学校教頭 北島 道治
十九号台風にあひて

霧島の集ひへの道は絶えたりと聞けどもいよゝゆかんと思ふ

はるばると回りに行けば行く道は有りとし聞きてたどりゆくなり

佐賀工業高校教諭 末次 祐司

千とせあまりふりにし今もせまきくるまこと
のしらべ防人の歌

亜細亜大学教授 夜久 正雄

海山は遠くひらけて開聞のうすがすむ見ゆ南の果に

ひぐらしの鳴く音かなしくくれてゆく島山見れば神代おもほゆ

霧島の大き夜ぞらに月照りて白雲清く立ちたなびけり

そちこちに友らの語らふ声のして更けゆく月

夜心捉らへり

九大医学部大学院 友池 仁暢

国武先輩のご講義を聞きて

政治にも目を開くべしとさとされし先輩の言葉の強くひびきく

新技術開発事業団 野間口 行正

班別討論で友が職員のこと語るを聞きて

神宮のプラットホームで駅員が直立をして電車迎ふてふ

名は無くも仕事に打込む姿に友は感じぬ日本
の心を

神奈川県新城高校教諭 山内 健生

国武先生のご講義を聞きて

魂の乗り移ることく語らるる先輩の御顔の心に残りぬ

先人の熱き息吹きに触れずして歴史を説くすべいづくにありやと

久留米大学附属高校講師 小野 吉宣

出来るだけ多くの友の来れよと祈る気持ちで受付につく

ぞくぞくと疲れもみせず集ひくる友らでロビーはわきかえるなり

嵐にもめげずに来たるみ友らと心をこめて学びあひたし

鹿児島西高校教諭 相徳 和義

定時制の生徒達へ

この年も思ひをこめたる言の葉にふれし喜び
いかに伝へむ

働きつつ学ばむとする生徒らに湧きくる思ひを語り伝へむ

第一生命保険相互会社 藤崎 義之

空も海も山の緑もうるはしき大和の国は永久
にかくあれ

うつりゆく雲のかたちはおもしろし夏空高く
流れゆく雲

日本青年協議会 梶島 有三

展望の開ける丘の横岳は見渡すかぎり緑なり
けり

千代田コンサルタント(株) 上村 和男

高原の平らなところを見いだして土俵をつくり
友らすまうとる

すまうとる友等の顔のはつらつと疲れもみせず
うち興じをり

神奈川県箱根町小学校教諭 岩越 豊雄

幾重なす山なみはるか南に開聞御岳のかすみ
て見ゆる

けむりたく桜島山しづかなりあつき地熱をうち
にこめつつ

岡山県操山高校教諭 三宅 将之

わが家にて合宿へのはやる心を述べ

窓の外を吹きすさぶ風強くして家もはげしく
ゆらく心地す

台風の直撃受けてふ霧島の集ひの庭はいかに
あるらむ

夜明けよりダイアルまはせど南の友らに電話
はとどかずてあり

みんなみの集ひの庭に我ら待つ友らの思ひい
かばかりならむ

強風に電線の鳴る街角を小竹をもちて走る子
らあり

富士学院教務部長 加部 隆 三
霧島にいかにかもして行きつかむとはやる心
を抑へかねつも

友らいまいかにもすらすらむ吾はいま霧島に着け
りもはやひと息

煌々とあかりのつきて合宿は営まれをれり力
湧きくも

山陽電軌株不動産課長 加藤 善之
豊かなる大植林の緑こきひたにひろがる陸摩

国原
鹿兒島学習塾経営 湯通堂 義弘

風雨の中、危険を冒して椅子を合宿
会場に届く

霧島に降り注ぎたる大雨を集めてうなる新川

峡谷

パンパシとフロントグラスに降りつける雨音
聞けば心くもり来ぬ

摺り足で進む心持しつつも友等集ふ山のホテ
ルに今や到りぬ

腕打振り歓声上げて寄り集ふ友等の笑顔に心
踊りぬ

鹿兒島県阿久根市中学校教諭 宮内 盛孝
共々に学びていかむ清らかに深き心をわかち
あひつゝ

熊本県立御船高校教諭 片岡 健
三年前真夏の山に汗かきし開聞岳のはるかに
見ゆる

九大医学部神経内科学大学院 田村 潔
九大医学部神経内科学大学院 田村 潔

遠がすむ桜島山ながめつつ若き友らと語り合
ひけり

宝辺商店 宝辺 幸盛
これから聞く師のみ言葉をよく聞きて思ひの
まを歌に詠みなむ

日の本の国の行く道定むべきときといはれし
言葉せまりく

宇部興産(株) 内田 敏彦
嵐去りいとも険しき山道に出迎ふる友の有り
難きかな

ひぐらしの声遠くなりて霧島のきよう一日も

暮れゆかむとす

山口県庁 金津 洋雄
高杉晋作の歌を詠みて

誓ひたる言葉守りて国のため励みし君の姿に
うたるる

忠死せる友の御魂に歌おくりまた国のため励
む君はも

亜細亜大学講師 倉前 義男
立ちのぼる積乱雲をいたゞきて桜島山眼下に
見ゆ

ふるさとの開聞岳も遠く見ゆ高隈山に降る雨
も見ゆ

たらちねの母のみことの眠ります浜のあたり
はかすみで見えず

大分県国見町社会教育主事 三重野 梯次郎
長内兄よりの御便りを頂きて

年毎に十年の夏を会ひし君の今年は今来まさず
淋しかりけり

夕食の折呼び出され渡されぬ君が御便り速達
二通

宵待草さびたはまなすくさぐさの蝦夷地の花
の歌書きてあり

蝦夷地なる君がくらしと訪ね来し家族との逢
ひと別れを念ふ

道の辺の花の名を問ひ答へしもこの合宿の帰

りなりけり

その花のムクゲは咲けり御便りにムクゲの歌
の三首ありけり

電源開発十勝電力所・在北海道

長内俊平

(便りに添へて寄せられし歌)

今日もまた氷雨となりぬかかなべて十日も雨
の降りこむといふに

あだに日のうちすぎゆきて一年に一度の集ひ
の日ごと近づく

おもかげに見えてはなれず高原に車馳せつづ
月仰ぎしを

日商岩井総務課・在ニューヨーク

沢部寿孫

(ニューヨークより打電)

をちこちゆ集ひきませる友達と相語りたき思
ひせつなり

ひたすらに励みいまさむ友どちの思ひに我も
連ならざらめや

見学者

亜細亜大学 進藤義彦

はるかにふるさとをのぞむ

山なみのきはまる果てに湧く雲の流るる果て
ぞわがふる里は

神武御東征を偲び奉りて

弓を立て剣とり佩き国見せしみおやしのびて
我れここに立てり

長野小野壮蔵

雲かぶる桜の山峰はるかにて夕映の霧島に緑
もえ立つ

事務局

国民文化研究会事務所 永沢弘子

開け放つ窓ごしはるかに浮びをる風の後の桜
島山

最高裁判所秘書課 西川伍朔

夏草の波白々と光る丘にバイクに乗る人あり
歌詠む人あり

共立女子大 松尾新子

指をりて字数かぞへて首かしげ筆のすすまぬ
人もありけり

あまりにも美しき眺めにてふさわしき言葉い
でこずもどかしくなる

福岡大 吉田和隆

鳥の声聞きつつ道を進めどもまだ頂を見ぬ高
千穂の峯

若松高山田典子

この夏の思ひ出とならむ霧島の遠くにかすむ
桜島山

九州女学院 北島あや子

壇上で御講義なさる兄上の無事すまさるるを
うれしく思ふ

修猶館高 秋重実夫

霧島の山ふところろにいだかれて都会の生活を
しばし忘るる

修猶館高 小柳志乃夫

台風の災いの中遠方より参加の方々今着かれ
たり

数十時間汽車はおくれぬと語りたまふ人々の
声も今は明るし

桜島の山の左手南のはるかあなたに開聞の見
ゆ

薩摩富士のその名のごとく美しき姿見せたる
開聞の山

岸和田市光陽中 岡村多加志

うつすらと丘のむこうの桜島ひと目なりとも
母に見せたい

下関市東部中 加藤多夏詩

不安だかそう思ひつつ来てみたが会へてうれ
しきわが友だちに

下関市東部中 加藤詩麻音

ドアの前ぬいだぞうりをそろえるとああ多い
なとまた思ふなり

あとがき

秋も日ごとに深まろうとしている今日このごろ、「霧島合宿教室感想文集」がようやくできあがりしました。合宿終了後、在京の国民文化研究会・若い会員グループにより、数次にわたる編集会議、その後の編集作業を経てできあがった。

この「合宿教室感想文集」が毎年編集発行されるようになってから、今年で第七集をむかえる。合宿終了時のあわただしい時間ではあったが、各々真剣な思いで書いた感想文をそのままにしておくのは惜しい、合宿当時の真剣な思いを再び思い起こし、さらにその思いを持続させる一助になればとの願いより編集されてきた。

そこで、この感想文集の編集方針は当初より、①参加者全員の感想文をできるだけ全文収録する、②合宿の全容をできるだけわかるように伝えることの二点に絞られていた。

しかしながら、毎年実際に編集作業を進めると大変むずかしい問題がでてくる。特に感想文については走り書きのためか、文意のやや不明なもの、人により文章の長さが違うものなどがでてくる。紙数のかぎりもあるもの、文章を割愛せざるをえない。又文意不明

の箇所は編集者一同が丹念に読み直し、できるだけ原文にそって筆者の意を汲むよう心をくだいて加筆訂正している。しかし力不足のため不十分な点もある。等々の問題をのりこえ今年も又最大限の努力を重ねてこの感想文集作成に取組んできた。

こうしてできあがった感想文集だけに、願わくば自分の感想文だけでなく、全員の感想文に目を通していただければと存じます。合宿教室で経験されたことの一つでも思い起こされ、且つ現在の自分の気持が再び確かめられるものとなるならば編者としてこれにすぐる喜びはございません。

思えば、合宿以降、日本はますます激動の時をむかえていくようです。

日本を覆がえそうとする過激派学生の行動は尋常ではありません。ドル問題、中共の国連加盟など国の内外の動きは大きく揺れ動いております。

こうした時代にあつて、この感想文集が学園生活の中で、あるいは各々の生活の場で活かされるような方法がないものでしょうか。

あれば是非おしえていただきたい。それを皆では非やうてゆこうではありませんか。

編集と校正に協力して下さった国文研・若いグループの亀井孝之、国武忠彦、福田忠之、大岡弘、白石肇、小郷進、大竹良男の諸氏、並びに和歌詠草編集に際して、選択作業をしていただいた片岡健、北島照明及び小柳陽太郎先生にお礼申し上げます。
(磯貝保博記)

(資料)

第十六回「合宿教室(霧島)」感想文集

非売品

昭和四十六年十一月十日発行

編集兼発行者

東京都中央区銀座七一一〇一八柳瀬ビル

電話(五七二)一五二六七番

社団法人 国民文化研究会

理事長 小田村寅二郎

編集委員 野間口行正・磯貝保博・古賀保

臣・山内健生・奥富修一

